BULLETIN
OF
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM
&
ARCHAEOLOGICAL CENTER
OF
YAMANASHI PREFECTURE
NUMBER 31
CONTENTS
MARCH 2015

The Political Power of Yamato Viewed Through the Kofu Basin (3) — KENJI Kobayashi 1
— Cylindrical Haniwa from Kai Choshizuka Tumulus —

The ancient salt products pottery from Takizawa site in Kawaguchiko in Yamanashi Prefecture — OSAMU Hirano, RYOSAI Miyama 17

(Research note) Organize basic data on wood relic of Yamanashi Prefecture — RYOSAI Miyama 29

For excavated human bones in Kai-Chazuka (Kankanzuka) ancient burial mound — KAZUHIRO Sakaue 39

A study of the face-marked pottery based on the survey of Hiratamiya2 site — KUNIO Amikura 47

Stones and Forms of chipped stone axes — YASUO Hosaka 53
— Materials analysis of Sakenomiba site "1" District —

Consideration about the History of the Excavation of Hanasaki Irrigation Canal in Otsuki Yamanashi Prefecture — MASASHI Shinohara 61

研究紀要31 2015 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

ISSN0910-3295

研 究 紀 要 31

目 次

甲府盆地から見たヤマト（3）
ー甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪ー …… 小林 健二 1

山梨県富士河口湖町滝沢遺跡出土の古代製塩土器 …… 平野 修 / 御山 亮済 17

山梨県出土の木質遺物に関する基礎データの整理 …… 御山 亮済 29

甲斐茶塚（かんかん塚）古墳出土人骨について …… 坂上 和弘 39

白目を剥いた人面墨書土器
ー平田宮第２遺跡７号土坑出土資料をめぐってー …… 網倉 邦生 47

打製石斧の石材と形態
ー山梨県酒呑場遺跡１区の資料分析ー …… 保坂 康夫 53

花咲用水開削の歴史についての考察 …… 篠原 真史 61

2015 山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター

序

このたび、山梨県立考古博物館ならびに山梨県埋蔵文化財センターの日頃の研究成果の一端を掲げた『研究紀要』第31号を刊行する運びとなりました。

本号は７編の論考を掲載しております。

小林健二「甲府盆地から見たヤマト（３）－甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪－」は、過去２回にわたって進めてきた銚子塚古墳出土遺物の再検討という論考の三回目となるものです。前回の対象は壺形埴輪でありましたが、今回は円筒埴輪を詳細に分析する内容となっております。

平野　修・御山亮済「山梨県富士河口湖町滝沢遺跡出土の古代製塩土器」は、平安時代の製塩土器（固形塩を運搬する容器）に関する資料報告で、その流通経路にまで考察を加えた興味深い論考であります。今後の更なる研究成果が期待されます。

御山亮済「山梨県出土の木質遺物に関する基礎データの整理」は、県内の遺跡から出土した木質遺物を最新の発掘資料も含め初めて集成した論考です。

坂上和弘「甲斐茶塚（かんかん塚）古墳出土人骨について」は、風土記の丘公園内に位置する茶塚古墳出土人骨の分析結果であります。まとめでは乗馬習慣の可能性等にまで触れられており興味深い結果が示されております。

網倉邦生「白目を剥いた人面墨書土器－平田宮第２遺跡７号土坑出土資料をめぐって－」は、人面墨書土器の中でも白目を剥いた例に注目し、その描かれた背景について考察しております。

保坂康夫「打製石斧の石材と形態－山梨県酒呑場遺跡Ⅰ区の資料分析－」は、報告書には掲載できなかった443点の打製石斧についての資料紹介と詳細な分析が行われております。

篠原真史「花咲用水開削の歴史についての考察」は、著者自身が行った花咲用水関連遺跡の発掘調査に関連し、その用水の歴史的な背景の調査をまとめた論考であります。

考古博物館ならびに埋蔵文化財センターでは、これからも山梨県の考古学・歴史学研究のため、埋蔵文化財の周知を目指す様々な活動に努力を重ね、より一層の充実を図る所存であります。本誌が少しでもその趣旨に寄与できれば幸いであるとともに、各位からのご教示と忌憚ないご意見を賜りますようお願い申し上げます。

２０１５年３月

山梨県立考古博物館長　萩　原　三　雄

山梨県埋蔵文化財センター所長　八　巻　與志夫

甲府盆地から見たヤマト（3）
－甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪－

小　林　健　二

1．はじめに
2．甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪
（1）円筒形埴輪
（2）朝顔形埴輪
3．円筒埴輪の型式分類
（1）円筒形埴輪の分類
（2）朝顔形埴輪の分類
4．甲斐の前期古墳と円筒埴輪
5．まとめ
6．おわりに

1．はじめに

前稿「甲府盆地から見たヤマト（2）」（以下、「前稿」とする）では、甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪を取り上げ、それまでの成果に新たな資料を加え、暫定的ではあるが型式分類を行うとともに、甲斐地域での壺形埴輪の変遷や位置づけ、さらにその背景について検討を行った（小林 2013）。この中で筆者は、畿内型の大型前方後円墳として評価される甲斐銚子塚古墳ではあるが、壺形埴輪は周辺地域の影響を受けて甲府盆地内で主体的に生産を行っていたと考えた。

これを踏まえ、本稿では朝顔形埴輪を含めた円筒埴輪を取り上げる[1]。前稿で若干触れておいたが、埴輪の研究史については筆者がここで詳しく取り上げるまでもなく、他稿を参照していただきたいが（車崎 2004など）、埴輪の起源や系譜に関する多くの研究を経て（上田 1959、近藤・春成 1967ほか）、1978年（昭和53）に発表されたいわゆる「川西編年」（川西 1978・1979・1988）により、円筒埴輪の研究は大きく進化（深化）し現在に至っている。この中で、甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪も時間軸（川西編年Ⅱ期）に位置付けられたが、以後、東国各地においても円筒埴輪による首長墓編年や生産・流通などについて活発に議論されるようになった。

このような動向の中、東国への埴輪の波及に関わって、甲斐地域の円筒埴輪について本格的に取り上げた橋本博文氏は、「特殊器台系譜の初期円筒埴輪」を持つ甲斐銚子塚古墳と笛吹市岡銚子塚古墳との間に政治的同盟関係を想定し、さらに駿河の松林山古墳、毛野の朝子塚古墳出土の埴輪との形態的・技法的類似性から、そこに畿内と東国との強い結び付きを読み取ろうとした（橋本 1976・1980ほか）。同時期の畿内の埴輪との比較や、共伴する埴輪及び副葬品との組み合わせなどから、この解釈は後に見直されることになったが（高橋 1994）、東国の初期埴輪から古墳時代の政治過程を具体的に論じたものであった。

その後、甲斐銚子塚古墳では2次にわたる史跡整備事業に伴い発掘調査が行われ、周知の通り多くの成果が得られている（坂本 1988ほか）。これらのうち埴輪については、後円部南側に設定した4－1号トレンチ（4－1T：第1図）及びくびれ部付近に設定した5号トレンチ（5T）の墳丘テラスにおいて、基部が樹立された状態で確認された。また、同じ5号トレンチからは円筒形埴輪（第4図19）、朝顔形埴輪（第5図24）、壺形埴輪の大形の破片が出土し、壺形埴輪は全体の形状が、円筒形埴輪・朝顔形埴輪については、口縁部（口頸部）から胴部凸帯（最上段）までが復元された。これらは、甲斐銚子塚古墳、並びに当該地域を代表する埴輪として山梨県立考古博物館に展示されることとなり、後に山梨県指定文化財となっている。

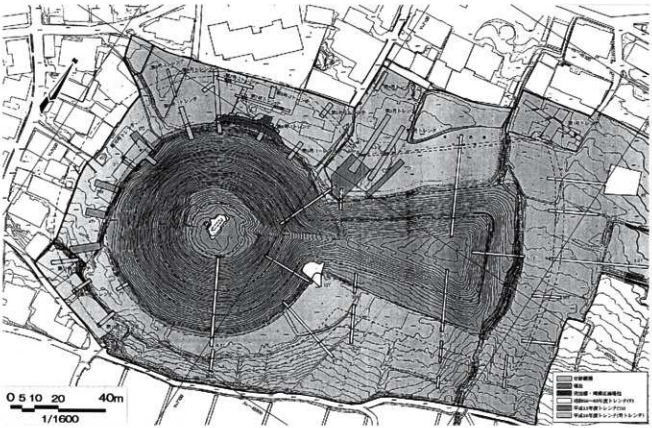
しかし、それ以外の埴輪については、ほとんどが小破片であり、磨滅したものが多いため、唯一全体の形状がわかる壺形埴輪は別にして、その後の資料としての取扱いをより困難をもたらせていた。

本稿では、甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪について、これまでの報告成果に基づき、その形態的特徴を捉えることを第一の目的とする。その上で型式分類を行い、さらに当該地域における埴輪生産の動向について考えてみたい。

2．甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪

前稿同様、まずここでは甲斐銚子塚古墳出土の主な円筒形埴輪・朝顔形埴輪を概観しておく（第3～5図）。甲斐銚子塚古墳で発掘調査が行われた36箇所のトレンチ（本数は45）のうち（第1図）、最も多くの埴輪片が出土した第1次整備事業に伴う調査の報告書掲載資料を中心に再実測を行うとともに、第2次整備事業に伴う調査出土の資料も含め、未報告資料については今回新たに実測を行ったが、もちろん出土資料すべてではなく、あくまでも特徴がわかる資料に限定した。

なお、円筒形埴輪、朝顔形埴輪の各部位の名称については、前稿同様先学の研究成果を参考に第2図の通りと



第１図　甲斐銚子塚古墳全体とトレンチ配置

したが（置田 1977・山根 1992・廣瀬 2001など）、胴部の破片資料については、円筒形か朝顔形かの判別が困難であることから、ひとまず円筒形埴輪として取り扱うこととする。また、基部の破片資料も報告されているものの、胴部の段数、凸帯の条数は不明であり、全体が復元できないため、ここでは取り扱わないこととする。

(1) 円筒形埴輪（第３・４図）

１は口縁部の破片資料である。単純口縁で緩やかに外反し、口縁端部は横ナデで丸味を持ち、わずかに玉縁状で、口縁部径は44cmを測る。外面には斜めのハケ、内面は横・斜めハケによる調整が確認出来るが、内面は磨滅により一部不鮮明である。色調はにぶい黄褐色[2]で、胎土には赤色粒子や金色雲母を多く含む。

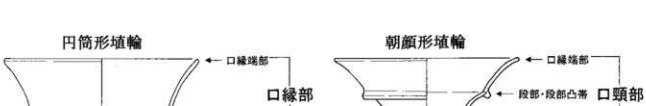
２は口縁部から胴部にかけての３分の１ほどが残存する大型の破片資料で、最上段の凸帯までが残っている。１同様緩やかに外反し、口縁端部は横ナデであるが尖り、内面に平坦な面を持つ。口縁部径は48.4cmで、外面は縦ハケ、凸帯から下の胴部外面は細かい縦ハケ調整である。口縁部内面は横ハケ調整であるが１部に輪積痕が確認できる。胴部内面は横ハケ後斜めのハケ調整。貼り付けの凸帯は大きく、上辺・下辺・側面が内弯し断面がM字形を呈するもので、幅2.7cm、高さ1.8cmを測る。器壁は1.4cm前後で出土埴輪の中でも厚く、色調は明黄褐色で、胎土には赤色・白色粒子、金色雲母を多く含む。

３・４は口縁部の破片資料である。３も外反口縁であるが、端部は面を持つ。外面は縦ハケ、内面は磨滅により調整は確認できない。色調は明黄褐色で、赤色・白色粒子、小石を含む胎土である。４は直線的に開く口縁部で、端部は玉縁状を呈する。外面は磨滅により調整確認不可、内面は横ハケ・ナデによる調整が確認できる。色調はにぶい黄褐色で、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。

５～10は胴部の破片資料である。５は磨滅により外面調整は確認できず、内面は横・斜めのハケ、ヘラナデによる調整で一部確認不可。M字形凸帯は貼り付けで幅2.6cm、高さ0.8cmで突出度は低い。色調は橙色、白色粒子、小石を多く含む胎土である。

６も胴部破片である。外面は縦ハケ、内面は横・斜めのハケによる調整で、長方形の透孔を開けているが１段あたりの孔数は不明。凸帯は突出度が高く、上辺・下辺が内弯するタイプのもので、貼り付け面の幅2.8cm、高さ1.8cmを測る。色調はにぶい黄褐色で、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

７は磨滅により外面・内面とも調整は確認できない。不整長方形とみられる透孔を開けているが、本資料も１段あたりの孔数は不明である。凸帯は６同様突出度が高く、上辺・下辺・側面共に内弯しており、幅3.0cm、高さ



第２図　部位名称図

1.9cmを測る。色調は黄褐色で、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

８も磨滅により外面調整は確認できず、内面は不鮮明であるが横・斜めのハケ調整がわずかに確認できる。凸帯は６・７と同様のタイプであるが、幅1.3cm、高さ1.7cmとやや小さい。色調はにぶい黄褐色を呈し、胎土には赤色粒子、金色雲母を含む。

９の外面は縦ハケ調整が確認できるが、内面は磨滅しており、指ナデと横ハケ調整がわずかに確認できる。透孔は逆三角形である。凸帯はM字形の貼り付けで、幅2.4cm、高さ1.3cm色調は同じくにぶい黄褐色、赤色粒子、金色雲母を含む胎土である。

10の外面には斜めのハケ調整が、内面は指ナデ後の横・斜めのハケ調整が確認できるが、いずれも磨滅により不鮮明であり、輪積痕が見られる。凸帯は断面台形で上・下辺の内側が少なく、幅2.1cm、高さ1.0cmと小さい。色調は明褐色、胎土には金色雲母、小石を多く含む。

11～18は口縁部の破片資料である。11は有段口縁部の破片で、口径は35.2cm、磨滅を受けているが端部は横ナデにより面を持つ。色調は黄橙色、胎土には白色粒子、金色雲母を含む。

12～14は端部が大きく外側へ屈曲するタイプで、12は口径39.8cm、端部は面を持つが、横ナデによりやや湾曲している。外面は縦ハケによる調整、内面は横ハケと見られるが磨滅により不鮮明。色調は明褐色、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。13は口縁端部上面が内彎し端部は丸味を持つ。外面は縦ハケ調整が確認できるが、磨滅により内面の調整は確認できない。色調は橙色で、胎土に白色粒子を含む。14は口縁部が内傾した後屈曲しており、端部には面を持つ。外面は縦・斜めのハケ調整であるが磨滅・剥離により不鮮明、内面は一部に横・斜めのハケ調整が確認できるのみである。色調は明黄褐色、胎土には赤色・白色粒子を多く含む。

15・16の口縁部破片は、端部に横ナデによる明瞭な面を持ち、跳ね上げ状を呈する。15は口径48.8cmを測り、外面調整は磨滅により確認不可、内面は輪積痕が見られナデと横ハケがわずかに確認できる。色調は明黄褐色～明褐色で、赤色・白色粒子、金色雲母を多く含む胎土である。16は口径51.6cmを測り、15同様外面調整は磨滅により確認できないが、内面はヘラナデ後横・斜めのハケ調整が確認出来る。色調は橙色で、胎土には赤色粒子、金色雲母、小石を多く含む。

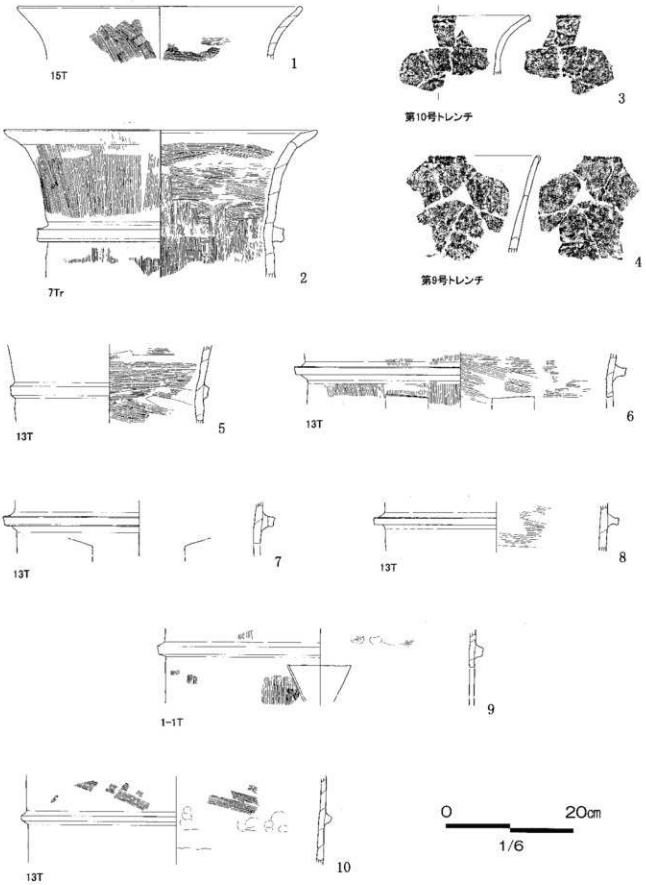
17・18も口縁端部に面を持つ小破片資料であるが、上方には突出せず垂下したタイプで、17は下方がやや厚く、18は尖る。いずれも磨滅により外面・内面の調整は確認できず、18は外面にわずかに縦ハケが残る。色調はいずれも橙色を呈し、胎土には白色粒子を含む。17には金色雲母も見られる。

19は15・16同様の口縁部を持つ大型の破片資料で、最上段の凸帯まで残る資料である。口径は43.7cm、外面は斜めのハケ調整、内面は横・斜めのハケ調整であり、凸帯の下に長方形の透孔がわずかに残っている。凸帯は鍔状に尖る特徴的なタイプで、横ナデにより上辺・下辺がわずかに湾曲しており、貼り付け面の幅2.5cm、高さ2.4cmを測る。色調は明黄褐色～黄褐色、胎土には赤色・白色粒子を含む。

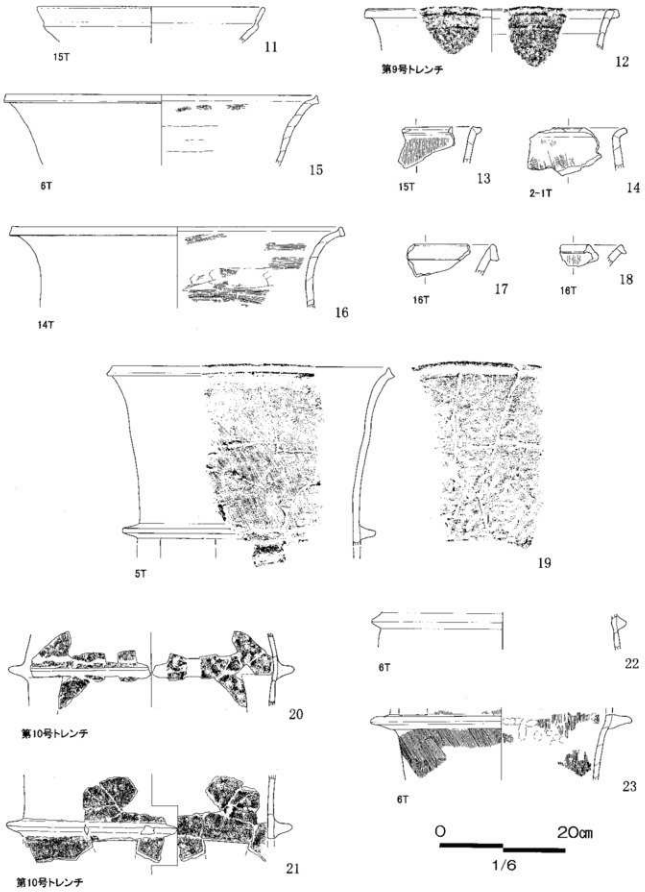
20～23は鍔状凸帯を貼り付けた胴部の破片資料である。20・21は同一固体の可能性があり、20は凸帯から上方がやや内傾している。ともに外面は縦ハケ、内面は指ナデ・オサエによる調整で、凸帯下に長方形もしくは逆三角形の透孔があるが、１段あたりの孔数は不明である。凸帯は19と同様のもので、幅3.1～3.2cmほど、高さ2.3cmを測る。色調は明褐色で、胎土には赤色・白色粒子、小石を含む。

22はやや内傾した胴部破片であるが、磨滅により外面・内面の調整は確認できない。凸帯は19～21に比べ突出度は小さく、幅2.5cm、高さ1.5cmを測る。色調は明褐色で胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。

23はやや外傾した破片資料で、外面は斜めハケ、内面は指ナデ・オサエの後縦・斜めのハケ調整が見られ、凸帯の上に長方形とみられる透孔がある。凸帯は大型の鍔状のものを貼り付けており、幅2.3cm、高さ3.3cmと突出度が大きく、横ナデにより上辺がやや彎曲している。色調はにぶい黄褐色、内面の一部は橙色を呈し、胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。



第３図　甲斐銚子塚古墳出土円筒形埴輪（１）
（１・６・９は筆者再実測、２・５・７・８・10は筆者実測、他は報告書より）



第４図　甲斐銚子塚古墳出土円筒形埴輪（２）
（11・13～17・23は筆者再実測、19は筆者再トレース・一部加筆、18・22は筆者実測、他は報告書より）

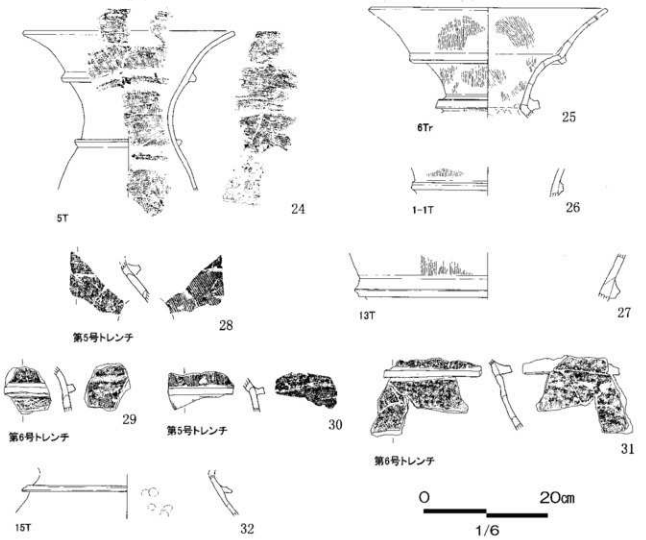
（2）朝顔形埴輪（第５図）

24・25は前稿でも取り上げた資料である。24は口頸部～胴部にかけて残る破片資料で、口径33.4cm、口頸部は屈曲せずゆるやかに外反し、段部は凸帯により二重口縁状にしている。口縁端部は横ナデにより面を持つ。胴部は肩が張らず細身の胴部になると見られる。器壁は薄く、外面は縦・斜めのハケ、内面は横・斜めのハケ調整で、胴部内面には縦ハケも確認できる。頸部・段部とも断面台形の小型の凸帯を貼り付け、幅1.3～1.6cm、高さ0.8～1.0cmほどを測り、頸部凸帯はやや下がった位置に貼り付けている。色調は明黄褐色～黄褐色、は胎土には赤色・白色粒子を含む。

25は口頸部の３分の１ほどが残る破片であるが、24に比べ口頸部の外反が大きく、明瞭な段部を持つ。口縁端部を欠損しているが、口径は推定で37cmほどが考えられる。外面は縦ハケ、内面は斜めのハケ調整が不鮮明ながら確認できる。凸帯は、段部のものは24同様幅1.5cm、高さ0.8cmの小型のものを貼り付けているが、頸部を巡るものは突出度が高く、上辺・下辺・側面共に内塑しており、幅2.3cm、高さ1.9cmを測る。色調はにぶい黄褐色、胎土には赤色・白色粒子、小石を多く含む。

26・27は頸部の破片資料である。磨滅しているが、外面調整は縦ハケが確認できる。頸部凸帯は断面M字形で、幅2.3cm、高さ0.9cmと突出度は少ない。色調は外面が橙色、内面はにぶい黄橙色で、胎土に赤色・白色粒子を含む。27は大型品の頸部と見られるが、26と同様磨滅により、調整は外面の縦ハケがわずかに確認できるのみである。器壁は1.2～1.5cmと厚く、M字形の頸部凸帯も比較的大きく、幅3.0cm、高さ1.3cmを測る。色調はにぶい黄橙色で、胎土に赤色粒子、金色雲母を多く含む。

28は頸部凸帯付近の破片資料で、凸帯は剥離により欠損している。外面は凸帯貼り付け部分に縦ハケ後の沈線



第５図　甲斐銚子塚古墳出土朝顔形埴輪
（24は筆者再トレース、25～27・32は筆者実測、他は報告書より）

が確認出来るが、凸帯下の外面調整は確認できない。内面は斜めのハケ調整である。色調は明黄褐色で、胎土に白色粒子、小石を含む。なお、透孔があるが形状は不明である。

29・30は胴部（肩部付近）の破片で、29は外面縦ハケ、内面は横ハケと凸帯の裏側は指オサエ・横ナデ、30の外面は縦ハケ、内面は横ハケ後縦ハケによる調整。凸帯はいずれも小さく幅1.7cm、高さ1～1.2cm、30は上辺・下辺が内塊している。ともに明黄褐色を呈するが、29は胎土に白色粒子が多く、30は赤色粒子が多い。

31・32は頸部凸帯～肩部付近の破片資料と見られる。31の外面は縦ハケ、内面は横ナデによる調整で、凸帯は突出度の大きいもので、貼り付け面の幅2.5cm、高さ1.9cmを測る。色調は明黄褐色、赤色・白色粒子を含む胎土である。32は磨滅により外面・内面ともに調整は確認できないが、内面に指ナデ・オサエが見られる。凸帯は幅1.5cm、高さ1.3cm、上辺と側面が内塊しているが、下辺はほぼ水平である。色調は同じく明黄褐色、胎土には赤色粒子、金色雲母を多く含む。

3．円筒埴輪の型式分類

甲斐銚子塚古墳出土の円筒形埴輪と朝顔形埴輪については、器壁の厚さや外面のハケ調整、凸帯の形状などを指標として、おおまかに区別できることは既に報告書にも記載されてきており、実際には円筒形埴輪、朝顔形埴輪それぞれに複数の型式が存在することは明らかである。一方、同じ二重口縁をもつ朝顔形埴輪と壺形埴輪については、口頸部までが復元できる場合において両者が判別できることは、前稿において述べたところである。

それでは、これまで見てきた形態的特徴をもとに、改めて円筒形埴輪、朝顔形埴輪を型式分類してみたい。しかしながら、はじめに述べたとおり、いずれも全体の形状を窺える資料は１点もなく、胴部の段数及び凸帯の条数は不明である。したがって、ここでも先学の研究成果を参考に（中井 1996など）、口縁部・口頸部から胴部にかけてと、凸帯の特徴をもとに分類してみたい。

(1) 円筒埴輪の分類（第６図）

まず、口縁部の形状であるが、全体の形状及び端部の調整をもとに、以下の５型式に分類する。

［Ａ類］ 胴部から逆八の字状に外反する口縁部。端部の形状をもとに、単純口縁のもの（Ａ１類）、端部が尖るもの（Ａ２類）、端部に面を持つもの（Ａ３類）、端部を跳ね上げ、明瞭な面を持つもの（Ａ４類）とする。さらにＡ４類は、胴部から緩やかに外反するもの（Ａ４－１類）、大きく外反するもの（Ａ４－２類）に細分する。

［Ｂ類］ 胴部から直線的に開くもの。

［Ｃ類］ 端部が大きく外側へ屈曲するもの。面を持つもの（Ｃ１類）、上面が内塊し端部は丸味を持つもの（Ｃ２類）、口縁部が内傾し端部が屈曲するもの（Ｃ３類）に細分する。

［Ｄ類］ 端部が垂下するもの。

［Ｅ類］ 有段口縁のもの。

次に、凸帯であるが、断面の形状から大きく４型式に分類する。

［ａ類］ 断面がM字形を呈するもの。突出度が大きいもの（ａ１類）、小さいもの（ａ３類）、中間的なもの（ａ２類）に細分する。

［ｂ類］ ａ類に比べ突出度が大きいもの。上辺・下辺・側面が内塊するものが多い。

［ｃ類］ 断面が台形を呈するもの。上辺・下辺が内塊するものがある。

［ｄ類］ 鍔状に尖るもの。突出度が大きいもの（ｄ１類）、小さいもの（ｄ３類）、中間的なもの（ｄ２類）に細分する。

これらのうち、口縁部Ａ２類とＡ４－１類については、前章で紹介したとおり、胴部最上段の凸帯までが復元できており、口縁部と凸帯の組み合わせが明らかとなっている（第３図２・第４図19）。つまり、円筒形埴輪としてＡ２ａ１類とＡ４－１ｄ２類の２点が、まずもって分類される。また、凸帯ｂ類も数量的には多く、ｃ類は後出的であることから、ａ類・ｂ類・ｄ類は円筒形埴輪の凸帯として採用されていると考えてよいであろう。

他の口縁部、凸帯についても、これらの組み合わせにより、さらに複数の円筒形埴輪の型式が想定される。しかし、実際には口縁部の形態を含め個体差が大きく、第３図２のように同一個体においても凸帯を挟んで上下の段で粗いハケと細かいハケでそれぞれ調整をしているものもある。また、器壁の厚いものと薄いものがあり、厚いものは貼り付く凸帯も大きい傾向にある。胎土（色調）もおおまかには、にぶい黄褐色、明黄褐色、橙色に分けられそうであるが、それをもって円筒形埴輪分類の指標とすることは、極めて困難と言わざるを得ない。

したがって、現状で判断できる円筒形埴輪Ａ２ａ１類とＡ４－１ｄ２類を、それぞれ円筒形埴輪Ⅰ類・Ⅱ類として、ひとまず大分類しておきたい（第８図）。

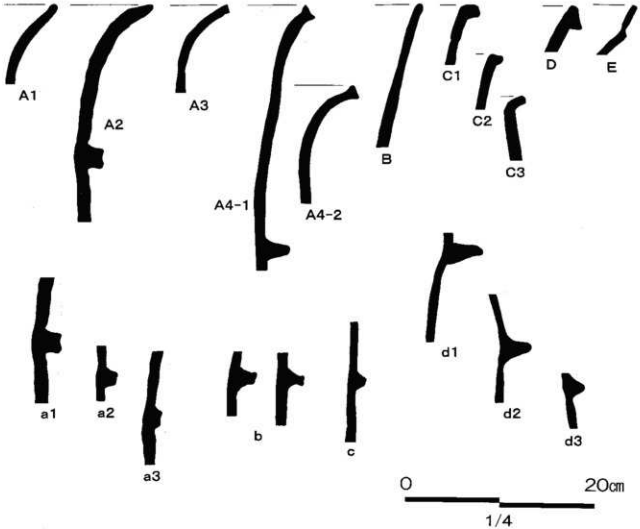
(2) 朝顔形埴輪の分類（第７図）

同様に朝顔形埴輪についても、口頸部まで復元可能な２点（第５図24・25）を基軸にして見てみたい。

［Ａ類］ 明瞭な段部を持ち、大きく外反する口頸部を持つもの。頸部は屈曲も明瞭である。

［Ｂ類］ 明瞭な段部を持たず、屈曲せずゆるやかに外反する口頸部を持つもの。凸帯により段部及び二重口縁を表現している。胴部にかけても肩が張らず、頸部凸帯の位置も頸部より下に貼り付いている。

凸帯については、円筒形埴輪と同様に分類するが、明確に朝顔形埴輪の頸部、肩部とわかる資料が少ないこと



第６図　円筒形埴輪の口縁部・凸帯断面図

から、突出度の大小をまとめて分類しておく。

［ａ類］断面がM字形を呈するもの。突出度が大きいもの（ａ１類）、小さいもの（ａ３類）、中間的なもの（ａ２類）に細分する。

［ｂ類］ａ類に比べ突出度が大きいもの。上辺・下辺・側面が内塊する。

［ｃ類］断面が台形を呈する小型のもの。上辺・下辺が内塊するものがある。

なお、第１次整備事業に伴う調査で、側面に刻みのある凸帯が１点出土し報告されているが、断面は台形というより正方形であり、違う印象を受けるが、ひとまずｃ類に含めておく。

Ａ類とＢ類では、形態の変遷、貼り付く凸帯から言えば、Ａ類が古く、Ｂ類が新しいが、円筒形埴輪同様やはり個体差である。段部凸帯はどちらもｃ類であるが、これは壺形埴輪にも共通する要素で、頸部凸帯以下のものを指標とすれば、朝顔形埴輪Ａａ類、Ｂｃ類に分類される。ｂ類と組み合う口頸部・胴部は不明であるが、円筒形埴輪に特徴的な鍔状凸帯ｄ類は確認できないことから、ａ類・ｂ類・ｃ類の凸帯が朝顔形埴輪に採用されていたことが考えられる。

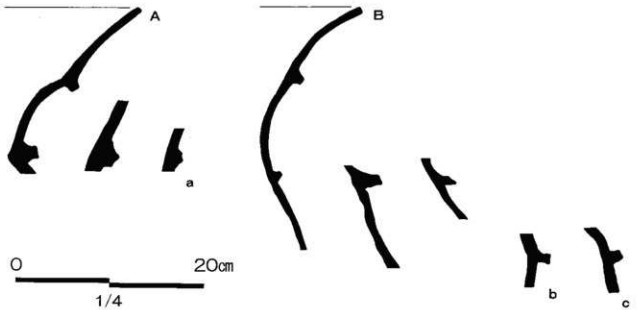
以上から、現状の口頸部及び胴部と凸帯から分類できる朝顔形埴輪Ａａ類とＢｃ類を、それぞれ朝顔形埴輪Ⅰ類・Ⅱ類と大分類しておく（第８図）。

4. 甲斐の前期古墳と円筒埴輪

甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪について概観してきたが、ここでは前期古墳の編年とともにもう少し範囲を広げて見てみたい。

円筒埴輪の編年については、現時点でも川西編年の枠組みの中で捉えられており、諸属性の見直しや細分が行われているが（一瀬 2004など）、基本的には川西編年は有効であることは、多くの研究者が認めるところである（廣瀬 2011、犬木 2011など）。

甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪は、周知の通り川西編年Ⅱ期（４世紀中葉～後半）に位置づけられており（橋



第７図　朝顔形埴輪の口縁部・凸帯断面図

本 1980・保坂 1999・2001)、筆者の古墳時代甲斐編年(小林 1998・2000・2010) では古墳Ⅳ期が併行する。川西編年は、副葬品の組み合わせなどからも整合性が裏付けられており、本稿で取り上げている内容は、その再確認に過ぎないのかもしれないが、ここで甲斐編年の各段階設定について、最新の動向をもとに詳しく整理してみたい。

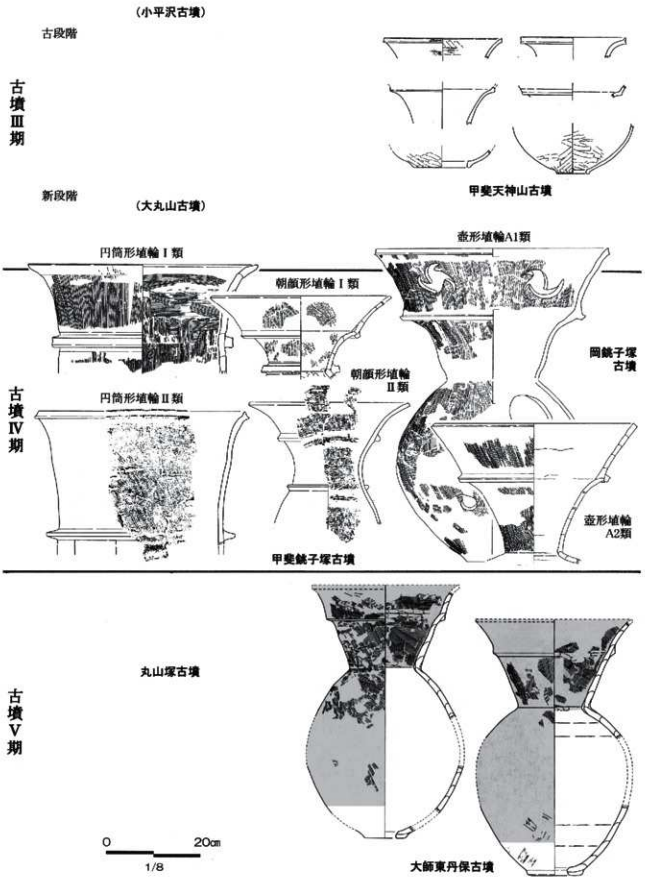
土器編年では、東海（赤塚 1990・1994ほか・北島 2000)、近畿（寺澤 1986・2002ほか・米田 1991・森岡・西村 2006・西村 2008ほか)、北陸（田嶋 1986・2008ほか)、駿河（渡井 1998・1999・佐藤 2014）との併行関係を示し、古墳では前方後円墳集成編年（広瀬 1990)、大賀克彦氏の広域編年（大賀 2002・2003ほか）や岸本直文氏の畿内編年（岸本 2011)、東海・甲信地域の編年（瀬川 2012）などを参考にし、さらに今回川西編年を加え修正した（第９図)。

土器編年の併行関係では、廻間Ⅱ式３・４段階と布留０式が概ね併行すると考えられ（寺澤 2012)、この時期が３世紀中頃であり、この段階で奈良県箸墓古墳が出現することから、定点となる。併行する甲斐編年は古墳Ⅱ期の段階である。また、近年の理化学的年代測定法が高精度な体系になり、布留式の年代は3世紀後半から４世紀後半にかけての期間が有力と考えられており（西村 2011)、前期の後半、甲斐古墳Ⅳ期は松河戸Ⅰ式・布留式中段階新相～新段階にそれぞれ併行し、須恵器の出現時期を考慮すれば、４世紀第３四半期を下ることはない。したがって、廻間Ⅲ式、併行する甲斐古墳Ⅲ期はこれまでより20～30年ほど間延びすることになり、廻間Ⅱ式とⅢ式の境界を３世紀末とした。さらに、廻間Ⅱ式１・２段階に併行する甲斐古墳Ⅰ期も20～30年ほど引き上げられることになった。

弥生土器と土師器の境界、並びに前期から中期への画期の問題については、別稿で改めて取り上げることとし、この年代観をベースに中道古墳群を見てみると、まず甲斐天神山古墳について、出土した二重口縁壺（第８図）を検討した結果、甲斐古墳Ⅲ期中頃に明確に位置付けられることとなり（小林 2014ａ)、この段階は４世紀第１四半期頃になる。先行する前方後方墳の小平沢古墳は依然として十分な資料情報に恵まれないが、これまで通り古墳Ⅲ期古段階（３世紀末から４世紀初め頃）とする。埴輪のない大丸山古墳は副葬品等の研究成果から甲斐銚子塚古墳に先行し（宮澤 1994・2014)、甲斐天神山古墳との間に位置付けられ、４世紀第２四半期となる。

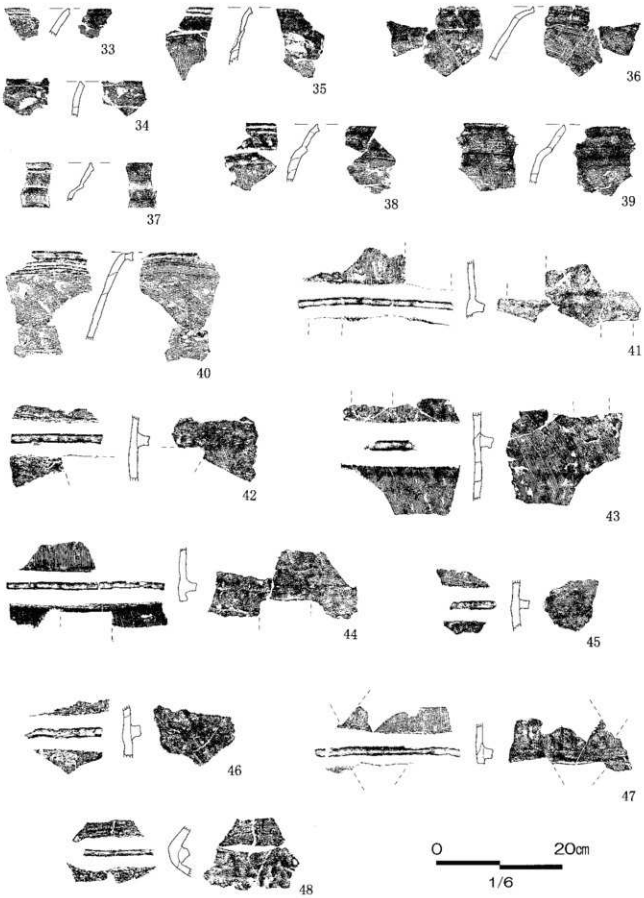
以上、土器編年を中心に中道古墳群の前期古墳４基について、実年代を再確認した。詳細に見れば、副葬品・土器（Ｓ字甕)・埴輪とすべて揃っている甲斐銚子塚古墳、土器が出土している甲斐天神山古墳（二重口縁壺）や小平沢古墳（Ｓ字甕）と、埋葬施設の構造や副葬品以外に時期が判断できる資料がない大丸山古墳とでは、根拠にしている年代の「物差し」に違いがあり、問題がない訳ではない。しかし、立地や墳形など、これまでの研究成果も考慮した上での年代観であり、前方後円墳集成編年の２～４期と川西編年のⅠ期とⅡ期の整合に課題があるものの、ここに示した併行関係は、現状では妥当なものと考えたい。

これらを踏まえ、再び円筒埴輪に戻るが、はじめに触れたように、橋本氏がかつて取り上げた論考において、甲斐銚子塚古墳と岡銚子塚古墳出土の円筒埴輪との比較検討が行われているが、岡銚子塚古墳ではその後整備事業に伴う発掘調査（伊藤 1995）においても円筒埴輪片が



第８図　甲斐地域における古墳時代前期～中期初頭の埴輪の変遷

第９図　土器編年と墳墓の編年（小林 2014に加筆）



第10図　岡銚子塚古墳出土円筒形埴輪・朝顔形埴輪（報告書より）

出土している（第10図）。この中では、本稿で分類した口縁部Ａ３類（33・34）、Ａ４類（35・36）、Ｃ類（40）、Ｅ類（37～39）が見られる。また、胴部破片（41～47）、朝顔形埴輪の頸部破片（48）に貼り付く凸帯については、いずれもａ類からｃ類のものであり[3]、外面調整、長方形・逆三角形の透孔をもつことや出土土器からも、川西編年Ⅱ期～甲斐古墳Ⅳ期であることが改めて確認出来る（第11図）。このうち、有段口縁の口縁部Ｅ類については、はじめに述べたとおり、従来は「器台系口縁」として「特殊器台系譜」の初期的要素をもつ円筒形埴輪として考えられていたが、畿内の埴輪構成との比較などから、現在では「地方的変容と古い要素との混交」として捉えられており（高橋 1994）、埴輪生産の系譜を一元的に畿内に追うことは難しいことも指摘されている（鈴木 2011）。その一方で、地方では埴輪の形態的・技術的情報が、古墳築造のたびに「中央直結の回路を通じて更新されるのが実態」であるとの見方もあるが（犬木 2011）、いずれにしてもその背景には、交通路を介したネットワーク（小林 2014b）による中央からの形態的･技術的情報とともに、「古墳の墳丘に埴輪を樹立する」という情報の共有が存在する。そこに周辺地域からの二次的伝播を否定することはできないだろう。

甲斐銚子塚古墳は畿内的な王墓、岡銚子塚古墳は在地的な首長墓であるとすれば（小林 2010）、埴輪製作に関しては、同じ甲斐古墳Ⅳ期に「同じ（墳形の）前方後円墳に埴輪を樹立する」という情報の共有のもと、埴輪製作が行われたことが考えられる。

また、甲斐銚子塚古墳に続く中期初頭の甲斐の首長墓である丸山塚古墳（第９・11図）からも、量的には少ないが円筒埴輪片が出土している。口縁部の形態はＡ３類、Ａ４類、Ｅ類のものが見られ、凸帯はｃ類が多い。これらも川西編年Ⅱ期に対比できるものであるが、築造時期は甲斐古墳Ⅴ期（４世紀末から５世紀初頭）であり、川西編年Ⅲ期併行の段階である。出土状況からも埴輪の樹立に積極的ではなかった（あるいは樹立されなかった）ことが窺えるが、畿内からの埴輪製作の情報が更新されなかったとすれば、この時期を「地域内埴輪体系の消滅段階」（風間 2008）と捉えることができる。さらにこのことは、「埴輪の有無は大和政権との関係を直接指し示す材料にはならない」（高橋 1994）とはいえ、少なからず大型前方後円墳築造停止とも連動するものと考えられ、以後中期前半にかけての円筒埴輪製作の一時的な断絶（保坂2001）に繋がることになる。

5. まとめ

甲斐銚子塚古墳出土の円筒形埴輪、朝顔形埴輪については、それぞれ大きく２型式に分類される。壺形埴輪に比べ、口縁部（口頸部）、凸帯にはバリエーションが存在し、円筒形埴輪Ⅱ類は鍔状の凸帯を持つ在地色の強いもので、詳細にはさらに複数の型式が存在する。しかし、大局的には川西編年Ⅱ期の枠組みを逸脱するものではない。

甲斐の古墳前期の円筒埴輪生産においては、中央からの形態的・技術的情報とともに、周辺地域からの情報の共有などがあり、これらをもとに４世紀後半（第３図半期）の短期間に、壺形埴輪とともに在地において集中的に生産を行ったことが考えられる。その後、甲斐の円筒埴輪生産は極めて低調になり、丸山塚古墳に残存した後一時的に断絶し、壺形埴輪のみが大師東丹保古墳（保坂 1997）へと引き継がれる（第８図）。

6. おわりに

甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪について、前項の壺形埴輪に引き続き、新旧の資料をもとに分析を行った。多くの破片資料を前に結果的に十分検討できたとは言えないが、東国屈指の大型前方後円墳に樹立・囲繞された埴輪群から、古墳時代前期における地方の埴輪生産の一様相を確認できたと思う。今後はさらに周辺地域との比較・検討を行いながら、製作技法や地域差などにも目を向けていく必要がある。

註

（1）論題の「円筒埴輪」とは、ここでは「円筒埴輪」に「朝顔形埴輪」を含めたものを指していますが、通常両者を区別するために「円筒形埴輪」・「普通円筒埴輪」、「朝顔形円筒埴輪」などと呼ばれている。しかし、胴部の形態は同じであるものの、分類上朝顔形埴輪は壺形埴輪の一形態であることから（赤塚 2001・車崎 2004）、第２章以降はそれぞれ「円筒形埴輪」「朝顔形埴輪」として進め、両者合わせたものを「円筒埴輪」と呼ぶことにする。

（2）前稿を含め、色調については『新版標準土色帖（2006年版）』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）に基づき表記している。

（3）橋本文献（橋本 1980）にはｄ３類の凸帯片も掲載されている。

引用・参考文献

赤塚次郎　1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

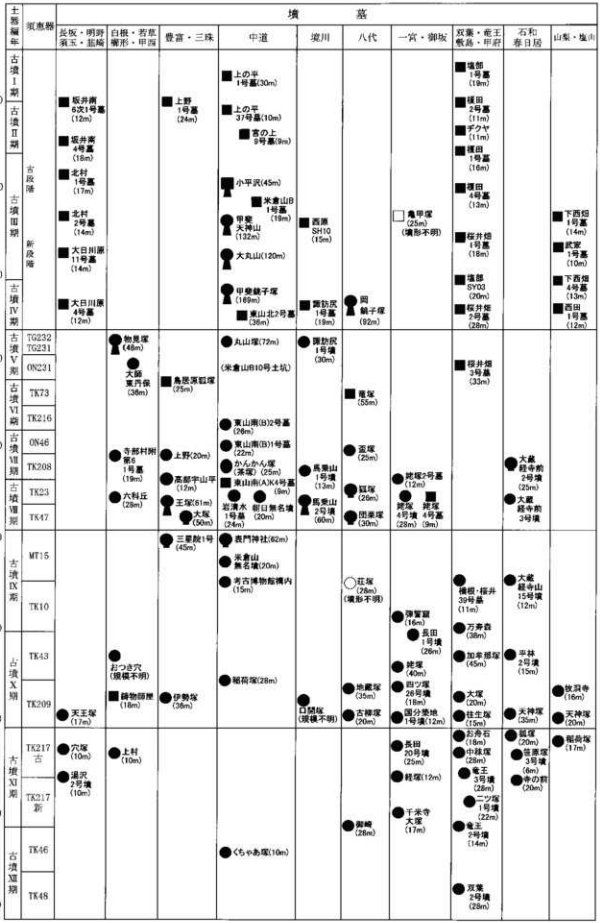
赤塚次郎　1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

赤塚次郎　2001「壺形埴輪の復権」『史跡青塚古墳発掘調査報告書』犬山市教育委員会

赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第２号　愛知県埋蔵文化財センター

伊藤修二　1995「山梨県指定史跡　岡・銚子塚古墳」八代町教育委員会



第11図　甲斐地域における墳墓の変遷（小林 2014）

犬木努　2011「埴輪の編年②東日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』同成社
一瀬和夫　2011「円筒埴輪」『考古資料大観』第４巻　弥生・古墳時代　埴輪　小学館
上田宏範　1959「埴輪の諸問題」『世界考古学大系』第３巻　日本Ⅲ　平凡社
大賀克彦　2002「凡例・古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町教育委員会
大賀克彦・堀犬介　2003「凡例」『風巻神山古墳群』清水町教育委員会
大賀克彦　2013「前期古墳の築造状況とその画期」『前期古墳からみた播磨』播磨考古学研究集会実行委員会
置田雅昭　1977「初期の朝顔形埴輪」『考古学雑誌』第63巻第３号　日本考古学会
笠原みゆきほか　2008『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
風間栄一　2008「中部高地における大型円墳の様相」『前期・中期における大型円墳の位置と意味』東北・関東前方後円墳研究会
川西宏幸　1978・1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２・４号　日本考古学会
川西宏幸　1988『古墳時代政治史序説』塙書房
岸本直文　2011「古墳時代史の枠組み　③古墳編年と時期区分」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』同成社
北島大輔　2000「古墳出現期の広域編年－尾張低地部編年の提示､近畿･北陸地方との併行関係を中心に－」『Ｓ字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
車崎正彦　2004「総説　埴輪」『考古資料大観』第４巻　弥生・古墳時代　埴輪　小学館
小林健二　1998「甲斐における古式土師器の成立－３・４世紀の土器編年と墳墓」『専修考古学』専修大学考古学会
小林健二　2000「甲斐のＳ字甕を考える」『Ｓ字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局
小林健二　2006「甲府盆地から見たヤマト－甲斐銚子塚古墳出現の背景－」山梨県立考古博物館
小林健二　2010「古墳時代における甲斐の地域社会－土器編年と墳墓の変遷－」『山梨県考古学協会誌』第19号
小林健二　2013「甲府盆地から見たヤマト（２）－甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪－」『研究紀要』29　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
小林健二　2014ａ「甲斐の前期古墳をめぐる検討課題－土器編年から見た中道古墳群の位置付け－」『古代東国と畿内王権－甲斐中道古墳群の検討から－』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
小林健二　2014ｂ「甲斐銚子塚古墳と甲斐の政権」『歴史読本』2015年１月号　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
近藤義郎・春成秀爾　1967「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第３号　考古学研究会
近藤喬一・都出比呂志　1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第６号　史学研究会
坂本美夫　1988『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
佐藤祐樹　2014「駿河における二重口縁壺の位置づけ」『東生』第３号　東日本古墳確立期土器検討会
鈴木一有　2011「松林山古墳と遠江の前期古墳」『黄金の世紀』豊橋市美術博物館ほか
瀬川貴文　2012「３地域の展開　⑥東海・甲信」『古墳時代の考古学２　古墳出現の展開と地域相』同成社
高橋克壽　1994「埴輪生産の展開」『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会
田嶋明人　1986「漆町遺跡出土の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　2008「古墳確立期土器の広域編年　東日本を対象とした検討（その１）」『石川県埋蔵文化財情報』第20号　財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　2009ａ「古墳確立期土器の広域編年　東日本を対象とした検討（その２）」『石川県埋蔵文化財情報』第21号　財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　2009ｂ「古墳確立期土器の広域編年　東日本を対象とした検討（その３）」『石川県埋蔵文化財情報』第22号　財団法人石川県埋蔵文化財センター
田嶋明人　2011「古墳確立期土器の広域編年　東日本を対象とした検討（その４）」『西相模考古』第20号　西相模考古学研究会
田嶋明人　2013「４期の画期をめぐって」『東生』２号　東日本古墳確立期土器検討会
田嶋明人　2014「二重口縁壺にみる推移と変革（上）」『東生』第３号　東日本古墳確立期土器検討会
寺沢薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立柏原考古学研究所
寺沢薫　2002「布留0式土器の新・古と二・三の問題」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県立柏原考古学研究所
寺沢薫　2012「７．高尾山古墳の評価をめぐる二・三の問題」『高尾山古墳発掘調査報告書』沼津市教育委員会
中井正幸　1996「昼飯大塚古墳周辺の埴輪系譜」『美濃の考古学』創刊号　同刊行会
西村歩　2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
西村歩　2011「土師器の編年③近畿」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』同成社
橋本博文　1976「東国への初期円筒埴輪波及の一例とその史的位置づけ」『古代』第59・60合併号　早稲田大学考古学会
橋本博文　1978「甲斐における在地首長制の成立とその展開」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』24

橋本博文　1980「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』第８号　甲斐丘陵考古学研究会
橋本博文　1984「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地－その歴史と地域性－』地方史研究協議会　雄山閣
早野浩二　2011「土師器の編年　④東海」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』同成社
平塚洋一　2014「最新の研究成果－天神山古墳－」『古代東国と畿内王権－甲斐中道古墳群の検討から－』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
広瀬和雄　1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成　近畿編』山川出版社
廣瀬覚　2001「茶臼山形二重口縁壺と前期古墳の朝顔形埴輪」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会
廣瀬覚　2011「埴輪の編年②西日本の円筒埴輪」『古墳時代の考古学１　古墳時代史の枠組み』同成社
保坂和博　1997『大師東丹保遺跡Ⅳ区』山梨県教育委員会ほか
保坂和博　1999「埴輪」『山梨県史」資料編２　原始・古代２　山梨県
保坂和博　2001『大塚古墳』山梨県教育委員会
宮澤公雄　1994「甲斐曽根丘陵における古墳時代前半期の様相－東山・米倉山地域の再検討を通して－」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会
宮澤公雄　2014「甲斐の前期古墳をめぐる研究史」『古代東国と畿内王権－甲斐中道古墳群の検討から－』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター・甲府市教育委員会
森岡秀人・西村歩　2006「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題－最新年代学を基礎として」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
森原明廣・守屋文子　2005『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
山根洋子　1992「第5節 出土埴輪」矢島宏雄編『史跡森将軍塚古墳』更埴市教育委員会
吉岡弘樹　2002『銚子塚古墳附丸山塚古墳』山梨県教育委員会
米田敏幸　1991「土師器の編年Ⅰ近畿」『古墳時代の研究』６　雄山閣
渡井英誉　1998「大廓式土器小考－大廓式の画期とその展開－」『庄内式土器研究』ⅩⅥ　庄内式土器研究会
渡井英誉　1999「中見代式土器小考－大廓式土器から中見代式土器へ－」『東国土器研究』第５号　東国土器研究会

山梨県富士河口湖町滝沢遺跡出土の古代製塩土器

平野　修・御山亮済

はじめに
1．滝沢遺跡の概要
2．出土した製塩土器資料
3．出土状況について
4．考　察
おわりに

はじめに

2008年２月に、山梨県考古学協会が主催する研究集会「塩の考古学－ゆく塩、くる塩、古代の塩とその流通を考える－」が開催され、山梨県や静岡県などをはじめとする東海地方東部から関東地方における、固形塩を運ぶための容器としての製塩土器（以下、便宜的に「製塩土器」と呼称する）の検討がおこなわれた。当会開催時点で、こうした製塩土器が当該地域で確認されていたのは静岡県西部、栃木県、茨城県ぐらいで、静岡県東部から関東地方にかけては製塩土器の出土は極めて希薄な状況であった。

しかしその後、山梨県内では南アルプス市に所在する向第１遺跡で、８世紀前半代のSI01竪穴建物から出土していた非在地土器片が製塩土器であることが判明し、それをきっかけに、海のない内陸地である山梨県でも古代の製塩土器資料が認められるようになってきた。

今回は、平野修（帝京大学文化財研究所）が研究代表を務める、平成24年度科学研究費補助金（基盤研究C）「中部地方内陸地域における古代・中世の堅塩・焼塩の生産と流通に関する研究（課題番号：24520864）」の一環として、平成24年度から製塩土器資料が報告されていない奈良・平安時代遺跡の出土遺物の再調査をおこなってきており、平成26年度も幸いにも山梨県埋蔵文化財センターおよび山梨県立考古博物館のご厚意により、過去に発掘調査が実施された山梨県富士河口湖町に所在する滝沢遺跡第１次、第２次調査分の出土土器の再調査をおこなうことができた。本稿は、本課題の研究協力者である山梨県埋蔵文化財センターの御山亮済氏、富士河口湖町教育委員会の杉本悠樹氏とともに当該調査をおこない、新たに抽出できた製塩土器資料の報告である。なお、資料の実測と観察表の作成は、主として平野がおこなった。（平野）

1．滝沢遺跡の概要

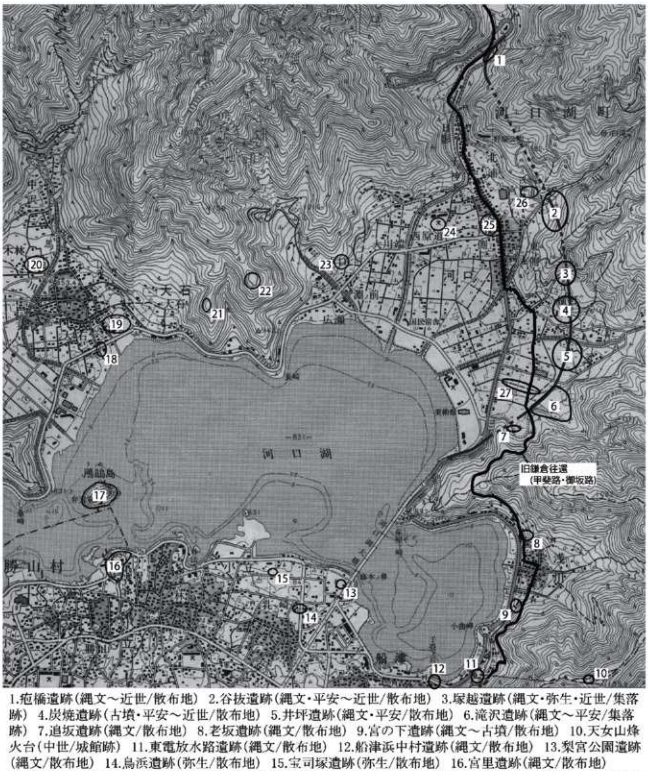
周知の埋蔵文化財包蔵地である滝沢遺跡は、山梨県土の中心を占める甲府盆地の南側外縁に位置する富士河口湖町河口に所在する。同地区は、河口湖北岸から東岸にかけて形成された御坂山地より河口湖に流れ込む６本の小規模河川が形成する扇状地上に所在し、滝沢遺跡は御坂山地を構成する霜山の西麓、河口湖の北東約１kmの地点にあたり、標高約850～840mの微傾斜地に位置する。古代の河口地区にあたる地域は八代郡に属し、東海道横走駅（現在の御殿場市付近）から分岐して甲斐国府へ通じる古代官道「御坂路（甲斐路）」が通っていた（平成24年８月に、富士河口湖教育委員会が実施した鯉ノ水遺跡の発掘調査で道路遺構を検出している。）。『延喜式』「巻28兵部省諸国駅伝馬条」によると、甲斐国には「加吉」「河口」「水市」の３つの駅家（甲斐三駅）が設置されており、河口地区は河口駅の推定地とされている。滝沢遺跡は古代官道に隣接して営まれた集落跡である。

滝沢遺跡の発掘調査は、平成22（2010）年に供用開始となった国道137号河口２期バイパス工事に先立ち第１次調査が平成17（2005）年に実施され、さらに富士吉田市新倉から河口２期バイパスに接続する吉田河口湖バイパスの建設工事に先立ち第２次調査が平成23（2009）年に実施された。

滝沢遺跡の第１次および第２次発掘調査では、総面積6,080㎡が発掘調査され、平安時代を中心とする生活面が検出している。主な検出遺構は、９世紀前半～10世紀後半の竪穴建物30棟、集石遺構１基、土坑５基、溝状遺構１基、焼土遺構１基などがあり、第２次調査で発見された竪穴建物はおおむね主軸を同じくして配置されている。おそらく古代官道の路線に影響されるものであろう。特筆すべき出土遺物には、大量の墨書・刻書土器をはじめ鉄鏃、刀子などの鉄製品、漁労具の土錘などがある。第２次調査では他地域との交流があったことを示す相模型甕（Ⅴ区３号住居）やいわゆる信州系と言われる内黒土器（同５号住居）、武蔵型甕（同６号住居）といった外来系の土器が出土しているほか、弥生時代後期の中部高地型櫛描文土器や古墳時代初頭の箆内系叩き甕の出土がみられ、古代官道の整備以前から当地域が交通の要衝であったことを示す資料が見つかっている。（御山）

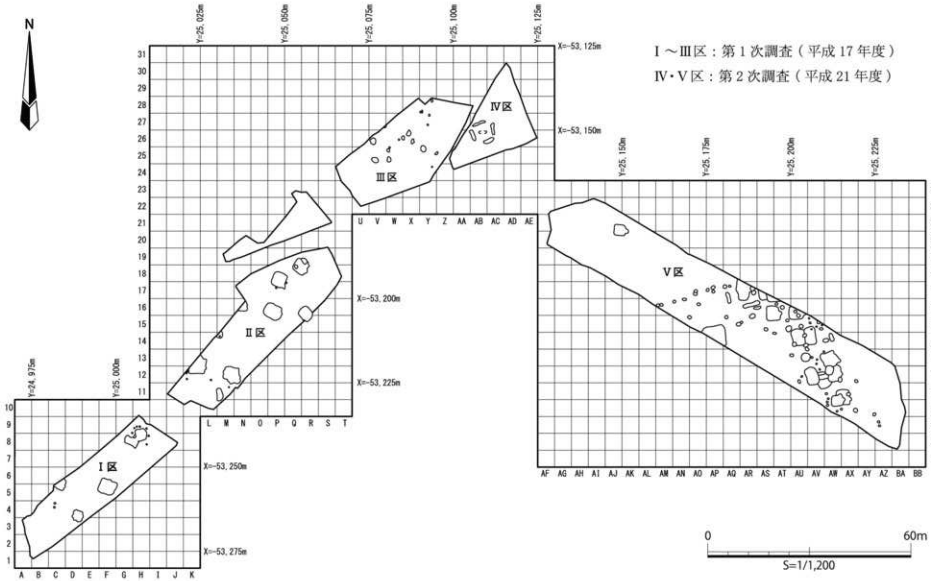
2．滝沢遺跡第１次・第２次調査から出土した製塩土器

滝沢遺跡の既往の調査で出土し、今回新たに抽出した



1.疱瘡遺跡(縄文～近世/散布地) 2.谷抜遺跡(縄文・平安～近世/散布地) 3.塚越遺跡(縄文・弥生・近世/集落跡) 4.炭焼遺跡(古墳・平安～近世/散布地) 5.井坪遺跡(縄文・平安/散布地) 6.滝沢遺跡(縄文～平安/集落跡) 7.道坂遺跡(縄文/散布地) 8.老坂遺跡(縄文/散布地) 9.宮の下遺跡(縄文～古墳/散布地) 10.天女山絲火台(中世/城館跡) 11.東電放水路遺跡(縄文/散布地) 12.船津浜中村遺跡(縄文/散布地) 13.梨宮公園遺跡(縄文/散布地) 14.鳥浜遺跡(弥生/散布地) 15.宝司塚遺跡(弥生/散布地) 16.宮里遺跡(縄文/散布地) 17.鵜の島遺跡(縄文～古墳/散布地) 18.大石鑪つき戸(中世/城館跡) 19.大石遺跡(縄文/散布地) 20.水木原遺跡(縄文/散布地) 21.大石の城山(中世/城館跡) 22.広瀬の城古山(中世/城館跡) 23.金山遺跡(縄文/散布地) 24.大築地遺跡(縄文/散布地) 25.西川遺跡(縄文・奈良・平安/散布地) 26.宮ノ上遺跡(平安～近世/散布地) 27.鯉ノ水遺跡(古墳～平安/散布地)

第１図　滝沢遺跡と周辺遺跡分布図



第２図　滝沢遺跡第1次、第2次調査全体図

製塩土器は、「はじめに」でも簡単にふれたが、固形塩を運ぶための容器としての土器であり、鹹水を煮詰め結晶化させる煎熬用の製塩土器ではない。岩本正二氏によれば，製塩土器の用途は土器製塩上二つに大別できるとし，一つは，塩水を煮沸煎熬し塩の結晶を取り出す容器。もう一つは，同一容器あるいは別の容器で作製した塩を焼塩処理し粗塩を精製する容器があるという（岩本 1983）。

海水からの塩づくりとはまったく縁のない内陸地域で出土する製塩土器は，生産用具であり，また運搬・保管具でもある。そして単に土器だけが移動してきたのではなく、土器の中に塩が入った状態で運ばれてきたとみるのが自然であろう。製塩土器の一つの用途である煎熬段階での土器は、長時間火にかけられ、さらに塩の結晶化によって土器自体にかなりのダメージをうけるため、そのまま運搬容器としては使用できないはずである。よって煎熬し粗塩作製専用の鍋のような大きな土器と、「焼塩土器」や「堅塩土器」と呼ばれる固形塩にするための小さな土器があったと考えられる。本遺跡の出土資料は後者の土器にあたるが、渡辺誠氏は、近世の「焼塩壺」と古代の「焼塩土器」を比較して、古代の「焼塩土器」は、近世の「焼塩壺」とニガリの成分量など が異なることから、「やきしお（焼塩）」ではなく「かたしお（堅塩）」であり、「焼塩土器」と呼ぶことは適切ではないという指摘をされている（渡辺 1997）。ここでは固形塩づくりおよび運搬のための土器を「焼塩土器」「堅塩土器」とは呼称せず、便宜的に「製塩土器」と呼称する。

滝沢遺跡から今回抽出した総点数は31点で、総重量にして122ｇを量る。いずれも５㎝前後の小片ばかりで、口縁部破片が７点で、他はすべて胴部破片で底部破片はない。この傾向は、山梨県内で製塩土器資料を出土している他の遺跡と同じ傾向であり、完形状態で出土する資料は皆無と言って良い。

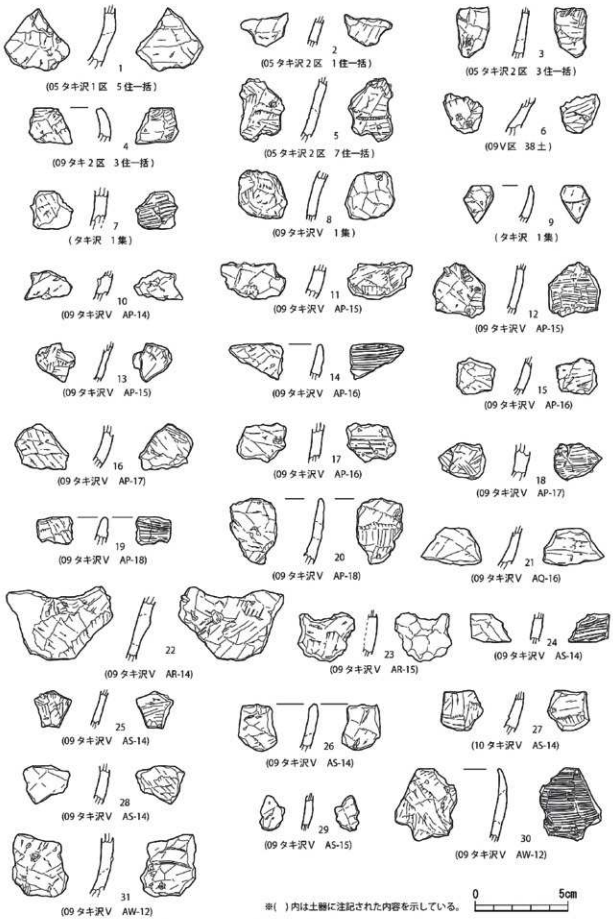
ただ半完形品ではあるが、県内で唯一底部から口縁部まで残る製塩土器が韮崎市に所在する宮ノ前第５遺跡から出土している（第３図参照）。その詳細は別稿でも報告しているように（平野・間間 2014）、８世紀前半代の12号住居址のカマド内から出土しており、推定口径10.0㎝、底径5.5㎝、器高9.0㎝、器厚７～８㎜の中厚手、平底の底部から頸部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁端部下約１㎝あたりで「く」の字状にやや弱めに屈曲し、内湾するコップ状の鉢形を呈する。口縁は弱く波状を呈し、その端部は尖形となっている。粘土巻き上げ成形で、指頭調整による凹凸感はあるが、内外面ともに横位・斜位・縦位のナデ調整を施し、底部外面はヘラケズリとナデ調整を施す。なお本資料の底部外面には、浅い刻みの線刻（「×」か・「×」か）がみられる。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は砂粒と雲母を含み、白色粒子を多く含み、赤色粒子を少量含むが比較的精選された胎土である。底部外面から口縁部外面の一部にかけて被熱のためススが付着するとともに器面が灰褐色に変色し、内面も底部から口縁部にかけて一部が灰褐色に変色している。その重量は約110ｇを量るが、完形の場合仮に200ｇ前後とすると、滝沢遺跡全体の出土総重量は、宮ノ前第５遺跡出土資料の一個体にも満たない重量である。

滝沢遺跡出土資料の器厚は、５～９㎜の中厚手のものが中心で、焼成は軟質・硬質のもの半々程度の割合でみられる。基本的に粘土紐積み上げた後に指オサエで整え、回転力は用いていない。内外面共に手持ちの横位・斜位・縦位のナデ調整を施し、内面は外面に比べて寧なナデを施している。内面ではナデの他、横位のハケメもしくはハケメ状のナデを施すものがみられる（第４図・写真図版－７・12・14・17・18・19・20・24・30）。本遺跡では総点数に比してハケメを施す資料の出土割合が高くなっているが、他遺跡ではその出土割合が極端に低いため、本遺跡の場合、細片であることから接合関係は認められないが、同一固体の可能性が高い。また、南アルプス市の野牛島・西ノ久保遺跡出土資料で確認できたような内面に布目痕が残る内型を用いた型づくりのものは確認できなかった。

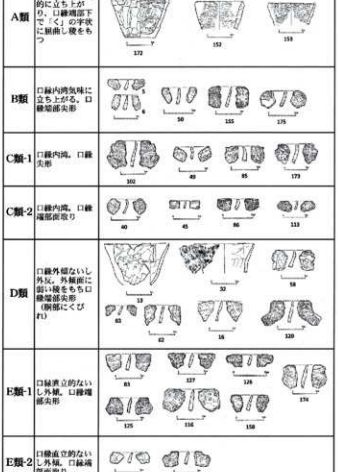
形態は、破片資料のため全体像を捉えることは難しい。山梨県内でこれまでに出土している資料の多くは、コップ形状の筒形ないし鉢形を呈すると推測される。胴部上半部から口縁部の状況から推測すると、内湾気味に立ち上がるものと直線的に立ち上がるものがみられる。筆者が以前に設定した分類基準に照らしてみれば（第５図、平野・間間 2014）、口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部が尖形を呈するB類（第３図・写真図版－９・20・26）と、口縁が内湾して立ち上がり、口縁端部が尖形のC類－１（第４図・写真図版－30）、口縁端部が面取りされるC類－２（第４図・写真図版－14・19）がみられる。

胎土は肉眼観察では、白色・赤色・黒色粒子、雲母、

第３図　宮ノ前第５遺跡出土製塩土器《縮尺任意》



第 4 図　滝沢遺跡第 1 次・第 2 次出土製塩土器実測図



第５図　韮崎市域製塩土器分類図（縮尺任意）

小礫等を含み、赤色粒子を含むものと含まないものに大別でき、大半は小礫を含み粗製であるが、比較的精選された胎土をもつものも散見できる。色調は黄橙色もしくは橙色を呈し、火熱を受けて外面が赤褐色化もしくは灰褐色化し、器面が荒れるものも散見できる。（平野）

3. 出土状況

滝沢遺跡第1次における発掘調査区は、Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区、第２次における発掘調査はⅣ区、Ⅴ区となっている。製塩土器はそのうちのⅠ区・Ⅱ区で検出されている竪穴建物覆土内と、Ⅴ区で検出されている竪穴建物および土坑や性格不明集石遺構、遺構外から出土している。製塩土器資料自体が小片であること遺構覆土内の一括取上のため、各遺構からの詳細な出土位置は不明で、出土遺構に直接伴うものなのかどうかも疑わしいが、各遺構の年代が判明するものについては便宜的にその年代を各資料に付し、時期不明遺構出土および遺構外出土資料については時期不詳としている。時期判明した遺構の年代は、いずれも９世紀前半代であり、この時期は山梨県内で最も多く製塩土器がみられる時期でもある。

滝沢遺跡第１次・第２次調査では、製塩土器は、竪穴建物や土坑といった遺構内よりも、Ⅴ区を中心とする遺構外からの出土が目立っており、特にⅤ区中央部のAP～AS－14～18グリッド域内でまとまった分布状況を示している（第６図）。当該グリッド空間には、時期不詳の集石遺構や土坑、溝状遺構、ピット群の他、土師器坏・皿・鉢・甕などが出土する10世紀前半代とされる焼土遺構などが検出されている。当該エリアから出土している製塩土器資料の多くは、強く被熱し赤褐色化や灰褐色化し器面が荒れているものが目立っているのも一つの特徴といえる。（平野）

4. 考　察

以上、滝沢遺跡第１次・第２次調査における新たに抽出した製塩土器資料の概要を述べてきた。滝沢遺跡周辺では、富士河口湖教育委員会が調査を実施した西川遺跡（杉本 2011）と鯉ノ水遺跡（杉本 2014）で、少量かつ小片ではあるが製塩土器片が出土しており、特に滝沢遺跡の西方に隣接する2013年度に発掘調査が実施された鯉ノ水遺跡では、滝沢遺跡方面から流下した土石流堆積層の中から９世紀前半代の土師器片とともに製塩土器が出土していたため、滝沢遺跡に製塩土器が存在することは推測されていた。同じく2013年度に発掘調査され、間もなく報告書が刊行される滝沢遺跡第４次調査でも、少量かつ小片ではあるが製塩土器片が出土していると本稿の共著である山梨県埋蔵文化財センターの御山亮済氏からご教示を得ている。

これまでの山梨県内における製塩土器の出土状況は、甲府盆地西部の富士川およびその上流域の釜無川、その支流である塩川流域を中心とする南アルプス市および韮崎市域に製塩土器の分布が濃厚に認められており、甲府盆地東部の笛吹川流域では散在的に確認されている。八ヶ岳南麓地域や甲府盆地中央部、桂川流域の山梨県東部地域ではまだ確認例はない（平野 2010・2013、第７図）。

製塩土器の濃密な分布が認められる南アルプス市域の

第６図　滝沢遺跡第２次Ⅴ区遺物出土範囲図（縮尺任意）

第７図　山梨県内製塩土器出土遺跡分布図
（「図説 山梨県の歴史」河出書房新社 1990に加筆）

北部に位置する野牛烏・西ノ久保遺跡は、奈良・平安時代を中心とする遺構群が検出されている。特にⅢ区、Ⅴ区、Ⅵ区とよばれる地区では、奈良・平安時代の竪穴建物40棟、掘立柱建物３棟、大溝、炭焼窯などが検出され、大溝からは８世紀前半～９世紀前半の須恵器大甕が破砕した状態で多量に出土したり、竪穴建物内からも焼成不良の土師質須恵器がまとまって出土していることから、土器焼成窯は確認されなかったものの、当該期に本遺跡が須恵器生産に関わる遺跡だとみられる。本遺跡で出土した製塩土器資料は、総点数706点、総重量にして２kgを超えている。須恵器生産や炭生産をおこなっていたと考えられることから、本遺跡は巨麻郡内の基幹産業を担う大規模手工業生産拠点の一つであったと推測される。製塩土器は本遺跡では竪穴建物内からの出土が多く、覆土内のみならず竈内からの出土も顕著にみられることから、竪穴建物内での固形塩の焼き直し作業がおこなわれていたことが推測され、仮にそうであれば、固形塩の再加工も含めた塩の集積地であった可能性も高い。

塩川流域で製塩土器がまとまって出土している宮ノ前遺跡および宮ノ前第５遺跡でも、総点数172点、総重量約１kgが出土している。両遺跡は、巨麻郡家の館および各種手工業部門に関連する遺跡とみられており、山梨県内への固形塩の調達に巨麻郡家が深く関与していた可能性が推測される。固形塩は富士川ルートの水上および陸上交通路を介して、下流沿岸地域の生産地から運ばれた可能性が高い。

一方で散在的に製塩土器が出土している甲府盆地東部地域の遺跡では、一遺跡における出土量が滝沢遺跡と同様に少ない。山梨市に所在する三ヶ所遺跡の平成22年度の発掘調査では、仏堂風の掘立柱建物跡や９世紀前半代の竪穴建物跡の覆土内から製塩土器小片が数点出土してるとともに、土師器高台坏の底部外面に「塩毛」と記した刻書土器が出土している（第８図）。刻書された「塩毛」の「毛」は、おそらく容器としての「笥」を意味すると考えられ、塩を納めた土器もしくは盛り塩に使用した土器とも推測される。本集落の竪穴建物内で塩を使用した仏教神事などの祭祀がおこなわれていた可能性が高い。

第８図　三ヶ所遺跡第３次３号竪穴出土「塩毛」刻書土器実測図（縮尺任意）

このことから製塩土器に入った固形塩は、一つの用途として仏事や神事などの儀式に用いられたことが想定され、製塩土器自体の出土量が極めて少ないことから、その塩は特別な塩だったと推測される。またこうした製塩土器の出土量が少ない遺跡は、主に消費が中心だったと考えられる。その特別な塩は、甲府盆地西部の巨麻郡域の集積地から供給された可能性も考えられる。甲府盆地東部地域に所在する甲斐国府や甲斐国分僧尼寺などの主要官衙や大寺院も塩の流通には深く関与していた可能性も高いが、現段階では甲斐国府や甲斐国分僧尼寺に付随する諸施設や集落遺跡における製塩土器の出土状況が不明なため、今後これらエリアの状況も見極めながら検討していきたい。

こうした甲府盆地内の状況から、滝沢遺跡、西川遺跡、鯉ノ水遺跡など富士北麓地域でみられる製塩土器のあり方をどのように考えたらいいのだろうか。鯉ノ水遺跡では先般、９世紀後半代の土石流に破壊された古代官道である東海道の支路（甲斐路）が検出されており、その発見によって滝沢遺跡の竪穴建物の主軸方向が官道の方向性と一致することなど、集落構造がこの官道に強く影響されている状況が明らかになってきた。この官道は南へ行けば沿岸国である駿河国横走駅へ通じ、さらに相模国や伊豆国へも通ずる。また北へ行けば甲斐国府に通ずるわけだが、滝沢遺跡、西川遺跡などにみられる製塩土器が、東海道本路から籠坂峠を越え人馬によって塩生産地から ダイレクトに持ち込まれた可能性と、甲府盆地から御坂峠を越えて持ち込まれた可能性が想定できる。

ところで栃木・茨城両県で出土する製塩土器について分析をおこなった津野仁氏は、内陸部へもたらされた製塩土器は、海浜部の郡司層によって生産・経営された塩が、内陸の郡司層の係わる交易ルートに乗って内陸の集落に広まったとされる興味深い見解を出されている（津

野 2006・2008、第９図)。同じ内陸の山梨県でも、巨麻郡家の郡司層が固形塩の交易に深く関与した状況がうかがわれることから、こうした交易ルートにのって山梨県内各地の集落に供給していた可能性も十分に想定できよう。いずれにせよ、今後の発掘調査の進展を待ってさらに検討していきたい。

次に滝沢遺跡における遺構外からの出土が目立つ状況については、遺構外からまとまって出土する傾向は茨崎市の宮ノ前遺跡でもみられる（第10図)。宮ノ前遺跡では竪穴建物からの出土が主体的で、野牛島・西ノ久保遺跡のように竪穴内竈からの出土も多く、野牛島・西ノ久保遺跡と同じように固形塩の焼き直し作業がおこなわれていた可能性がある。その一方で、館エリアの掘立柱建物群の空間地から比較的まとまって出土している。このことは、館という施設の性格上、饗宴などが催される機会が多く、その時に焼き直しを施した特別な塩がふるまわれた際の残滓とみることも可能であろう。滝沢遺跡の場合は、性格不明の焼土遺構などが検出されていることから、推測の域は出ないが、三ヶ所遺跡の事例のように、何らかの神事に伴う儀礼行為に伴って製塩土器に入った塩を使用したのではなかろうか。

製塩土器の一つの消費地であった滝沢遺跡は、山梨県内の平安時代遺跡の中にあって、墨書・刻書土器の出土比率が高い遺跡として注目されている。墨書・刻書土器は、東日本各地の集落遺跡において、土器の所有を文字や記号で表示した可能性もあるが、むしろ村落内の神仏に対する祭祀・儀礼行為などの際に使用された祭具であるとの見方が強い遺物である。墨書・刻書土器が多出する遺跡は、そうした祭祀・儀礼行為が頻繁におこなわれたとみてもよかろう。三ヶ所遺跡のように製塩土器の塩が、祭祀・儀礼行為に用いられていることから、製塩土器の存在については、墨書・刻書土器の多寡が一つの目安となろう。山梨県では８世紀末から９世紀前半代に墨書・刻書土器をはじめ仏教関連遺構・遺物も増加し、製塩土器も当該期に集中する傾向がみられる。こうした状況からも、両者が深く関わっている状況がうかがわれる。また墨書・刻書土器が多く出土しているのに、製塩土器の出土量が少ない場合は、消費を目的とした遺跡の特徴であろう。

一方で製塩土器が多量に出土している野牛島・西ノ久保遺跡では、墨書・刻書土器の出土量は極端に少ない。この状況は本遺跡が須恵器などの生産の場であることと、固形塩の供給元としての状況を如実に反映しているものといえよう。今後、富士北麓地域でこうした遺跡が発見されれば、滝沢遺跡の製塩土器はそこからもたらされたと考えることもできる。(平野)

おわりに

以上、滝沢遺跡第１次・第２次調査出土土器から新たに抽出した製塩土器資料について若干の考察を加えながら報告してきた。製塩土器の沿岸地域からの流通経路や、甲斐国内の流通経路および使用目的など、検討する余地は多々ある。これら研究の進展には、さらなる資料の増加が不可欠である。多くの発掘調査関係者にその存在を認知していただき、今後の資料の増加につなげていけたらと切に願うものである。

最後に、資料の実見から、部外者である平野に本稿を発表する機会を与えていただいた山梨県埋蔵文化財センターおよび山梨県立考古博物館に心から感謝申し上げたい。また、資料調査、資料の実測・トレース、写真撮影、挿図・写真図版作成にあたっては、望月秀和、杉本悠樹、中山響、菅原由美子、須田泰美の各氏に多大なるご協力を賜った。ここに記して感謝申し上げたい。

本稿は、はじめにも触れたように平成24年度科学研究費補助金（基盤研究C)「中部地方内陸地域における古代・中世の堅塩・焼塩の生産と流通に関する研究（課題番号：24520864)」の研究成果の一部である。(平野)

第９図　茨城県・栃木県の製塩土器の主な出土遺跡
（『霞ヶ浦と太平洋のめぐみ－塩づくり－
茨城県立歴史館特別展図録」2012より）

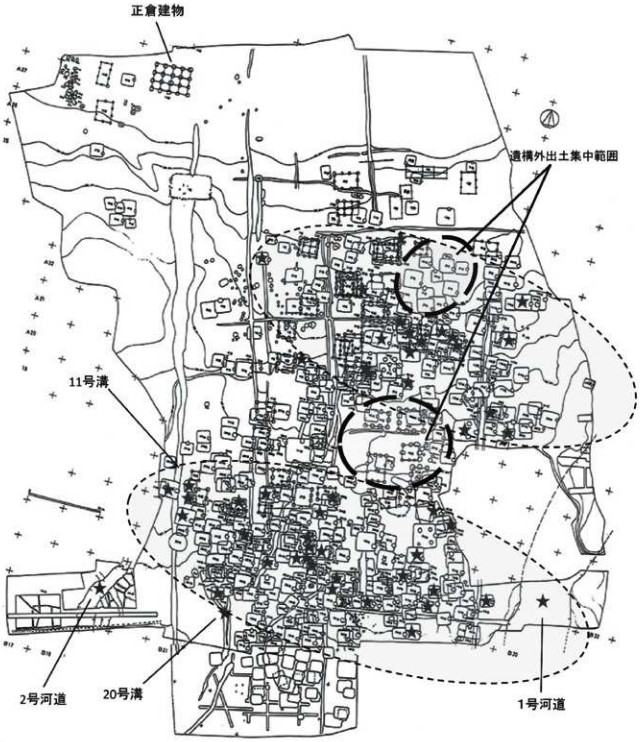
参考文献

茨城県立歴史館　2012『特別展　霞ヶ浦と太平洋のめぐみ－塩づくり－』

岩本正二　1983「７～９世紀の土器製塩」『文化財論叢』、pp.401-418、奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会編、同朋舎出版

杉本悠樹　2013「富士河口湖町西川遺跡出土の古代製塩土器について」「山梨県考古学協会誌」第20号、pp.185-192、山梨県考古学協会

杉本悠樹　2014「鯉ノ水遺跡出土の古代製塩土器」『山



第10図　宮ノ前遺跡製塩土器出土分布図《縮尺任意》

梨考古学論集」Ⅶ、pp.155-164、山梨県考古学協会
津野仁　2006「栃木県出土の古代製塩土器について」『研究紀要』第14号、pp.1-10、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
津野仁　2008「栃木県と周辺の古代製塩土器」『山梨県考古学協会2007年度研究集会 塩の考古学－ゆく塩、くる塩、古代の塩とその流通を考える－』、pp.25-43、山梨県考古学協会
平野修　2010「考古学からみた古代内陸地域における塩の流通」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第14集、pp.101-113、帝京大学山梨文化財研究所
平野修　2013「川を上り峠を越える製塩土器」『古代山国の交通と社会』、pp.141-160、鈴木靖民・吉村武彦・加藤友康編、八木書店
平野修・閏間俊明　2014「山梨県韮崎市城の新発見古代製塩土器」『山梨考古学論集』Ⅶ、pp.133-154、山梨県考古学協会
韮崎市遺跡調査会他　1992『宮ノ前遺跡』
韮崎市教育委員会　1997『宮ノ前第５遺跡』
南アルプス市・南アルプス市教育委員会・(財)山梨文化財研究所　2009『野牛島・西ノ久保遺跡Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ区』南アルプス市埋蔵文化財調査報告書第20集
山梨県教育委員会・山梨県土木部　2007『滝沢遺跡・疱橋遺跡・谷抜遺跡　一般国道137号河口２期バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第247集
山梨県教育委員会・山梨県県土整備部　2012『滝沢遺跡（第２次）一般国道137号吉田河口湖バイパス建設工事に伴う発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第282集
山梨市・山梨市教育委員会・(財)山梨文化財研究所　2012『三ヶ所遺跡（第三次調査地点）－市道小原東東後屋敷線改良に伴う発掘調査報告書－』山梨市文化財調査報告書第15集
若草町教育委員会他　2002『向第１遺跡』若草町埋蔵文化財調査報告書第３集
渡辺誠　1987「粗塩・堅塩と焼塩のこと」『考古学ジャーナル』284、pp.3-3、ニュー・サイエンス社

1表

1裏

2表

2裏

3表

3裏

4表

4裏

5表

5裏

6表

6裏

7表

7裏

8表

8裏

9表

9裏

10表

10裏

11表

11裏

12表

12裏

13表

13裏

14表

14裏

15表

15裏

16表

16裏

17表

17裏

18表

18裏

19表

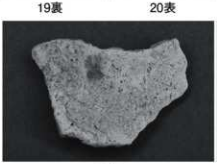
19裏

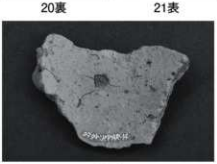
20表

20裏

21表

21裏


22表


22裏

23表

23裏

24表

24裏

25表

25裏

26表

26裏

27表

27裏

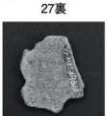
28表

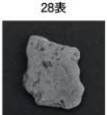
28裏

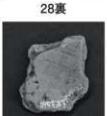
29表

29裏

30表


30裏


31表


31裏

第１表　滝沢遺跡第１次・第２次出土製土器観察表

掲載番号	遺跡名	出土地点	赤彩上限・内面限	胎土	色調	器形	特徴	部位	分類	点数（点）
1	滝沢遺跡	2SR2区 2SE１ 西一段	3C面	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状ナデ 外面 鉢状・斜位ナデ	やや硬質、内面ちりめん状ナデ調整	胴部	－	1
2	滝沢遺跡	2SR2区 2SE１ 西一段	3C面	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内面 若茶褐色 外面 黒い褐色	内面 鉢状ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、内面一部調整	胴部	－	2
3	滝沢遺跡	2SR2区 2SE２ 西一段	3C打	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質	胴部	－	3
4	滝沢遺跡	2SR2区 2E3B 一段	3C面	白色・黒色粒子、雲母、小礫(比較的粗雑が良いである)	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状・横位ナデ	硬質、口縁端部面取り	口縁部	C型－2b	3
5	滝沢遺跡	2SR2区 2SE２ 西一段	3C面	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に良質色	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質	胴部	－	4
6	滝沢遺跡	2SR2区 2E1B 北	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内面 黄色 外面 黒い褐色	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状・横位ナデ	やや硬質、内外面共通的粗く雑調	胴部	－	5
7	滝沢遺跡	2SR2区 2E1B 西	3C面～3D下	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内面 褐灰色 内面 にぶい橙	内面 鉢状ハケメ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、強く調整し内外面の質が調整	胴部	－	6
8	滝沢遺跡	2SR2区 Y 調	3C面～3D下	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に灰黄褐色	内面 鉢状・斜位ナデ 外面 鉢状・横位ナデ	やや硬質	胴部	－	4
9	滝沢遺跡	2SR2区 Y 集	3C面～3D下	白色・黒色粒子、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 横位ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、厚調やや調整	口縁部	2類	1
10	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－15	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、厚調やや調整、内外面共に赤褐色化	胴部	－	2
11	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－15	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質	胴部	－	3
12	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－15	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状ハケメ、鉢状ナデ 外面 鉢状・横位ナデ	やや硬質、内面横ハケ調整、内面部分的に黒く赤褐色化	胴部	－	4
13	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－15	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に良質色	内面 鉢状ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、厚調やや調整	胴部	－	2
14	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－16	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状ハケメ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、口縁端部面取り部分に鉢状ナ	口縁部	C型－2b	3
15	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－16	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に良質色	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質	胴部	－	3
16	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－17	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に黄褐色	内面 黄褐ハケメ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、内外面共に粗雑調整	胴部	－	4
17	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－18	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内面 赤褐色 内面 褐色化	内面 鉢状ハケ状ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、強く調整、内面の荒れ調整	胴部	－	4
18	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－17	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状ハケメ 外面 鉢状のナデ	やや硬質	胴部	－	4
19	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－19	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状ハケメ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、口縁端部部分的に鉢状ナ	口縁部	C型－2b	2
20	滝沢遺跡	2SR2区 Y d5－19	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状・斜位ハケメ鉢状ナデ 外面 鉢状・横位ナデ	やや硬質、厚調やや調整、内面一部荒れ色化、口縁端部部分的に鉢状ナ	口縁部	3類	2
21	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－14	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共褐色	内面 横位ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、厚調やや調整	胴部	－	4
22	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－14	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に黄褐	内面 鉢状ナデ 外面 鉢状ナデ	硬質、外面一部調整、小礫大り調整	胴部	－	16
23	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－15	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面ともに赤褐色	内面 全面刷毛 外面 鉢状のナデ	やや硬質、強く調整	胴部	－	5
24	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－14	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に良質色	内面 横位ハケメ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、調整くびれ調整	胴部	－	2
25	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－14	不明	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫(比較的粗雑さがいである)	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状・縦位ナデ	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状・縦位ナデ	やや硬質	胴部	－	3
26	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－14	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状ナデ 外面 鉢状・縦位ナデ	やや硬質、厚調やや調整、内外面強く赤褐色化	口縁部	3類	3
27	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－14	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状・縦位・横位ナデ	やや硬質、内面入り込みノビレやや調整	胴部	－	3
28	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－15	－	白色・赤色・黒色粒子、砂礫	内外面共褐色斑色	内面 鉢状ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、内面の荒れが著しく調整、内面一部赤褐色化	胴部	－	3
29	滝沢遺跡	2SR2区 d5-15 d6-15	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に良質色	内面 鉢状ナデ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、内面強く赤褐色化	胴部	－	1
30	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－13	－	白色・赤色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共に赤い良質色	内面 横位ハケメ 外面 鉢状ナデ	やや硬質、厚調やや調整	口縁部	C型－1	7
31	滝沢遺跡	2SR2区 Y d6－12	－	白色・黒色粒子、雲母、小礫	内外面共褐色	内面 鉢状・横位ナデ 外面 鉢状ナデ	硬質、外面摩滅調整、内面部強く調整	胴部	－	7
								総点数		122

山梨県出土の木質遺物に関する基礎データの整理

御　山　亮　済

1．はじめに
2．山梨県における木質遺物の出土概況
3．山梨県の木材利用傾向について
4．まとめ

1．はじめに

日本の文化は「木の文化」と特徴付けられることがよくある。それは国土の大半が山林に覆われた風土と、その資源を衣食住や信仰など生活の各所に多く活用してきたことに由来する。その最たる例に、寺社仏閣・住宅等建造物に利用されてきた材木の多用がある。山梨県においても例外ではなく、県土の約80%が山林を占める本県の風土において、その資源活用が多様にあったことは言わずもがなであろう。しかしながら、本県における考古学研究において、木質遺物の研究はやや等閑に付されている感が否めない。それは木質遺物を出土する遺跡が少ないことが要因として挙げられるが、木質遺物を研究対象する研究者が少なかったことも大きな要因であろう。

近年、山梨県においてはリニア中央新幹線建設の計画をはじめ、新環状自動車道や中部横断道など、甲府盆地の沖積低地域において開発事業が多々計画されている。そして、それに伴う発掘調査において木質遺物の出土が予想されている。こうした情勢の中、現在の本県における木質遺物のデータを整理し、「木の利用」の在り方を考える一助することを目的とした。

さて、ここで本県における木質遺物を巡る研究史を整理しておきたい。本県において木質遺物が着目されるのは、中央自動車道建設に伴い1980年代後半に行われた、笛吹市（旧八代町）の身洗沢遺跡の発掘調査がある。身洗沢遺跡では、本県において初めてとなる弥生時代の農具の出土があり、それに伴ってこれまで全国的に行われてきた製作技法や用材傾向に関する研究が行われた（今福 1991・千野 1991）。しかしながら、本県では弥生時代における木質遺物の出土が後に続かなかったため、弥生時代の耕作目に関する研究は現在までほとんど進展していない。その後、現南アルプス市を中心とした甲西バイパス建設などに伴う発掘調査で大量の木質遺物の出土があり、同市大師東丹保遺跡における中世網代塀の出土とそれに関する畑氏の考察は、木構遺構における遺構と木質遺物の関係を再認識したものであった（畑 1997）。また、近年では山梨県内から出土した下駄を集成・分類して他地域と比較した研究が行われている（岡野 2014）。これらの木質遺物研究は、いずれも個別の木質遺物の研究であり、総体的な木の利用について論じた研究はほとんどない。

ここまで現在までの山梨県における木質遺物を巡る研究において、出土木質遺物の総体的な論考が少ないことを述べた。その中で2012年には山梨県を含め全国的に出土した木質遺物のデータベースが刊行されている（伊東・山田編 2012）。本稿では、そのデータベースを援用して、現在までの山梨県出土木質遺物に関するデータを提供する。

2．山梨県内における木質遺物の出土概況

第１図には木質遺物を出土する遺跡の分布を示した。また、第１表に山梨県内の遺跡より出土した木質遺物を集成した。管見の及ぶ限りでは、34遺跡から木質遺物の出土がみられ、時代毎に区分すると56に分けられる。時代別にみると、中世に帰属する木質遺物が最も多く出土しており、次いで近世、近世～近代、古墳～平安時代で500点を超える木質遺物の出土がある。現在のところ縄文時代以前における木質遺物の出土は確認されていない（炭化材、薪炭材、炭化建築部材は除く）が、旧石器時代では山梨市兄川河床よりナウマンゾウの化石とともに

第１図　山梨県内の木質遺物出土遺跡分布図

第1表　山梨県内木製品集計表

番号	遺跡名	所在地	地域区分	標高(m)	時代区分	分類																総数
						工具	農具	運搬具	漁撈具	狩猟具	武具	製盤具	食事具	容器	装飾	祭祀具	遊戯具	文房具	雑具	建築資材	構造材	加工木	不明品	
1	油田遺跡	南アルプス市油田	峡西	259	弥生		1																	1
2	大師東丹保遺跡	南アルプス市大師	峡西	244	弥生									1						23	1			25
3	金の尾新名墳	甲斐市大下条	峡中	285	弥生															10	13			23
4	身洗沢遺跡	笛吹市八代町南	峡東	270	弥生		5				1									6	3	18	1	34
5	塩部遺跡	甲府市塩部	峡中	273	弥生～古墳															6	1	4		11
6	熊沢遺跡	笛吹市御坂町成田	峡東	280	弥生～古墳															9				9
7	山梨学院川田運動場遺跡群	甲府市川田町	峡中	268	弥生～中世	10	1						1	2							1	10		25
8	延命寺遺跡	山梨市落合延命寺	峡東	310	古墳		1															4		5
9	塩部遺跡	甲府市塩部	峡中	272～273	古墳	1	1	4						1								43	8	58
10	蔵子屋安堵	甲府市中道町下曽根	峡東	255～260	古墳									8										8
11	二本柳遺跡	南アルプス市十日市場	峡西	263	古墳								1											1
4	身洗沢遺跡	笛吹市八代町南	峡東	270	古墳															3	2	9	1	15
11	大坪遺跡	甲府市和戸町	峡中	260	古墳～平安		6	2	4			6	52	66		384			6	1	31	147	13	718
5	塩部遺跡	甲府市塩部	峡中	280	古墳～平安																	2		2
12	石橋串黒河遺構	笛吹市境川町三群	峡東	273	奈良～平安		1							1						6	1	6	21	36
13	上コブク遺跡	山梨市北・南	峡東	372	奈良～平安											1								1
5	塩部遺跡	甲府市塩部	峡中	273	奈良～平安							3		9		36				2	4	95	2	151
11	大坪遺跡	甲府市和戸町	峡中	260～262	平安									1		19		1		6		2	6	35
14	小川川遺跡	中央市市旭	峡中	253	平安																3	3		8
15	地獄免遺跡	笛吹市御坂町成田	峡東	281	平安		2		2					6		53			2	7	2	33	27	136
16	平田宮遺跡	中央市成島	峡中	251	平安									1		24				1	61	2	38	127
17	平田宮第2遺跡	甲府市下河東	峡中	252	平安									8		19					79		3	109
18	柳坪遺跡	北杜市長坂町大八川	峡北	720	平安		1						1	3				1				2	17	25
19	上荒遺跡	中央市臼井河原	峡中	252	平安～中世							4				47				1	23		2	79
10	二本柳遺跡	南アルプス市十日市場	峡西	264	平安～中世						1		10	7		52			2	1		15	21	152
17	平田宮第2遺跡	中央市成島	峡中	252	平安～中世			3					1	2		19				1	18		9	53
2	大師東丹保遺跡	南アルプス大師ほか	峡西	244～249	中世	2	2	18	1		1	103	249	188		591			3	119	129	3	667	2076
20	大輪寺遺跡	韮崎市旭ヒ町上条北割	峡北	390	中世								1	3	8				2	7			3	24
14	小井川遺跡	中央市市旭	峡中	245	中世						1	2	75	13		3	1	4	1	48	1	3	12	164
21	甲府城下町遺跡	甲府市丸の内ほか	峡中	267～281	中世							3	8	11							1	1	6	30
22	勝沼氏館跡	甲州市勝沼町勝沼	峡東	421	中世	2	3	1			2	13	47	86		9	3		7	34	22	7	4	238
23	武田勝頼の墓	甲州市大和町田野	峡東	737	中世									1						1				2
24	清山遺跡	北杜市明野町小笠原	峡北	440	中世									3		1				56			46	106
25	宮沢中村遺跡	南アルプス市宮沢	峡西	244	中世							2	4	53		2					16	21		97
26	向河原遺跡	南アルプス市江原	峡西	260	中世								1	3							7		1	12
7	山梨学院川田運動場遺跡群	甲府市川田町	峡中	268	中世											2					10	3	1	16
27	北河原遺跡	中央市臼井陣屋	峡中	249	中世～近世								1	2	13							2	1	19
21	甲府城下町遺跡	甲府市北口2丁目	峡中	281	中世～近世									1										1
28	塩山遺跡	笛吹市八代町永井	峡東	267	中世～近世								1							3	3	3	1	12
10	二本柳遺跡	南アルプス市加賀美	峡西	260	中世～近世											1								1
7	山梨学院川田運動場遺跡群	甲府市川田町	峡中	268	中世～近世	3					1			6							10	3	1	24
21	甲府城下町遺跡	甲府市北口2丁目	峡中	280	中世～近代									3	3								1	4
29	飯沢町厚輪	南巨摩郡富士川町鰍沢	峡南	241	近世		1		13			1	28	33			2	1		30	24	39	12	184
30	小井川・小河原遺跡	中央市市旭	峡中	245	近世								4	11	12						23			52
31	甲府城跡	甲府市丸の内1丁目	峡中	270	近世	10	1					8	28	42					2	2	3	41	6	143
21	甲府城下町遺跡	甲府市丸の内ほか	峡中	264～281	近世		1		1			8	136	109		2	1	1	1	4	148	13	69	494
31	甲府城跡	甲府市丸の内1丁目	峡中	271	近世							3		1						5				8
10	二本柳遺跡	南アルプス市十日市場	峡西	264	近世							1	6	11	1	32					54	22	23	176

32	藤田抬遺跡	富士川町青柳町	峡南	242	近世		1						3	11					1	2	2	9		29
25	宮沢中村遺跡	南アルプス市宮沢	峡西	244	近世	2		3				23	22	59		1					20	18	2	150
29	鰍沢河岸跡	南巨摩郡富士川町鰍沢	峡南	241	近世～近代				12				1	2					2		3	6	2	28
21	甲府城下町遺跡	甲府市丸の内ほか	峡中	263～279	近世～近代	21	3				1	26	72	224			8	3	16	88	6	108	21	597
33	富士見一丁目遺跡	甲府市富士見1丁目	峡中	275	近世～近代									2										2
34	町屋口遺跡	南都留郡富士川町青柳町	峡南	241～242	近世～近代	5	8	1				40	53	21			2		12		7		12	161
14	小井川遺跡	中央市布施	峡中	252	近代							10				3							1	14
21	甲府城下町遺跡	甲府市丸の内ほか	峡中	264～271	近代	2						7	8	68				1	2		26	4	2	120
総数						59	39	32	33	0	8	266	817	1087	1	1368	17	12	59	482	767	701	1063	6811

ハリゲヤキと同定された木片が出土している。また、縄文時代では木質遺物の出土は見られないものの、焼失建物跡から炭化した建築部材が多数出土している。なお、第1表では、炭化した材（建築部材、薪炭材等の点数が明確ではないもの）は集計から除外している。

①地域別の木質遺物出土状況

第２表に遺跡の地域別にみた木質遺物の出土状況を掲載した。なお、地域区分については以下の通りである。

峡北地域：北杜市、韮崎市
峡東地域：笛吹市、山梨市、甲州市、甲府市の一部（旧中道町）
峡中地域：甲府市（旧中道町、上九一色村除く）、甲斐市、中央市、昭和町
峡西地域：南アルプス市
峡南地域：早川町、身延町、南部町、富士川町、市川三郷町

現在までのところ、峡中地域および峡西地域で木質遺物の出土が多くみられる。前者においては、特に古墳時代～平安時代と近世・近世～近代に、後者においては、中世に集中する。峡中地域の古墳～平安時代は甲府市大坪遺跡、近世および近世～近代は同市甲府城下町遺跡で多く出土し、峡西地域では南アルプス市大師東丹保遺跡から大量の木質遺物の出土があり、いずれも一遺跡での出土が大きく反映された結果である。峡中地域は山梨県の県庁所在地ということもあり開発が多く行われたこと、峡西地域では甲西バイパス建設に先立ち沖積低地の調査が多く行われたことに加え、盆地の沖積低地を多く占める地質的要因も挙げられる。

時代別／地域別の木質遺物出土状況に着目すると、弥生時代の木質遺物は峡東地域・峡中地域・峡西地域にみられ、その出土点数は大差ない。弥生時代～

第２表　地域別木製品出土状況

時代\地域	峡北	峡東	峡中	峡西	峡南	合計
弥生		34	23	26		83
弥生～古墳		9	11			20
古墳		28	58	1		87
古墳～平安			720			720
奈良～平安		37	151			188
平安	25	136	279			440
平安～中世			132	132		264
中世	130	240	210	2185		2765
中世～近世		12	44	1		57
近世			697	326	213	1236
近世～近代			599		189	788
近代			134			134
合　計	155	496	3058	2671	402	6782

古墳時代は峡東地域、峡中地域に木質遺物の出土がみられる。平安時代には峡北地域において一定量の出土がみられ、中世には峡北・峡東・峡中・峡西の各地域において100点以上出土している。峡南地域においては、近世以降の木質遺物のみ確認されている。山梨県内の木質遺物出土状況は、他県と比較しても中世以降の出土量が多く、大きな特徴として挙げられよう。

②器種別の木質遺物出土状況

第３表は、第１表から器種毎の総数を抽出したものである。もっとも多く出土する器種は祭祀具で、次いで服飾具や食事具、容器、建築部材、構造材といった衣食住に関する木質遺物が多い傾向にある。一方、工具や農具、紡織具、運搬具などの生業に関わる木質遺物は、弥生時代以降に普遍的に出土がみられるものの出土量自体は少ない傾向にある。

続いて、各器種の出土状況を概説する。

【工具】 全体的な出土量は少なく、各時代数点に留まる。工具の柄が主体である。時代が下るにつれて工具の出土が多くなっている。

【農具】 農具は笛吹市身洗沢遺跡より又鍬、エブリなどが出土している。そのほか南アルプス市の油田遺跡から出土した竪杵がある。山梨県内の出土状況は、工具同様各時代普遍的に出土がみられるものの数点に留まる。研究分野においては、前述のとおり身洗沢遺跡出土農具の木取りや製材、製作技法についての論考がある（今福1991・千野1991）。

【紡織具】 本県では、古墳時代～近世に至るまで糸巻の横木が主体である。大師東丹保遺跡では、一遺跡から18点の出土がある。

【運搬具】 木札を主体とする。県内で最も古い時期に帰属するものは、大坪遺跡から出土した、平安時代に帰属するであろう木札状の木質遺物である。また、鰍沢河岸跡

第３表　器種別木製品出土状況

時代＼器種	工具	農具	結織具	運搬具	漁労具	武具	服飾具	食事具	容器	楽器	祭祀具	遊戯具	文房具	雑具	建築部材	構造材	加工木	不明品	合計
弥生		6				1			1						39	17	18	1	83
弥生～古墳															15	1	4		20
古墳	1	2	4					1			9				3	2	56	9	87
古墳～平安		6	2	4			6	52	66		384			6	1	31	149	13	720
奈良～平安		1					3		10		37				8	5	101	23	188
平安	1	2		2				1	19		117		2	2	14	147	42	91	440
平安～中世			3			1	5	12	7		138			2	3	46	15	32	264
中世	4	5	19	1		4	124	387	364		607	4	4	13	265	186	38	740	2765
中世～近世	3					1	2	2	23		1				3	13	8	1	57
近世	12	5	3	14			43	227	277	1	72	3	2	4	43	276	142	112	1236
近世～近代	26	11	1	12		1	66	126	249			10	3	30	88	16	114	35	788
近代	2						17	8	68		3		1	2		26	4	3	134
合　計	49	38	32	33	0	8	266	816	1084	1	1368	17	12	59	482	766	691	1060	6782

や甲府城下町遺跡においては、流通の拠点・供給先といった遺跡の性格上、数多くの木札が出土している。

【漁労具】 現在までに山梨県内において木製漁労具の出土は見られない。

【武具】 本県においては、現在のところ木製の馬具は発見されていない。武具は身洗沢遺跡から出土した弥生時代後期に帰属する木剣がある。そのほか、近世に至るまで武具の出土がみられるが、一遺跡から出土する量は多くて２点に留まっている。

【服飾具】 古墳時代以降に出土事例がみられるが、主体的に出土例がみられるのは中世以降であり、大半が下駄である。下駄については、岡野秀典が県内の出土例を集成・分類を行い、山梨県における下駄の推移を全国的な傾向と対比している（岡野 2014）。

【食事具】 大坪遺跡や大師東丹保遺跡から大量の食事具の出土がみられるが、大半が箸状の木質遺物であり、その消費量と２本１セットであることを考えれば、当然の結果と言えよう。しかし、県内25遺跡から出土しており、検出頻度としては高い。箸のほかにヘラやしゃもじといった食事具もある。

【容器】 本県における出土木質遺物の集計をみると、祭祀具に次ぐ出土量をみる（加工木・不明品除く）。もっとも古い例は、大師東丹保遺跡から出土した弥生時代中期の蓋状の木質遺物である。円盤状に成形され、断面が凸レンズ状を呈する。古墳時代以降、各遺跡において一定量の出土がある。その大半が曲物、中近世では漆器椀に由来するものであるが、一部刳物容器も存在する。甲府城下町遺跡では桶や樽の出土も多く、漆器に加えて当該期における容器の主体を占める。木質遺物研究において容器の研究は比較的進んでいることに加え、本県においても出土事例が多く再検討を行うべき領域であろう。

【楽器】 二本柳遺跡で警笛様の笛１点が出土しているのみである。

【祭祀具】 本県の出土木質遺物では、最も多い数を占め、24遺跡から1300点以上の出土がある。そのほとんどが斎串もしくは斎串状木質遺物が８割以上を占める。特筆すべきものに甲斐銚子塚古墳から出土した蔵手状木質遺物・棒状木質遺物のセットで、県内では珍しい木製樹物がある。さらに、大師東丹保遺跡から出土した呪符木簡や、中世～近代においては卒塔婆など仏教関連のものもある。

【遊戯具】 中世以降に出土がみられ、甲府城下町遺跡を中心に、独楽や将棋の駒、的などが主体的に出土している。

【文房具】 木簡を含め、木板に墨書を施したもののうち、荷札などの用途が明らかでないものはすべて文房具とした。大坪遺跡出土の木簡や小井川遺跡、甲府城下町遺跡出土の墨書板などがある。

【雑具】 一遺跡からの出土は少なく、古墳時代以前の出土例は今のところない。家具類については、部材の組み合わせにより構築されることが多々あり、出土時には各部材がバラバラに出土することが多い。そのため、一つの部材から器種を想定しなければならないことが多く、不明品や加工木の中に集計している可能性がある。

【建築部材】 弥生時代以降、建築部材の出土がしばしばみられるものの、部材を同定するまでの遺存状態を持つものは少ない。

【構造材】 水路の護岸等に使用される材で、木杭を主体とする。弥生時代以降、古墳時代を除いてほとんどの遺跡から出土している。特筆すべきものに大師東丹保遺跡から出土した網代塀などがある。

以上、ごく簡単にではあるが山梨県内における木質遺物の出土状況を概説した。調査件数の差により各時代間で出土点数が区々であるが、器種毎にみていくと、服飾具や食事具、容器、祭祀具、建築部材といった器種で各時代を通して一定量の出土がみられる。すでに個別の木製品研究に岡野氏による下駄に関する論考があるが、他の器種についても、議論の余地がありそうである。

3. 山梨県の木材利用傾向について

2012年、『出土木質遺物用材データベース（以下、データベース）』として、2005年３月までに刊行された樹種

同定結果のデータが全国的に集成されている（伊藤・山田編 2012）。ここではこのデータベースを援用して論を進めていく。なお、データベースでは各時代について前期や中期、後期と細分されて所収されているが、山梨県内においてはデータ数が少なく、時代毎に点数のばらつきが生じてしまうため、本稿においては、ひとまず大きな括りで時代を区分し、大まかな用材傾向を把握することに努めた。

巻末に記した第４表はデータベースより作成した、山梨県内の時代毎の用材選択傾向である。以下、時代毎に概説する。

縄文時代の木質遺物は、すべて焼失建物跡の炭化した建築部材と薪炭材として用いられた炭化材で構成される。器種に偏りがあるが、特に全体の約60%がクリで占められ、その他の樹種においても広葉樹材を優占して利用したようである。弥生時代には、クリの優占利用はなくなり、クヌギ節やヤナギ属、モミ属といった樹種の利用が多くなる。全体的な様相として、縄文時代に比べて針葉樹の利用量が多くなる。また、弥生時代～古墳時代にかけて、クヌギ節が大きく優占し50%近くまで増加する。弥生時代にみられたモミ属の優占はなくなっている。古墳時代以降は、クヌギ節のほかにコナラ節の利用量も増えており、他の樹種と比較しても広葉樹の優先的利用があったことが窺える。

平安時代になると、それまで優占的であった広葉樹の利用が低迷し、ヒノキやスギ、モミ属、マツ属複維管束亜属といった針葉樹の利用が増加する。特に中世以降は著しく、中世にはヒノキ属の比率が70%を越える。近世では、中世のようなある一種の樹種を極端に利用することはなくなるが、いずれにせよ針葉樹が多くみられるようである。

以上、非常に簡単ではあるが、第４表より読み取れる樹種利用の変遷を述べた。この変遷から、山梨県における樹種利用傾向について2つの変化点が認められる。一つは、縄文時代から弥生時代にかけてのクリ利用の減少で、その代わりにクヌギ節やコナラ節といった樹種の利用が増加する点である。もう一つは、古墳時代から平安時代にかけての針葉樹の優占的利用傾向である。これらの樹種利用の画期が、どのような要因によりもたらされたものであるのかここでは論述しないが、本県における「木の文化」の形成において、非常に重要な点である。ここでは問題提起に留め、別稿にて論考したいと考えている。

4. まとめ

さて、ここまで山梨県における木質遺物の集計から見た出土状況およびデータベースを援用した県内の木材利用傾向について、基礎データの整理および問題点を数点指摘した。第１表～第３表に示した各種集計表は、これまでの本県における木質遺物の状況を改めて認識するきっかけとして、第４表の木材利用傾向については、今後の本県における森林利用を解明していく基礎資料として提示した。本稿がこれまでの本県における出土木質遺物の個別研究から、山梨県における木質遺物の在り方を議論できるような足がかりとなれば僥倖である。なお、ここで提供したデータは管見の及ぶ限り網羅したつもりであるが、筆者の力量不足により見落としや誤りがあると思われる。見落とし等を発見された際には、叱咤・ご助言をいただければ幸いである。

本稿のデータを収集するにあたり、石坂恵理、猪股順子、梶原初美、斉藤律子、新津多恵の各氏のご助力をいただいた。文末ながら、記して謝意を示したい。

第４表　山梨県の時代別用材傾向

	樹種	縄文	弥生	弥生～古墳	古墳	古墳～平安	平安	平安～中世	中世	中世～近世	近世	近代	合計
	カラマツ属							1 1.05%	2 0.40%	4 1.17%	3 1.73%		10 0.45%
	複維管束亜属	5 2.90%			2 0.62%		3 1.25%	1 1.05%	7 1.39%	55 16.13%	11 6.36%		84 3.74%
	単維管束亜属									12 3.52%	9 5.20%		21 0.94%
	マツ属						1 0.42%						1 0.04%
	マツ科									3 0.88%			3 0.13%
	モミ属	3 1.78%	16 23.53%	2 1.44%	5 1.55%	6 3.13%	16 6.67%		36 7.17%	45 13.20%	19 10.98%		148 6.60%
	ツガ属						2 0.83%		1 0.20%	3 0.88%	15 8.67%		21 0.94%
	スギ			1 0.72%		2 1.04%	2 0.83%	35 36.84%	1 0.20%	33 9.68%	14 8.09%		88 3.92%
針葉樹	ヒノキ					5 2.60%	14 5.83%			9 2.64%	33 19.08%		61 2.72%
	トウヒ属						1 0.42%	2 2.11%		1 0.29%			4 0.18%
	サワラ					13 6.77%	5 2.08%		1 0.20%	7 2.05%			26 1.16%
	ヒノキ属	2 1.18%	3 4.41%	5 3.60%	3 0.93%	43 22.40%	14 5.83%	49 51.58%	361 71.91%	29 8.50%	36 20.81%		545 24.29%
	アスナロ									1 0.29%			1 0.04%
	ヒノキ科			1 0.72%			2 0.83%		20 3.98%	7 2.05%			30 1.34%
	イヌガヤ属						4 1.67%						4 0.18%
	カヤ		5 7.35%	8 5.76%	5 1.55%		4 1.67%			1 0.29%			23 1.02%
	針葉樹			1 0.72%	2 0.62%	7 3.65%	6 2.50%						16 0.71%

	オニグルミ	5 2.96%	1 1.47%	1 0.72%	1 0.31%		1 0.42%		1 0.20%		3 1.73%	13 0.58%
	ノグルミ									1 0.29%		1 0.04%
	クルミ科									1 0.29%		1 0.04%
	ヤナギ属		11 16.18%				6 2.50%		2 0.40%	1 0.29%		20 0.89%
	ハンノキ亜属				6 1.86%		1 0.42%		2 0.40%			9 0.40%
	ヤシャブシ亜属									2 0.59%		2 0.09%
	ハンノキ属				2 0.62%					5 1.47%		7 0.31%
	カバノキ属				5 1.55%				1 0.20%	1 0.29%		7 0.31%
	イヌシデ節	2 1.18%					2 0.83%					4 0.18%
	クマシデ節	2 1.18%										2 0.09%
	クマシデ属						1 0.42%					1 0.04%
	アサダ				1 0.31%				2 0.40%			3 0.13%
	ブナ属					4 2.08%		1 1.05%	1	4 1.17%	1 0.58%	11 0.49%
	ブナ科	25 14.79%					6 2.50%			2 0.59%		33 1.47%
	クヌギ節	1 0.59%	12 17.65%	66 47.48%	154 47.68%	35 18.23%	38 15.83%	1 1.05%		2 0.59%		309 13.77%
	コナラ節		2 2.94%	11 7.91%	69 21.36%	39 20.31%	61 25.42%		7 1.39%	4 1.17%	3 1.73%	196 8.73%
	コナラ亜属						1 0.42%			1 0.29%		2 0.09%
	アカガシ亜属			3 2.16%		1 0.52%	1 0.42%		1 0.20%			6 0.27%
	コナラ属	4 2.37%					1 0.42%					5 0.22%
	クリ	102 60.36%	4 5.88%	2 1.44%	3 0.93%	9 4.69%	10 4.17%	4 4.21%	16 3.19%	34 9.97%	8 4.62%	192 8.56%
	シイ属								1 0.20%			1 0.04%
	エノキ属	1 0.59%	3 4.41%	1 0.72%		1 0.52%	3 1.25%					9 0.40%
	ケヤキ	4 2.37%	1 1.47%	18 12.95%	1 0.31%	10 5.21%	1 0.42%		11 2.19%	4 1.17%	4 2.31%	54 2.41%
	クスノキ科		2 2.94%				2 0.83%					4 0.18%
	クワ属	3 1.78%	1 1.47%	6 4.32%	10 3.10%	1 0.52%						21 0.94%
	カツラ属			1 0.72%	1 0.31%					3 0.88%	1 0.58%	6 0.27%
	モクレン属				1 0.31%							1 0.04%
広葉樹	ツバキ属				1 0.31%							1 0.04%
	ヒサカキ属										1 0.58%	1 0.04%
	ツツジ科									1 0.29%		1 0.04%
	ツツジ属									1 0.29%		1 0.04%
	ツゲ										1 0.58%	1 0.04%
	モモ				16 4.95%		2 0.83%		1 0.20%			19 0.85%

フサザクラ									2 0.59%			2 0.09%
サクラ属				2 0.62%		6 2.50%		1 0.20%	1 0.29%	4 2.31%		14 0.62%
ナシ亜科									1 0.29%			1 0.04%
アカメガシワ		1 1.47%										1 0.04%
キハダ		1 1.47%						1 0.20%		1 0.58%		3 0.13%
クサギ	1 0.59%											1 0.04%
ヌルデ		1 1.47%						5 1.00%				6 0.27%
カエデ属		1 1.47%		2 0.62%	1 0.52%	2 0.83%		1 0.20%	1 0.29%		2 100.00%	10 0.45%
トチノキ属	2 1.18%											2 0.09%
ケンポナシ属		1 1.47%		3 0.93%					2 0.59%			6 0.27%
ハリギリ						1 0.42%			1 0.29%			2 0.09%
ハシバミ属									4 1.17%			4 0.18%
ミズキ属	1 0.59%											1 0.04%
エゴノキ属										1 0.58%		1 0.04%
トネリコ属	3 1.78%		1 0.72%		2 1.04%			10 1.99%	3 0.88%	2 1.16%		21 0.94%
シナノキ属								1 0.20%				1 0.04%
イヌエンジュ属									7 2.05%			7 0.31%
カキノキ属								2 0.40%	14 4.11%			16 0.71%
イスノキ					3 1.56%					1 0.58%		4 0.18%
リョウブ									2 0.59%			2 0.09%
ムラサキシキブ属						1 0.42%						1 0.04%
広葉樹	3 1.78%	2 2.94%	4 2.88%	5 1.55%	8 4.17%	16 6.67%	1 1.05%	4 0.80%	4 1.17%	1 0.58%		48 2.14%
同定不能			7 5.04%	23 7.12%	2 1.04%	3 1.25%		2 0.40%	22 6.45%	1 0.58%		60 2.67%
合計	169	68	139	323	192	240	95	502	341	173	2	2244

【参考文献】

岡野秀典　2014「山梨県出土の下駄について－分類作業を中心として－」「山梨考古学論集Ⅶ 山梨県考古学協会35周年記念論文集」山梨県考古学協会

今福利恵　1991「身洗沢遺跡出土の木製品」『研究紀要7』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

千野裕道　1991「身洗沢遺跡出土木製品の樹種について」『研究紀要７』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

松谷暁子　1991「身洗沢遺跡出土植物種子について」『研究紀要７』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

外山秀一　1991「身洗沢遺跡の立地と稲作」『研究紀要７』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

畑大介　1997「第１節　大師東丹保遺跡の網代の保存処理と製作技法」『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区』山梨県教育委員会ほか

伊東隆夫・山田昌久編　2012『木の考古学 出土木製品用材データベース』海青社

【第１表出典一覧】

※文頭の数字は第１表、第１図の番号に同じ

1）保坂和博　1997『油田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第130集　山梨県教育委員会ほか

2）新津健ほか　1993『大師東丹保遺跡Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第131集　山梨県教育委員会ほか

小林健二ほか　1997『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集　山梨県教育委員会ほか

保坂和博　1997『大師東丹保遺跡Ⅳ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第133集　山梨県教育委員会ほか

3）末木健ほか　1987『金の尾遺跡・無名墳（きつね塚）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第25集　山梨県教育委員会ほか

4）森和敏ほか　1990『身洗沢遺跡・一町五反田遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第55集　山梨県教育委員会

5）小野正文ほか　1996『塩部遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第123集　山梨県教育委員会

佐々木満ほか　2004『塩部遺跡』甲府市文化財調査報告24　甲府市教育委員会

佐々木満ほか　2005『塩部遺跡Ⅱ』甲府市文化財調査報告30　甲府市教育委員会

志村憲一ほか　2010『塩部遺跡』甲府市文化財調査報告53　甲府市教育委員会

6）望月和幸ほか　2004『境沢遺跡』御坂町埋蔵文化財発掘調査報告書2004－１　御坂町・御坂町教育委員会

7）平野修ほか　2008『山梨学院川田運動場遺跡群』甲府市文化財調査報告37　学校法人山梨学院ほか

8）村石真澄ほか　2008『延命寺遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第251集　山梨県教育委員会

9）坂本美夫　1988「国指定史跡・銚子塚古墳附丸山塚古墳」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第35集　山梨県教育委員会

吉岡弘樹ほか　2002「国指定史跡・銚子塚古墳附丸山塚古墳」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第195集　山梨県教育委員会

10）新津健ほか　1992『二本柳遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第72集　山梨県教育委員会

11）信藤祐仁　1984『大坪遺跡』甲府市文化財調査報告１　甲府市教育委員会

12）森和敏ほか　1984「Ⅰ石橋条里制遺構」「石橋条里制遺構・蔵福遺跡・侭ノ下遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第３集　山梨県教育委員会ほか

13）保坂康夫　2014『上コブケ遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第296集　山梨県教育委員会

14）小林広和ほか　2007『小井川遺跡Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第241集　山梨県教育委員会ほか

小林広和ほか　2007『小井川遺跡Ⅲ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第255集　山梨県教育委員会ほか

依田幸治ほか　2008『小井川遺跡Ⅳ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第256集　山梨県教育委員会ほか

15）小野正文ほか　1992『地耕免遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第73集　山梨県教育委員会

16）今村直樹　2006『平田宮第2遺跡』玉穂町埋蔵文化財調査報告書第３集　玉穂町教育委員会ほか

網倉邦夫ほか　2007『平田宮第２遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第244集　山梨県教育委員会ほか

今村直樹　2008『平田宮第２遺跡（２・３次）』中央市埋蔵文化財調査報告書第１集　中央市教育委員会ほか

17）佐々木満ほか　2001『秋山氏館跡』甲府市文化財調査報告16　甲府市教育委員会

18）米田明訓　1986『柳坪遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第13集　山梨県教育委員会ほか

19）今村直樹　2010『上窪遺跡（第５次）』中央市埋蔵文化財調査報告書第２集　中央市教育委員会ほか

20）新津健ほか　1990『大輪寺東遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第53集　山梨県教育委員会

21）志村憲一　2001「甲府城下町遺跡Ⅰ－北口二丁目（桜シルク跡）発掘調査報告書－」甲府市文化財調査報告15　甲府市教育委員会ほか

森原明廣　2004「甲府城下町遺跡－甲府駅周辺土地区画整理事業地内43街区埋蔵文化財発掘調査報告書－」

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第215集　山梨県教育委員会ほか
保坂和博　2004『甲府城下町遺跡（日向町遺跡第２地点）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第220集　山梨県教育委員会ほか
宮澤公雄・志村憲一　2007『甲府城下町遺跡Ⅳ－集会所建設工事に伴う発掘調査報告書－』甲府市文化財調査報告39　甲府市教育委員会・財団法人山梨文化財研究所
吉岡弘樹　2008『甲府城下町遺跡（北口県有地）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第258集　山梨県教育委員会
山本茂樹　2013『甲府城下町遺跡－甲府法務総合庁舎建設事業に伴う発掘調査報告書－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第292集　山梨県教育委員会ほか
今福利恵ほか　2013『甲府城下町遺跡－都市計画道路「古府中環状浅原橋線」街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第288集　山梨県教育委員会ほか
22）室伏徹ほか　2009『史跡勝沼氏館跡－外郭域発掘調査報告書（中世編）－』甲州市文化財調査報告書第３集　甲州市教育委員会
23）飯島泉　2010『山梨県指定史跡　武田勝頼の墓』甲州市文化財調査報告書第７集　甲州市教育委員会
24）佐野隆ほか　2000『深山田遺跡』明野村文化財調査報告12　明野村教育委員会ほか
25）新津健ほか　2000『宮沢中村遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第181集　山梨県教育委員会ほか
26）米田明訓　1997『向河原遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第129集　山梨県教育委員会ほか
27）笠原みゆき　2003『北河原遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第202集　山梨県教育委員会ほか
28）森和敏ほか　1984『Ⅱ蔵福遺跡』『石橋条里制遺構・蔵福遺跡・侭ノ下遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第３集　山梨県教育委員会ほか
29）村石真澄ほか　2005『鰍沢河岸跡Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第224集　山梨県教育委員会ほか
村石真澄ほか　2006『鰍沢河岸跡Ⅲ（第１分冊）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第235集　山梨県教育委員会ほか
30）小林広和ほか　2005『小井川・小河原遺跡Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第229集　山梨県教育委員会ほか
31）八巻與志夫ほか　2005『県指定史跡　甲府城跡（上巻・下巻）』埋蔵文化財センター調査報告書第222集　山梨県
野代幸和　2012『甲府城跡－楽屋曲輪地点－』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第284集　山梨県教育委員会ほか
八巻與志夫ほか　1996『山梨県指定史跡　甲府城跡Ⅵ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第140集　山梨県教育委員会ほか
32）出月洋文ほか　2003『藤田池遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第204集　山梨県教育委員会ほか
33）長沢宏昌ほか　2000『富士見一丁目遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第167集　山梨県教育委員会
34）大木丈夫ほか　2000『町屋口遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第177集　山梨県教育委員会ほか
岩崎祥　2010『山梨県南巨摩郡増穂町町屋口遺跡』増穂町ほか
山本茂樹ほか　2012『町屋口遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第281集　山梨県教育委員会

甲斐茶塚（かんかん塚）古墳出土人骨について

坂　上　和　弘
（独立行政法人　国立科学博物館　人類研究部）

はじめに
1．保存状況
2．性別
3．死亡時年齢
4．推定身長
5．形態特徴
まとめ

はじめに

本稿は、1977年に山梨県甲府市下曽根町の「風土記の丘公園」建設に先立って山梨県教育委員会により実施された、「茶塚古墳、石室保護整備に伴う発掘調査」において出土した人骨の形質人類学的報告である。

茶塚古墳は曽根丘陵に位置し、周囲には銚子塚古墳、丸山塚古墳、大丸山塚古墳などが位置している。本古墳は直径25ｍ前後の円墳で、古墳時代前期（５世紀後半）に築造されたと考えられている。竪穴式石室は長さ4.5ｍ幅1.1ｍの長方形で主軸は北東－南西方向であった（小林と里村 1979）。石室からは、鉄製の甲冑や剣と共に鏡や轡、三輪鈴といった馬具が出土している。これらの遺物は数が少なく、数か所にまとまって検出していること、そして石室には二か所の「盗掘坑」が存在したことから、本遺跡は盗掘を受けたと判断されている。なお、本古墳は、「かんかん塚」と呼ぶ研究者もおり、山梨県史（坂本 1998）や甲斐風土記の丘公園内の表示には「かんかん塚（茶塚）古墳」と表記されているため、表題に括弧付きでかんかん塚の表記を加えた。

人骨は石室の北東部に位置し、頭骨は北側壁東端から１ｍの地点に顔面を下方に向けた状態で、四肢骨は北東隅の石材の間で検出された（小林と里村 1979）。これらの人骨は解剖学的位置を維持していないことは明らかであり、埋葬後に攪乱を受けたと判断される。出土した人骨は簡単な記載と写真が報告書に掲載された後、山梨県埋蔵文化財センターで保管されていた。

2014年、人骨は独立行政法人国立科学博物館に輸送され、清掃・修復・整理・同定が行われた。人骨の修復にはButvarB76のアセトン希釈溶液を接着剤として用いた。今後、本人骨は国立科学博物館で保管・管理される予定である。本報告書の作成にあたり、人骨の撮影はキャノンEOS 5D Mark Ⅱを用い、0.8メートルの距離から100㎜マクロレンズで撮影した。骨計測は馬場（1991）のマルチン法に従って実施した（表１と２）。比較計測値としては、山口（1989）の関東・東北地方の古墳時代人頭骨計測値と、城（1938）の古墳時代人四肢骨計測値を用いた。

表１．茶塚古墳出土人骨の頭蓋計測値

		茶塚古墳 性別不明	古墳時代人 男性	古墳時代人 女性
1	最大長	174.7	182.7	174.4
26	正中前頭弧長	126.0		
29	正中前頭弦長	109.9		
49a	眼窩間幅	19.4		
50	前眼窩間幅	17.6		
51	眼窩幅	39.7	43.0	41.1

1　保存状況

本遺跡出土人骨の保存状況は図１～３に示す。頭骨と下肢骨のみが残存しており、それ以外の部位は見つかっていない。また、骨の表面形状は比較的残存しているが、いずれの骨も部分的に破損しており、完形な骨はない。

2　性別

人骨の形態から性別を判定する方法としては骨盤や頭骨を中心として複数開発されているが、本人骨の残存部位のうち性別推定に利用できるのは頭骨形態である。本人骨の前頭骨の眉弓は痕跡的であり、女性的な印象を受ける。また、側頭骨の乳様突起は中間的な形状を示し、性判定に適していない。前頭骨の前頭結節は認められず、側面観における前頭骨の輪郭も後方に立ち上っているため、これらの部分は男性的な印象を受ける。これらの頭骨の形態から推定される性別は、「女性？」または「不明」と言わざるをえない。

本人骨の大腿骨および脛骨は比較的短く、一見女性的な印象を受けるが、太さは非常に太く、筋付着部のレリーフも明瞭であるため、男性的な印象を受ける。したがって、四肢骨形態からの性別推定は「男性？」または「不明」と判断される。

以上のことから、本人骨の性別は「不明」と判断される。ただ、古墳において埋葬主体の性別は重要な項目であるため、敢えて男女どちらかを推定するとしたら、本人骨の残存部位で性別推定に際して最も信頼できる骨形態は「眉弓」であり、その形態は女性的であることから、

表２．茶塚古墳出土人骨の四肢骨計測値

		茶塚古墳 不明 右	茶塚古墳 不明 左	古墳時代人 男性	古墳時代人 女性
大腿骨	1 最大長	418.0		444.0	384.0
	6 骨体中央矢状径	28.5		27.1	24.2
	7 骨体横径	25.2		26.6	23.7
	6/7 骨体中央断面示数	113.1		102.3	101.9
	8 骨体中央周	85.0		85.3	77.5
	8/1 頑丈示数	20.3		19.2	20.2
	10 骨体上矢状径	23.0		28.5	26.2
	9 骨体上横径	31.0		28.9	26.9
	10/9 骨体上断面示数	74.3		98.6	98.8
脛骨	1a 脛骨最大長		318.0	352.5	310.0
	3 最大上端幅				
	6 脛骨下幅				
	8 中央最大矢状径				
	9 中央横径				
	9/8 中央横断示数				
	8a 栄養孔位最大径	31.6	32.5	右33.2/左33.3	右29.9/左29.5
	9a 栄養孔位横径	23.5	24.7	右23.0/左23.4	右21.7/左21.1
	9a/8a 脛示数	74.3	76.1	右69.8/左70.4	右72.3/左71.9
	10 骨体中央周				
	10a 栄養孔位周	89.5	90.0	右89.9/左90.7	右82.8/左81.2

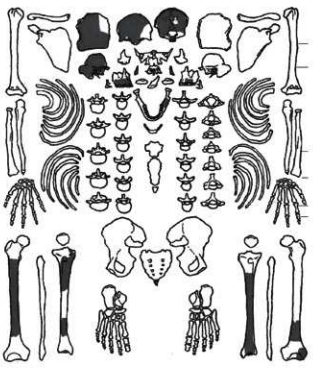


図１．茶塚古墳出土人骨の保存状況
図中の網掛け部分が残存している部位を示す。

本人骨の性別は「女性」と推定される。ただ、後述のように、本人骨の死亡時年齢は若く推定されており、坂上と安達（2009）が指摘しているように、若年個体の頭骨形態では男性を女性に誤判定してしまう傾向がある。従って、本人骨の眉弓の形態だけで性別を推定するのは問題がある。また、性別年齢既知の近代日本人（男性50個体、女性43個体、東京大学総合研究博物館、京都大学総合博物館、九州大学総合研究博物館、千葉大学医学部所蔵）の大腿骨骨体中央周および脛骨栄養孔位周と比較すると、本人骨の両周径は明らかに女性の分布範囲よりも大きい値を示し、男性平均に近い（図４）。近代日本人のデータセットで線型判別分析を行うと、ウィルクスのλが0.527、81％の正答率の判別式 y ＝0.075（右大腿骨骨体周）＋0.121（左脛骨栄養孔位周）－15.995が算出された。この式に本人骨の計測値を代入すると、1.27という判別得点が得られた。この値が正であれば、「男性」を意味するため、近代日本人の骨形態からみると本人骨は男性である可能性が高いと言える。さらに、大腿骨後面の粗線は非常に発達しており、脛骨の筋付着部も明瞭である。つまり、四肢骨は極めて男性的であると言える。よって、本人骨の性別は「不明」であるが、敢えて判断するとすれば、「男性」である、と結論づけられる。

留意すべき点としては、性別を推定する際に、「本遺跡人骨は１個体由来である」ということを前提としていることである。もし、頭骨と四肢骨が別個体由来であったなら、「女性」と「男性」の二個体であったと考えること

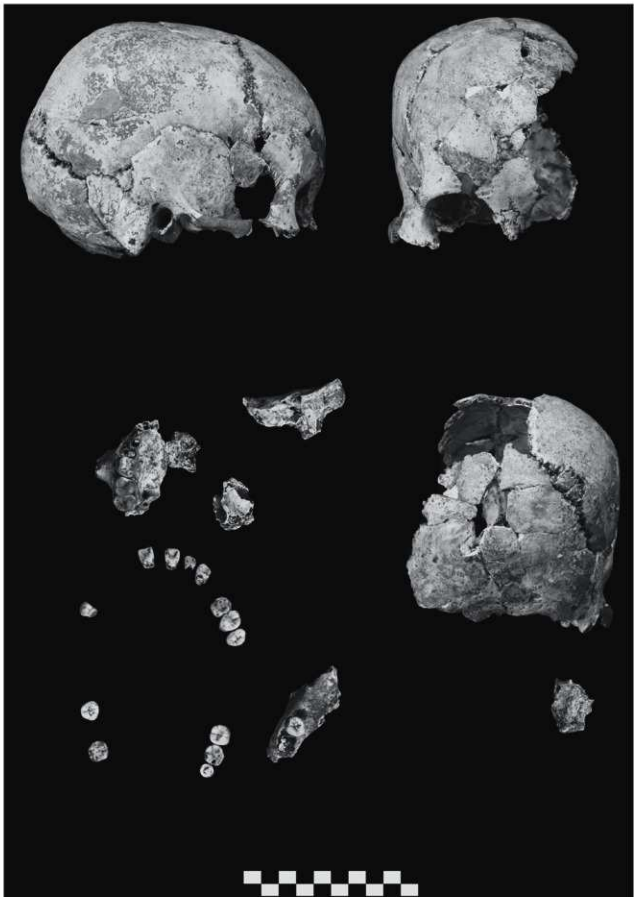


図２．茶塚古墳出土人骨の頭蓋写真

図左上が右側面観、図右上が正面観、図右下が後面観、そして図左下が側頭骨部、口蓋部、下顎骨部、ならびに歯を示す。

図３．茶塚古墳出土人骨の四肢骨写真

左右大腿骨並びに左右脛骨の前面観、外側面観、そして後面観を示す。

もできる。ただし、残存する部位は重複箇所が認められないこと、後述のように本人骨の歯は比較的若年のものであると推定されること、そして、本人骨の左脛骨近位端部に骨端線の残存のようなものが認められ、比較的若年のものと推定され（図5）、歯と脛骨から受ける死亡時年齢の印象が矛盾しないことから、本人骨は1個体由来と考えても矛盾はしない。これ以上の追求は、既存の形態学的分析においては困難であるため、DNA分析などによるさらなる分析が期待される。

3　死亡時年齢

性別推定と同様に、骨形態から死亡時年齢を推定する方法も数多く開発されているが、本人骨の死亡時年齢を推定する根拠は、歯の萌出状況と歯の咬耗度しか利用できない。本人骨の右上顎第三大臼歯および左下顎第三大臼歯は萌出していることから、20歳以上であると推定される（Ubelaker、1978）。ただし、第三大臼歯の歯冠部はまったく咬耗が認められず、右上顎第三大臼歯は第一および第二大臼歯で形成される咬合面まで到達していない（図6）。一般的に、第二大臼歯より遠心部分に第三大臼歯が萌出するスペースが存在していない場合には、第三大臼歯が咬合面に到達しない場合もありうる。ただ、本人骨の場合には、第三大臼歯の歯槽は解剖学的に正常な位置に存在し、第二大臼歯より遠心部分のスペースは充分に存在していることから、異常萌出であるとは考えられない。また、他の歯冠においても咬耗度は比較的低い傾向にある。以上のことから、本人骨の第三大臼歯はまさに萌出途上であったと判断される。従って、死亡時年齢は10歳代後半から20歳代前半と推定される。

4　推定身長

身長の推定は藤井(1960)の方法とHasegawa et al.(2009)の方法を用いた。各方法において個々の四肢骨最大長から推定された身長を平均した値を提示し、最終的には両方法の平均値を推定身長とする。

本人骨には最大長を計測できる四肢長管骨が残存していないため、厳密には身長を推定することは不可能である。ただし、右大腿骨と左脛骨の骨幹部は比較的保存状態が良好であるため、残存部位を他個体の完形な大腿骨や脛骨と対照し、元々の最大長を推測した（図7）。さらに、左脛骨の欠損した近位部が右脛骨には残存しているため、栄養孔の位置を合わせることで左脛骨最大長を推測した（図7）。対照人骨は完形である江戸時代人の下肢骨を用いた。その結果、右大腿骨最大長は418㎜、左脛骨最大長は318㎜と推測された。

本人骨が男性であると仮定した場合、この数値を藤井（1960）の回帰式に当てはめると、右大腿骨最大長では1581㎜、左脛骨最大長では1526㎜となる。同様にHasegawa et al.（2009）の回帰式に当てはめると、右大腿骨最大長では1645㎜、左脛骨最大長では1605㎜となり、それらを平均した推定身長は1589㎜となる。平本（1972）が右大腿骨最大長を藤井の回帰式に代入して推定した、古墳時代人男性平均（1631㎜）と比較すると、本人骨はやや低い推定身長を示している。

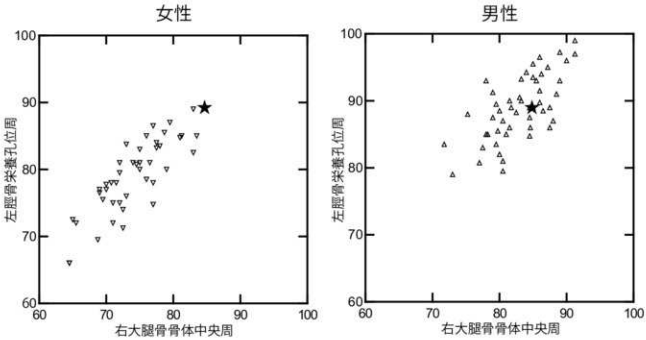


図4．下肢骨周径からの性判定

近代日本人女性（左図）および近代日本人男性（右図）の脛骨栄養孔位周と大腿骨骨体中央周の散布図に茶塚古墳出土人骨（図中星印）を当てはめている。

また、本人骨を女性と仮定し、回帰式に当てはめたところ、藤井の式では右大腿骨最大長では1547㎜、左脛骨最大長では1482㎜と、Hasegawa et al.（2009）の式では、右大腿骨最大長では1586㎜、左脛骨最大長では1545㎜となり、これらを平均した推定身長は1540㎜となる。平本の古墳時代人女性平均（1515㎜）と比較すると、やや大きい推定身長を示している。

5　形態特徴

本個体の頭蓋最大長は174.7㎜と、古墳時代人男性平均（182.7㎜）よりも小さく、女性平均（174.4㎜）と同程度である。頭蓋の上面観では、頭頂結節の発達が弱く細長い楕円形を示す。上面から見ると頬骨弓は完全に見えるため、「顎頬弓」と言える。前頭骨の眉間部には前頭縫合が部分的に残存している。後面観では、頭頂結節から側壁が垂直に下がる「家型」である。右の人字縫合に縫合間骨が認められる。側面観では脳頭蓋が比較的低く、前後が長い楕円形である。前頭骨は後方に立ち上がる。前頭結節の発達は弱い。外後頭隆起の発達は弱く、側面から見ると、後頭骨の輪郭線に埋没している。側頭筋線は前頭骨部と乳突上陵は明瞭であるが、頭頂骨部が痕跡的である。側頭筋の領域は小さく、側頭線は頭頂結節の下方を通り、大字縫合に接さない。乳様突起の発達は中間的で、尖端は下方に向く。外耳孔の形状は楕円形で、長軸が斜めである。頬骨上縁にわずかな骨隆起がある。前頭骨の頬骨突起は外側に張り出す。下顎窩は深く狭い。下顎窩前方の関節結節は明瞭であり、変形は見られない。頬骨弓の下縁は太く、筋粗面も明瞭である。

顔面部の骨は殆ど残存していない。唯一計測可能な眼窩幅は39.7㎜と、古墳時代人男性平均（43.0㎜）や女性平均（41.1㎜）よりも小さい。

歯の残存状況は以下の通りである。歯式の数字は残存する歯を示す。下記歯式中のローマ数字はブロカの咬耗度（0：咬耗がない、Ⅰ：咬耗はエナメル質のみ、Ⅱ：象牙質が一部露呈、Ⅲ：咬合面のエナメル質が消失して全面的に象牙質が露呈、Ⅳ：歯頸部まで咬耗）を示す。大部分の歯は歯冠のみが残存しており、齲蝕は認められなかった。歯の計測は行っていない。全体的に咬耗が弱く、特に第二大臼歯並びに第三大臼歯の咬耗は弱い。

0	0	Ⅱ	1	Ⅱ		Ⅱ	1	1		Ⅱ	1	0	
8	7	6	4	1		1	2	3		6	7	8	
8		6							5	6	7	8	
0		Ⅱ							1	Ⅱ	1	0	

四肢骨は大腿骨と脛骨しか残存していない。前述のように推定された右大腿骨最大長は418.0㎜と、古墳時代人男性平均（444.0㎜）よりも小さいが、女性平均（384.0㎜）よりも大きい。また、右大腿骨中央周は85.0㎜と、古墳時代人男性平均（85.3㎜）と同程度であるが、女性平均（77.5㎜）よりも大きい。大腿骨後面の粗線は中程度に突出し、粗線の内側唇は外側唇よりもより後方に

図５．右脛骨近位部後面観

図中上方の矢印は骨端線の局所的な残存を示す。また、図中下方の矢印は骨棘を示す。

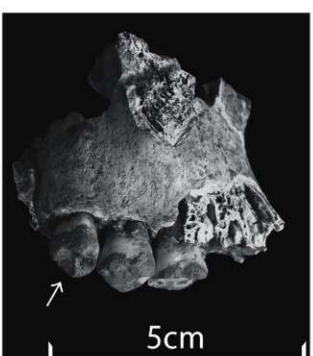


図６．右上顎骨大臼歯群の側面観

図中矢印は第三大臼歯を示す。隣接する第二大臼歯ならびに第三大臼歯が形成する咬合面に達していない。また、歯の表面も未咬耗である。

突出している。骨体中央の前後径と横径の比率を示す骨体中央断面示数は、右113.1と、古墳時代人男性平均（102.3）や女性平均（101.9）よりもはるかに大きい。この示数は大腿骨骨体の形状を示し、値が大きいほど大腿骨骨体が後方に突出した、いわゆる「柱状性大腿骨」であることを意味する。柱状性大腿骨は採集狩猟民に広くみられ、日本人集団の中では縄文時代人の特徴として考えられている。たとえば縄文時代の中後晩期人男性の平均値は116.4、女性の平均値は110.6であり（小片 1981）、本人骨はこれらと近い値を示している。柱状性大腿骨の要因としては、大腿骨後面の粗線に付着する内転筋群が発達していたことや、大腿骨全体にかかる曲げが強かったことなど、その個体が生前に置かれていた下肢の活動性と関係があると考えられている。また、Molleson and Blondiaux（1994）が指摘するように、粗線の著しく隆起することは特定の活動様式（たとえば乗馬習慣）が、影響している可能性も考えられる。Hashimoto（2013）は古墳時代人の大腿骨の柱状性を指摘し、乗馬との関係性を指摘している。乗馬姿勢を安定させるには、左右の大腿部で馬の胴体を挟み込むことが必要であるが、この挟み込む動作（股関節の内転）は内転筋群が収縮することでもたらされる。そのため、乗馬習慣があると内転筋群が発達し、その発達によって大腿骨後面の粗線が後方に突出する、と考えられる。本遺跡から出土した遺物は馬具が多いことも考慮すると、本人骨の大腿骨に見られた柱状性は、乗馬などの活動様式によってもたらされた可能性はある。ただ、他の人骨部位が残存していないため、あくまで可能性が示唆される程度である。大腿骨上部骨体の形状を示す骨体上断面示数は、右74.3と、古墳時代人男性平均（98.6）や女性平均（98.8）よりも小さい。従って、大腿骨は「超扁平大腿骨」に分類される。

前述のように、推定された左脛骨最大長は右318.0mmと、古墳時代人男性平均（352.5mm）よりも小さく、古墳時代人女性平均（310.0mm）よりもやや大きい。また、栄養孔位周は右89.5mm、左90.0mmと、古墳時代人男性平均（右89.9mm、左90.7mm）と同程度で、女性平均（右82.8mm、左81.2mm）よりも大きい。脛骨の前縁は鈍く、その軌道は湾曲している。脛骨後面のヒラメ筋線は明瞭である。脛骨後面の鉛直線は陵となって隆起している。脛骨骨体の形状を示す脛示数は、右74.3、左76.1と、古墳時代人男性平均（右69.8、左70.4）よりもやや大きく、古墳時代人女性平均（右72.3、左71.9）よりわずかに大きい。この値が小さいほど脛骨は扁平であることを示すことから、本人骨の脛骨骨体は扁平であるとは言えず、左右とも「広

図７．右大腿骨最大長ならびに左脛骨最大長の推測方法

図中左側が右大腿骨、右側が左脛骨の最大長を推測する方法である。いずれも後面観であり、筋付着部の形状や輪郭線の変遷などを基にして対照資料を探した。脛骨は本人骨の栄養孔最下点を左右で揃え、さらに対照資料では遠位端外側部の最下点で位置を合わせている。

脛」に分類される。脛骨遠位端前面には前下窩が明瞭であるが、これは習慣的な蹲踞姿勢によるものと考えられる（馬場 1970）。右脛骨近位端の内側部に小さな骨棘が形成されている（図５）。この骨棘は筋肉や腱（ここでは半膜様筋の延長部分もしくは膝窩筋腱の一部）における外傷や骨腫瘍の初期段階などが疑われる（Mann and Hunt, 2005）。

まとめ

茶塚古墳出土人骨を形態学的に分析した結果、１）本人骨の保存状況は良好ではない、２）性別不明であるが、敢えて言うならば男性である可能性が高い、３）死亡時年齢は青年である、４）推定身長は男性とするならば159cmと古墳時代人男性平均より小さく、女性とするならば、154cmと古墳時代女性平均よりも大きい。５）大腿骨は柱状性を示し、乗馬習慣と関係がある可能性がある。６）いわゆる習慣的な蹲踞姿勢をとっていたと考えられる。７）右脛骨の内側部に何らかの病変があった可能性がある。

謝辞

大変貴重な本遺跡人骨を調査する機会を与えてくださった、山梨県埋蔵文化財センターの保坂康夫氏に感謝申し上げます。また、人骨の修復・整理をして頂いた国立科学博物館の佐伯史子氏にも深く御礼申し上げます。

文献

馬場悠男（1970）蹲踞その他坐法の影響による日本人下肢骨の特徴について．人類学雑誌78（3）：213-234.

馬場悠男（1991）人骨計測法．「人類学講座　別巻１人体計測法」，雄山閣，東京

藤井明（1960）四肢長骨の長さと身長との関係に就いて。順天堂大学体育学部紀要３、49-61.

Hasegawa I., Uenishi K., Fukunaga T., Kimura R., and Osawa M.（2009）Stature estimation formulae from radiographically determined limb bone length in a modern Japanese Population. Legal medicine 11 ：260-266.

Hashimoto H.（2013）Life style indicated by the pilaster of femur. Anthropological Science 121（3）：233

平本嘉助（1972）縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的変化．人類学雑誌80（3）：221-236

城一郎（1938）古墳時代日本人人骨の人類学的研究、第二部上肢骨（173～244）、第三部下肢骨（245～324）人類学報　1

Mann R.W. and Hunt D.R.（2005）Photographic Regional Atlas of Bone Disease（3rd Ed.）. Charles C Thomas Publisher Ltd, Springfield.

小片保(1981)縄文時代人.「人類学講座５」,雄山閣,東京.

坂上和弘、安達　登（2009）日本人集団における頭蓋形態からの性判定法の評価．日本法医学雑誌63（2）、125-140.

坂本美夫(1998)かんかん塚古墳(茶塚古墳)．山梨県史(資料編１　原始・古代１)．山梨県、634-637

Ubelaker D.H.（1978）Human Skeletal Remains. Excavation, analysis, interpretation. Taraxacum Washington.

山口敏（1989）第Ⅴ章　赤羽台横穴墓群出土の人骨.「赤羽台遺跡　赤羽台横穴墓群」東北新幹線赤羽地区遺跡調査会・東日本旅客鉄道株式会社．東京.

小林広和、里村晃一（1979）風土記の丘埋蔵文化財調査報告書第１集　甲斐茶塚古墳．山梨県教育委員会

白目を剥いた人面墨書土器
－平田宮第２遺跡７号土坑出土資料をめぐって－

網　倉　邦　生

はじめに
1　研究略史
2　検討
（1）人面墨書土器の事例集成
（2）事例の分析と解釈
おわりに

はじめに

平田宮第２遺跡は、山梨県中央市を北から南に流下する今川右岸の、標高252ｍの地点に位置している。遺跡周辺は、河川による堆積作用の影響を受けており、確認された遺構面の内、最も新しい鎌倉時代の水田面は、厚い砂礫層に覆われていた。地下水位が高いため、木製品の依存状況が極めて良く、当時の生活を物語る貴重な資料群が検出されている。

山梨県埋蔵文化財センターが実施した、平田宮第２遺跡の第４次調査では、平安時代から鎌倉時代までの４つの遺構面が検出された。上から３番目の遺構面としては、竪穴建物跡１軒、井戸１基、溝状遺構20基、土坑11基が確認されており、10世紀前半代の集落が展開していたと判断される。

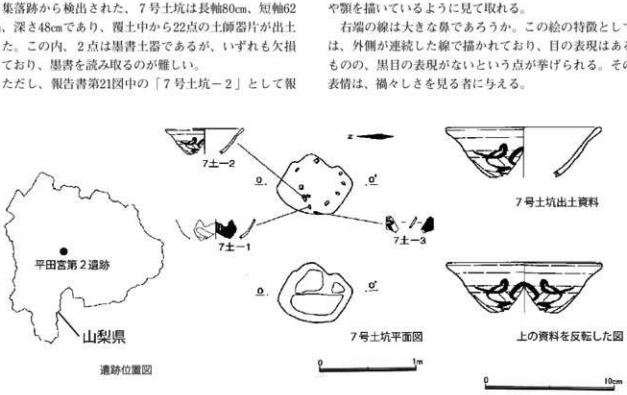
集落跡から検出された、７号土坑は長軸80cm、短軸62cm、深さ48cmであり、覆土中から22点の土師器片が出土した。この内、２点は墨書土器であるが、いずれも欠損しており、墨書を読み取るのが難しい。

ただし、報告書第21図中の「７号土坑－２」として報告した資料は、字ではなく何らかの絵を描いているのではないかと考えてきた。連続した線により潰れた長楕円形を描いた後に輪郭を描き出すように線をつなげている。この線と破片右側の線が連続しているかは不明であるが、右側の線は別の図形のようである。

資料「７号土坑－２」は、底部は欠損しているものの、墨書が施されている箇所より左側が全体の四分の一程度残存しているが、墨書は図示した図形より左側には広がりを見せない。このため、墨書の表現は、欠損した位置で左右対称形になるのではないかと考えた。

今回、遺物の再検討を行う中で、資料の図を右側に反転したところ、第１図のようになった。この図を見る限り、資料「７号土坑－２」は、人面墨書土器と判断される。潰れた楕円とみられた線は目を表現しており、続けて頬や顎を描いているように見て取れる。

右端の線は大きな鼻であろうか。この絵の特徴としては、外側が連続した線で描かれており、目の表現はあるものの、黒目の表現がないという点が挙げられる。その表情は、禍々しさを見る者に与える。



第１図　平田宮第２遺跡７号土坑平面図、７号土坑出土資料

山梨県では、宮の前遺跡と松原遺跡から人面墨書土器が出土している。宮の前遺跡の資料は、2号溝から出土した4点の土師器鉢片であり、目・眉・髭などが表現され、8世紀から9世紀前半に位置づけられる。松原遺跡の資料（第3図11）は、試掘トレンチから出土したもので、土師器皿の底部外面に目・眉・鼻・髭が描かれており、10世紀前半とされている。また、松原遺跡の資料も目の中の黒目の表現が欠落している。10世紀前半代の資料で黒目の表現がないという点で、平田宮第2遺跡と松原遺跡は共通している。

ただし、平田宮第2遺跡の資料について、墨書が左右対称になるというのはあくまで仮説であり、周辺地域の調査で同じモチーフを持つ人面墨書土器が出土するなどの発見によって、検証されることが望まれる。

平田宮第2遺跡の墨書についての解釈を留保しても、松原遺跡の様な黒目の表現がない人面墨書土器について検討の余地がある。今回の分析では、人面墨書土器の研究を参照しつつ、白目を剥いた人面墨書土器を集成し、特異な人面表現が描かれた背景について検討を行いたい。

1　研究略史

人面墨書土器の研究史は、先行研究によって詳細にまとめられている。（鬼塚 1996、高島 1998）そこで、ここでは東国出土の人面墨書土器にポイントを絞って触れたい。

人面墨書土器は、古代の都城における出土例から研究が深まっていった。（田中 1973、水野 1978、金子 1985）しかし、東国の集落遺跡からの資料が増加する中で、都城から出土した人面墨書土器とは異なる使用法を想定せざるを得なくなっていた。（大竹 1985）

このような状況の中で、笹生衛は、12遺跡69事例を検討した上で、坏型人面土器を主体とする器形が地方において8世紀末に成立し、9世紀前半まで存続することや皿型人面土器は10世紀代に成立し、中世まで存続することを指摘した。坏型人面土器が成立した背景として、律令国家の疫神観が饗応から祓いへ転換し、地方においても国家の主導のもとに疫神祭が盛行するようになったためであり、皿型人面土器は鬼神祭のような個人レベルでの対疫病陰陽道祭祀に起因するとした、人面墨書土器祭祀の歴史的な位置づけを行った論考を提出した。（笹生 1986）

平川南は、東国の集落遺跡から出土した人面墨書土器について、8世紀代を遡るものが存在することから、国家的な祭祀が民間の祭祀に変質したと捉えるより、在地における土着神信仰に人面墨書土器が用いられたものと考え、多文字墨書土器に「国神奉」、「国玉神奉」などと記されたものがあることから、描かれた人面は国神であると解釈した。（平川 1996）

高島英之は、東国の集落遺跡出土の人面墨書土器について、宮都を中心とする畿内地域とは異なる発展過程を辿っており、用途・機能・使用法が異質であること、人面墨書土器は依代として神霊に供献されたものであること、人面墨書土器に描かれた顔は、依代として自らの体を供献する代わりに祭祀の主体者が神と交感した自らの顔を書いたと主張した。（高島 1998）

2004年には東国出土の人面墨書土器を取り上げたシンポジウムが開催され、多様な検討がなされた。

人面墨書土器祭祀の主体者については、都城や地方官衙においては、律令国家が主体となり祭祀を行ったと考えられているが、官人や庶民層も祭祀を行っていた可能性も考えられている。（荒井 2004）一方で、東国の人面墨書土器が出土する集落遺跡において、「丈部」銘の墨書土器も検出されたことから、祭祀主体として「丈部」氏も想定されている。

人面墨書土器に表現された「人面」については、疫神・疫鬼・胡人・国神・竈神・仏・祭祀者など多様な可能性が指摘されている。（荒井 2004）都城における人面墨書土器は生産・流通について国家が関わっていたとされる（上村 1994）ことから、災いをもたらすもの（疫神・疫鬼・胡人）を描いていた可能性が強い。一方で東国においては、地方官衙における疫神祭に伴う都城と同じ性格の人面墨書土器に加え、その表現内容や墨書から国神・竈神・仏・祭祀者など様々な内容が想定されている。このため、東国における人面墨書土器は事例ごとに検討する必要があると言える。

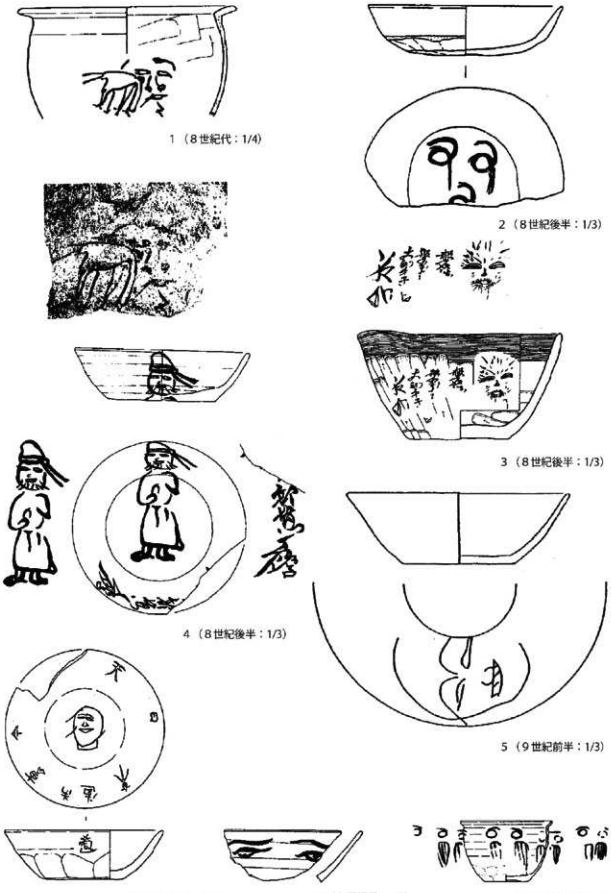
2　検討

(1) 人面墨書土器の事例集成

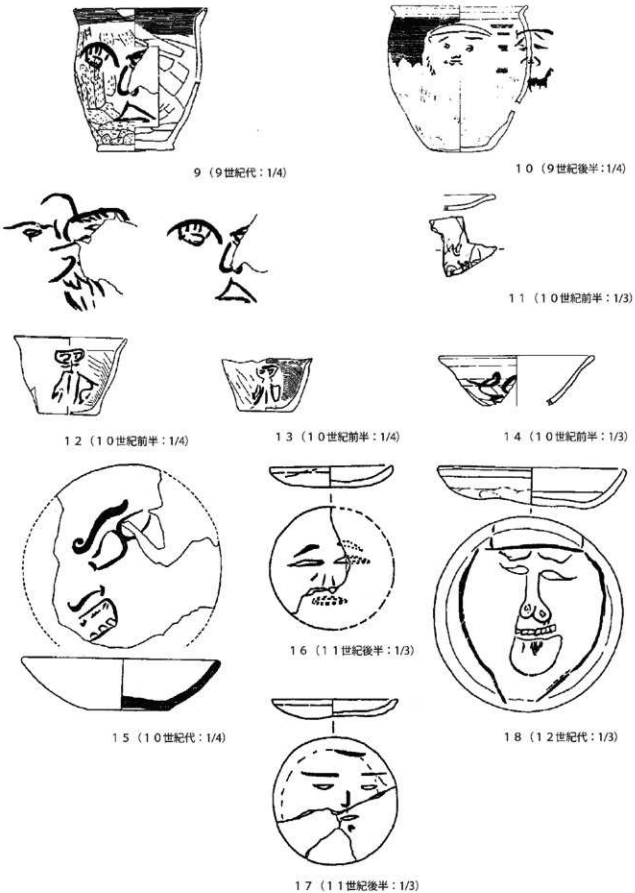
人面墨書土器の集成については、松原遺跡の様に黒目が表現されていないものを対象とし、刻書土器も含めた。なお、研究略史で振り返ったように、都城を中心とする西国と東国では、人面墨書土器の内容が異なることから、東国のみを対象とした。この結果、集成されたのは12遺跡18点である。第2・3図は年代順に並べた遺物の図である。また、資料ごとの表現内容［帽子・頭髪・眉間・眉毛・目・黒目・鼻・口・歯・耳・髭・(顔の) 輪郭・体］の有無を第1表にまとめてみた。

(2) 事例の分析と解釈

今回の検討では、対象から外したが、都城出土の人面墨書土器にも黒目が表現されていないものが認められる。その理由としては、この世ならざる異形のもの（疫神）の表現として適当であったことが考えられる。東国においても、官衙において疫神祭を実施したと想定すると、都城と同じ理由で白目を剥いた表現を採用したことが指摘できる。しかし、研究略史で述べたように、東国においては、多様な表現が確認されていることから、全ての人面墨書土器が疫神を表しているとは考えづらい。そこで、ここでは集成した事例について、人面が施された背景について検討したい。



第2図　人面墨書土器集成図



第3図　人面墨書土器集成図

	遺跡名	所在地	描写形態	器質	器種	文字	土器年代	記載部位	出土遺構	表現の有無													
										帽子	頭髪	眉間	眉毛	目	黒目	鼻	口	歯	耳	髭	輪郭	体
1	唐楯遺跡	愛知県岡崎市針先町字唐楯	墨書1面	土師	甕	なし	8世紀	体部外面	水田耕作中に採取	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	○	×	×
2	稲荷前A遺跡	神奈川県平塚市稲荷前	墨書1面	土師	坏	なし	8世紀前半	底部外面	3号竪穴住居	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	–	×	×
3	荒田目条理遺跡	福島県いわき市平菅波	墨書1面	土師	坏	[体外]磐城□磐城郡大部手古殿百代	8世紀後半	体部外面	3号溝跡	×	○	×	○	○	×	○	○	×	×	○	×	×
4	市川橋遺跡	宮城県多賀城市市川字館前、浮島字矢中	墨書1面	須恵	坏	[体外]□部□嶋ネ□□	8世紀後半	体部外面～底部外面	SD5021河川跡	○	×	×	×	○	×	○	○	×	×	○	○	○
5	上谷遺跡	千葉県八千代市保品字上谷	ヘラ書1面	土師	坏	なし	9世紀前半	体部外面	13~4竪穴住居	×	×	×	○	○	×	○	○	○	×	×	○	×
6	海老名本郷遺跡KOE地区	神奈川県海老名市本郷2274	刻書1面	土師	坏	[体内]天 日 東 道 南 東 今[体内]道道[底外]道	9世紀	底部内面	竪穴住居	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	×	○	×
7	市川橋遺跡	宮城県多賀城市市川字館前、浮島字矢中	墨書2面以上	須恵	坏	なし	9世紀	体部外面	SD5161A河川跡	×	×	–	○	○	○/×	–	–	–	×	–	×	×
8	秋田城跡	秋田県秋田市寺内	墨書5面	土師	甕	なし	9世紀後半	体部外面	SG463沼沢跡	×	×	×	×	○	×	×	×	×	○	○	×	×
9	市川橋遺跡	宮城県多賀城市市川字館前、浮島字矢中	墨書2面	土師	甕	なし	9世紀	体部外面	SD5055河川跡	×	×	×	○	○	○/×	○	○	×	×	○/×	×	×
10	秋田城跡	秋田県秋田市寺内	墨書2面	土師	甕	なし	9世紀後半	体部外面	SG463沼沢跡	○	×	×	○	○	×	○	○	×	○	○	×	×
11	松原遺跡	山梨県笛吹市一宮町東原字松原	墨書1面	土師	皿	なし	10世紀前半	体部外面～底部外面	試掘トレンチ内	×	×	×	○	○	×	○	○	×	×	○	×	×
12	箱根田遺跡	静岡県三島市安久152-1他	墨書1面	土師	鉢	なし	10世紀前半	体部外面	河川	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○
13	箱根田遺跡	静岡県三島市安久152-1他	墨書1面	土師	鉢	なし	10世紀前半	体部外面	河川	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	○	○
14	平田宮第2遺跡	山梨県中央市下河東1110	墨書1面	土師	鉢	なし	10世紀前半	体部外面	7号土坑	×	×	×	×	○	×	○	–	–	×	–	○	×
15	殿山遺跡	茨城県水戸市殿山大串	墨書1面	土師	坏	なし	10世紀	底部内面	14号住居跡	×	×	×	○	○	×	○	○	○	×	×	×	×
16	斎宮跡	三重県多気郡明和町竹川・斎宮地内	墨書1面	土師	皿	なし	11世紀後半	底部外面	SD578	×	×	×	○	○	×	○	–	–	×	–	×	×
17	斎宮跡	三重県多気郡明和町竹川・斎宮地内	墨書1面	土師	皿	なし	11世紀後半	底部外面	SD578	×	×	○	○	○	×	○	○	×	×	–	×	×
18	柳の御所遺跡	岩手県西磐井郡平泉町字柳之御所	墨書1面	土師	皿	なし	12世紀	底部外面	井戸跡28SE4	○	×	×	○	○	×	○	○	○	×	○	○	×

※項目「表現の有無」中の「○」はあり、「×」はなし、「–」は不明である。　**第１表　人面墨書土器集成一覧表**

白目を剥いた表現が生成した要因を考える前に、古代人が意図して表現した資料とそうではないものを弁別する必要がある。白目を剥いた表現ではない資料として、表現の省力化が認められるものが挙げられる。第３図12・13は静岡県箱根田遺跡から出土した資料であるが、箱根田遺跡においては、８世紀後半から９世紀前半にかけて、在地の甕を用いながらも、正倉院に伝わる「布作面」とも比較しうる人面墨書土器が出土している。そこから、９世紀後半を経て、10世紀前半の人面墨書土器が制作されるが、表現内容の退化が著しい。おそらく、「人面」表現を行った者に、前代の制作に係わる規範意識が失われたことにより、黒目の表現も脱落したと考えられる。第２図２・８は、年代的に第３図12・13より古いが、人面表現の省略が著しい。このため、これらの事例について、意図的に黒目の表現を行わなかったと位置づけることはできない。宮城県市川橋遺跡は多賀城周辺に位置しているが、人面表現が複数あり、都城の形態に近い。都城の人面墨書土器には、複数ある人面の表現を意図的に書き分けるものが認められる。第２図７、第３図９・10も都城の事例と同じく、黒目の有無により複数ある人面表現に差を付けようとしたのではないだろうか。第２図４は、報告者が戯画ではないかとした資料であるが、これは全身を描いたため、黒目の様な微細な表現ができなかったと考えられる。

上に挙げた資料以外は、なんらかの意図により黒目の表現が行われなかった資料である。第２図１は人面表現の左側に四足の獣が表現されているが、これを牛馬とみなせば、殺牛馬祭祀に伴う漢神を描いた図とも考えられる。第２図５と６は微細な点で異なる（眉と目の大きさや歯の有無）が、年代的にも近く全体の表現も類似している。同一のモチーフを素材に描いているのかもしれない。第３図16から18は、11世紀後半から12世紀代に比定される土師器皿の底部外面の全体を用いて、人面が描かれている。同じ土師器皿でも底部外面から体部外面にかけて描く10世紀前半代の第３図11とは異なっており、この段階で人面の描き方についての前代とは異なる規範が構築されたのかもしれない。

おわりに

平田宮第２遺跡は、10世紀前半代に新たに開発された荘園に関わる集落と位置づけられ、斎串を伴う土坑墓や曲物が入れられた井戸、機織具など、畿内地域との交流の結果もたらされたと考えられる資料群が出土している。10世紀代には甲斐国において、遺跡数や竪穴建物跡が増加する時期であると考えられている。当然この現象は、甲斐国の中だけで完結していた訳ではなく、他国からの人の流入も想定しなければならない。

このような状況の中で、それまでなじみのなかった祭祀が外からもたらされたのではないだろうか。

謝辞

今回の論考執筆にあたり、日本考古学協会会員の岡野秀典氏に多数の論考を貸していただいた。また、人面墨書土器の研究史について、岡野氏の丘陵考古学研究会発表レジュメ「人面墨描土器研究史ノート」からも多くの知見を得た。記して感謝する次第である。

引用参考文献

上村和直　1992「人面土器製作技術の検討」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会
上村和直　1994「都城出土人面土器に関する二、三の問題」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
大竹憲治　1985「関東地方出土の墨書人面土器小考」『史観』第18号
鬼塚久美子　1996「人面墨書土器からみた古代における祭祀の場」「歴史地理学」第181号　歴史地理学会
鬼塚久美子　1997「古代の人面墨書土器出土地の考察－大阪を事例として－」『奈良女子大学大学院・人間文化研究科年報』12
神奈川県地域史研究会・盤古堂付属考古学研究所　2004『古代の祈り－人面墨書土器からみた東国の祭祀－』シンポジウム発表要旨　株式会社盤古堂
神奈川県地域史研究会　2005「特集：シンポジウム「古代の祈り－人面墨書土器からみた東国の祭祀－」」『神奈川地域史研究』第23号
金子裕之　1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集
笹生衛　1986「奈良・平安時代における疫神観の諸相－坏（椀）・皿形人面墨書土器とその祭祀－」『平安時代の神社と祭祀』国書刊行会
高島英之　1998「東国集落遺跡出土の人面墨書土器についての一考察」『神奈川地域史研究』第16号
高島英之　2000「墨書土器村落祭祀論序説」『日本考古学』第９号　日本考古学協会
田中勝弘　1973「墨書人面土器について」『考古学雑誌』58-4
水野正好　1985「招福・除災－その考古学－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第７集
水野正好　1986「鬼人と人とその動き－招福除災のまじないに－」『文化財学報』第４集　奈良大学文学部文化財学科
平川南　1996「“古代人の死”と墨書土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第68集
山中章　2003「古代都市と商業」『東アジアと日本の考古学』Ⅴ　同成社
山梨県埋蔵文化財センター他　2007『平田宮第２遺跡』

打製石斧の石材と形態
－山梨県酒呑場遺跡Ⅰ区の資料分析－

保　坂　康　夫

はじめに
1．石材分類
2．石材組成
3．形態
4．まとめと考察

はじめに

酒呑場遺跡は山梨県北杜市長坂町に所在する縄文時代中期を中心とする拠点集落である。山梨県埋蔵文化財センターによって４次にわたり10,400㎡の発掘調査が実施され、報告書は遺構については1997と1998年に、遺物については2005年に発行しているが、膨大な資料のため報告書で十分報告ができなかった資料について少しずつ資料報告を行っている。今回は、打製石斧の石材と形態について、中期環状集落の１/４にあたるⅠ区の資料を対象として資料提示と若干の考察を行う。

Ⅰ区の打製石斧は諸磯式期から曽利式期まで59軒の住居跡から総数996点の出土が確認されている。住居跡出土といっても、その覆土層が、当該時期の土器群が出土する中層と、それ以降の時期の土器群が出土する上層、ほとんど遺物を含まない下層と３層に区分でき、上層の石器群は他の時期の混入が多いと考えられることから、中層の石器群を対象とする必要がある。今回は、時期ごとの石材と形態の様相を把握できるように、特に中層に10点程度以上の資料が確保できる住居跡を対象とし、抽出した打製石斧の数は469点である（第１表）。

1．石材分類

大きく砂岩、泥岩、粘板岩、泥岩ホルンフェルスの４種類が主体を占める。さらに、頁岩、結晶片岩、緑色凝灰岩などが少量確認できる。これをさらに、風化表面特徴による細分類を行った[1]。石器表面を肉眼により観察し、風化状態における表面の色調や、風化面において判断しうる構成粒子の粒度や分級度などの岩質によって分類した。以下に、細分類ごとの特徴を記載する（第１図）。

1）砂岩

砂岩Ａ

白灰～青灰色で、黄色味のあるものはみられない点が強調される。風化による脆弱化がほとんどみられない。粗粒（径0.5～1.0㎜）から中粒（0.25～0.5㎜）の砂粒で、長石と石英の粒子を主体とするが長石が比較的多く、泥質の基質が比較的少ない。白色のスジをなす節理が伴う場合がある。層状組織がほとんどみられず、均質な印象をうける。片理はみられない。

砂岩Ｂ

白灰～白橙色で、表面が風化して軟質になり、部分的に風化面が剥がれて黒灰色の地肌がまだら状に露出している。中粒以下の粒度で、泥質の基質の量が砂岩Ａよりも多い。鉄さび状の成分が沈着した節理が入る場合がある。層状組織がみられるが、単層に近いものが多い。砂岩Ａより軟質な印象をうける。片理はみられない。

砂岩Ｃ

黒灰色で、やや青みをおびるものもある。風化による脆弱化がほとんどみられず、砂岩Ａより硬質な印象をうける。粒度は中粒～細粒で、部分的に粒度の大きめな層理が入るものがあるが、層状組織の発達は弱い。黒色の粘板岩の小片が部分的に入るものもある。片理がほとんどないが、弱いものが見られる場合がある。

砂岩Ｄ

黄褐色に風化し、表面が脆弱化しているが、砂岩Ｂのようにまだら状の剥がれがみられない。細粒～粗粒で、泥質の基質の量が多い。層状組織がみられるが、単層に近いものが多い。片理はみられない。

その他の砂岩

上記の分類群には帰属しない特長をもつ砂岩がそれぞれ単体で数個体ある。

2）泥岩

泥岩Ａ

表面が風化し白灰色で、部分的に剥がれてまだら状に黒灰色の地肌が露出し、ほぼ全体の風化面が剥がれてしまったものもある。葉理がみられ、よく発達し目立つものと目立たないものとがある。鉄さび状の節理がある場合がある。片理はみられない。

泥岩Ｂ

やや暗い白黄色に表面が風化し、泥岩Ａと違いまだら状の剥がれがみられない。片理はみられないか、若干みられるものがある。

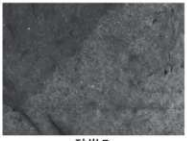
第１表　石材組成表

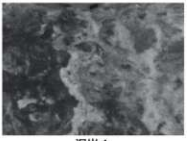
番号	産地	石質	黒雲母	角閃石	輝石	緑泥石	石英	長石	方解石	斜長石	正長石	不透明鉱物	赤鉄鉱	白雲母	白色粒	白雲母	その他特記事項
1	西崎	ヤーム	10	1	1	2				1		3		1			輝石斑晶
2	五條ヶ台	1	11	1		1	1	3	1			1		1		2	砂岩様、泥砂岩
3	五條ヶ台	46	6	1		1		1			2	3					
4	五條ヶ台	47	15	4		1		1	1	1	1	4		1		1	砂岩
5	鳴沢	16	31	7	1	1		4		2	2	6		5		3	砂質粘土ぶ、粘晶片岩１点
6	鳴沢	44	11	2		1		1		2		3	2				
7	鳴沢	45	10	2		2	1	1					2	2			
8	鳴沢	12	34	9		1	2		1	3	2	11	3				
9	鳴沢	32	51	11	2	2		3	3	4	5	9	16	1	1		緑泥石色砂岩
10	鳴沢	5	22	5		3	1		4	3		3	2		1		輝石斑晶
11	鳴沢	7	10	2			1	2	3			1			1		黒曜
12	鳴沢	10	22	3	2	2		4	2	4	2	1	1				
13	鳴沢	20	44	11	2	6	2	5	3		3	7	4		1		ホルン石
14	鳴沢	33	23	7			2	3		2	1	6	2				
15	鳴沢	35	10	1		2		2		1		2	2				
16	鳴沢	49	38	12		6	1	3	2	2	1	3	5	3			
17	鳴沢	34	11	3			1	1				4	1		1		角閃石斑晶
18	鳴沢	36	11	2					2	1	1	2	2		1		黒曜
19	小戸氏	25	15	2	3			5			3	1	1				
20	小戸氏	42	10	8			1	1		1					1		輝石斑晶
21	小戸氏	43	38	9		2	2	2	3		7	7				6	輝石斑晶４点、粘晶片岩１点、砂質泥岩１点
22	小戸氏	50	26	6	1	3		5				2	5		2		黒ずんだ緑ー灰緑色
23	安倉	21	8	3	2			2				1					
	総計		469	112	14	37	15	49	25	29	30	82	56	4	22		

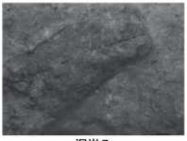
砂岩Ａ

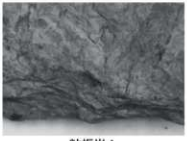
砂岩Ｂ

砂岩Ｃ


砂岩Ｄ


泥岩Ａ

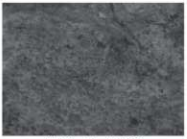

泥岩Ｂ


粘板岩Ａ

粘板岩Ｂ

ホルンフェルスＡ

ホルンフェルスＢ


ホルンフェルスＣ

第１図　石材風化表面写真

3）粘板岩

粘板岩A

白灰～黒灰色でやや青味をもつものもある。片理が強く、硬質である。人為的に焼かれているもは黒赤褐色を呈する。

粘板岩B

白黄色で、表面の風化が進み脆弱化している。片理が非常に強く、表面が容易に剥がれてしまう。

その他の粘板岩

上記の分類群には帰属しない特長をもつ粘板岩がそれぞれ単体で数個体ある。

4）ホルンフェルス

ホルンフェルスA

泥岩をベースとし、白橙～暗橙色で、熱変成による赤褐色の斑状変晶が多量にみえる。斑状変晶の大きさは、径0.2～2㎜程度と多様である。葉理が発達し、白いスジを交えた縞状組織が発達している。表面の脆弱化はあまりみられず、比較的硬質である。片理がみられない。

ホルンフェルスB

泥岩をベースとし、黒灰色を基調とし、熱変成による斑状変晶が多量にみえる。斑状変晶は径0.2～2㎜程度と大きさが変異に富み、赤褐色や黒色、白褐色などのさまざまな色調がみられる。表面の脆弱化はあまりみられず、比較的硬質である。片理がみられない。

ホルンフェルスC

粘板岩をベースとし、黄褐色で、粘板岩Bが熱変性を受けたもの。赤橙色の径0.2㎜以下の微細な斑状変晶が少量みえる。片理が強く、脆弱化が進んでいる。

その他のホルンフェルス

上記の分類群には帰属しない特長をもつホルンフェルスが単体で数個体ある。

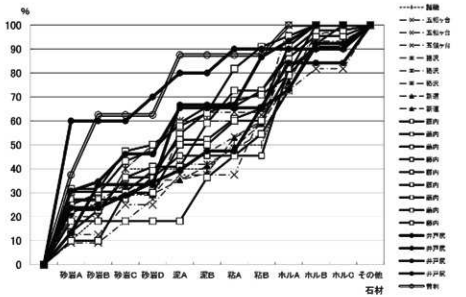
5）その他の石材

結晶片岩、礫岩、頁岩、緑色凝灰岩、斑れい岩が単体でみられる。

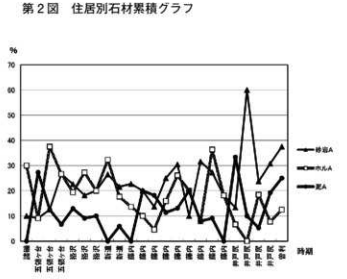
2．石材組成

第１表に各住居跡中層出土の打製石斧の石材ごとの数を示した。時期変化の比較のため、諸磯式期の住居跡の中層出土品をまとめたものと、曽利式期の21号住居址の例を参考データとして提示した。

総数でみると、砂岩Aが最も多く、全体の約1/4を占める。次いで多いのがホルンフェルスA・Bである。この構成状況について、時期ごとに変化があるかどうかを視覚的に認識するため、累積グラフにして比較して見た（第２図）。グラフの位置が、井戸尻式期と曽利式期の住居跡のグラフは上方にあり、藤内式期は中央付近に、その他の時期は下方に偏って位置するように見える。この違いの要因として指摘できるのは、比較的量が多い砂岩A、ホルンフェルスA、泥岩Aの3種の変化である（第３図）。砂岩Aは、井戸尻式期に最も多い住居跡があり、時期を追って占有率が高いものが目立つようになっている。一方、ホルンフェルスAは各時期に平均してあるように見えるが、井戸尻式期は比較的占有率が低い。泥岩Aは狢沢式期、新道式期で特に低い。このほか、砂岩Bが五領ヶ台式期に、泥岩Bが狢沢式期にみられない点が



第２図　住居別石材累積グラフ



第３図　石材時期変化グラフ

指摘できる。このように、時期ごとに若干の組成変化がみられる。

なお、これらの石材は酒呑場遺跡の立地する八ヶ岳山麓では産出しない。得られるとすると、直近では遺跡の西側で、八ヶ岳火山麓崖下の釜無川河床である（第４図）。遺跡からは、数キロの距離がある。『山梨県地質誌』（山梨県ほか1970）によると、釜無川西岸には甲斐駒ケ岳などを構成する花崗岩体があり、そのさらに西方に粘板岩・千枚岩・砂岩を主体とする四万十統が南北に延びている。また、その北端で花崗岩体と接触し、熱変成帯が形成されており、ホルンフェルスが存在する。さらに、その東側に南北に並行して泥岩・砂岩を主体とする御坂層群の桃の木累層が分布する。地質図からみると、遺跡の直近の釜無川河床で、今回把握した各石材の採取ができる可能性が指摘できる。しかし、実際に同一の石材が得られるかどうかは、釜無川河床の現地で慎重に確認する必要がある。

第４図　堆積岩系累層分布図
（山梨県地質図1970より）

３．形態

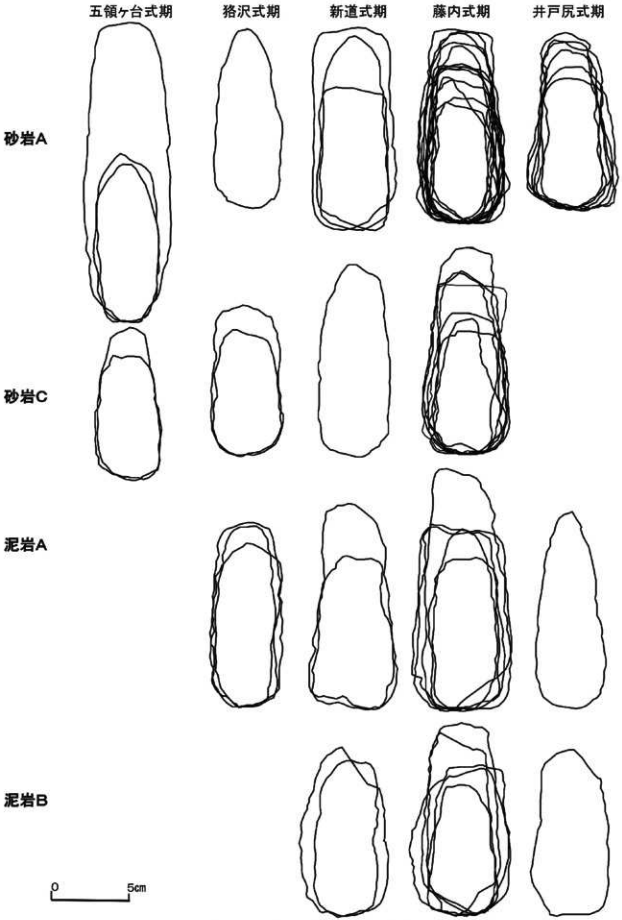
石材ごとに、完形の打製石斧を対象としてその形態を検討した（第５・６図）。完形とは、全周に加工がほどこされたもので、「折れ」は加工には入れなかった。加工は主に平坦剥離によって行われるが、両側縁部では稜上加撃により稜線がつぶれた状態の加工も一般的に見られ、端部では急角度剥離が見られる場合がある。第５・６図は、完形の打製石斧の輪郭を重ねた図であるが、刃部を基点に重ねている。石器形態は、リダクションによって時系列的に変形していることが想定されるが、特に刃部は使用により変形が激しいと思われる。刃部を重ねて表示することで、変形の様相把握が期待される。

石材ごとに比較すると、ひとつの石材に対し時期を越えて維持される特定の形態というものはないことが読み取れる。一方、特に石材組成の時期変化の要因となっていた砂岩Ａとホルンフェルス Ａとで若干の形態差が読み取れる。五領が台・猿沢式期で両者を比較すると、砂岩Ａは円刃、ホルンフェルス Ａは平刃である。しかし、この時期の資料数が少なく判断するに難点がある。むしろ、各石材に共通した時期変化が見られる。最も資料数の多い砂岩Ａでは、五領ヶ台・猿沢式期では円刃であるのが、新道式期から井戸尻式期にかけて平刃が目立つ。また、藤内・井戸尻式期で刃部が開く形態のいわゆる撥形になる傾向が見て取れる。こうした傾向は、概ね各石材で共通するように思われる。つまり、リダクションによる変形を越えた形態変化が認識される。

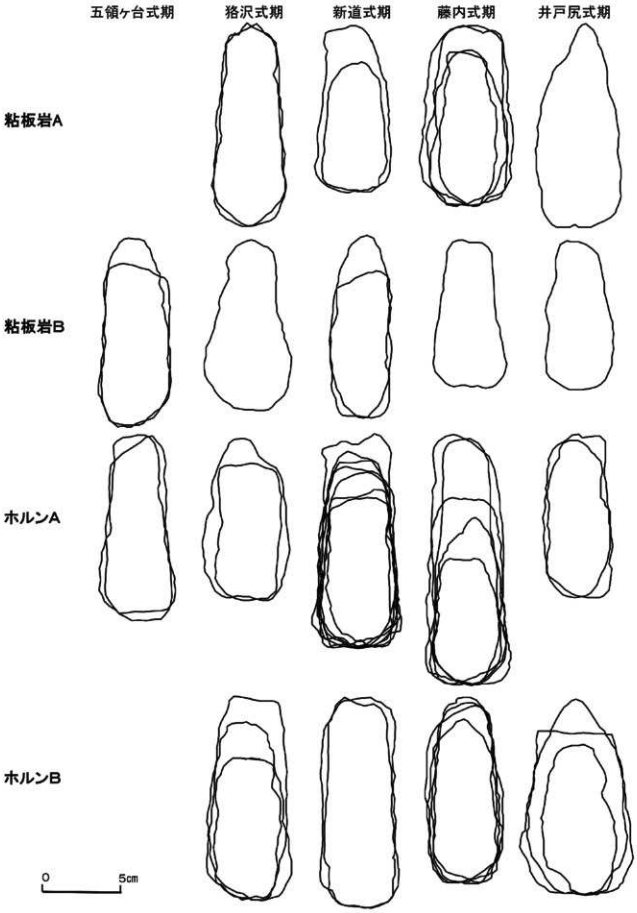
そこで、石材の枠をはずして、時期ごとにみると、短冊形、撥形、および中膨れの楕円形の３種が把握できる（第７図）。短冊形は井戸尻式期以外で主体を占めるが、五領ヶ台・猿沢式期には円刃の短冊形が主体で、新道式期以降に平刃が目立っている。撥形はその構成比率を増す傾向が読み取れる。今回提示した資料の中では、撥形は五領ヶ台式期では1点しかみられないが、全体で11％である。撥形の構成比率は、猿沢式期で19％、新道式期で30％、藤内式期で34％、井戸尻式期で59％と、時期を経るごとに増加している。そして、井戸尻式期では短冊形の数を凌駕している。楕円形は、猿沢式期で現れ、藤内式期で比較的多くなるが、いずれも10％程度の占有率で、いずれの時期も稀少な存在である。この３形態とも、ある特定の石材に偏って見られるという傾向はみられない。

なお、長さに個体差が激しいが、各石材、各形態とも最短が８～９㎝で共通する。つまり、使用中に破損しても、８～９㎝の長さが確保できれば、再加工して継続利用が可能であると考えられる。このことは、そもそも製品として持ち込まれた時点から個体差が大きいとする考え方も取り得るが、第２の理解案として、８㎝程度になるまで継続使用せずに、破損しなくとも途中で放棄したものが多いとみることもできる。

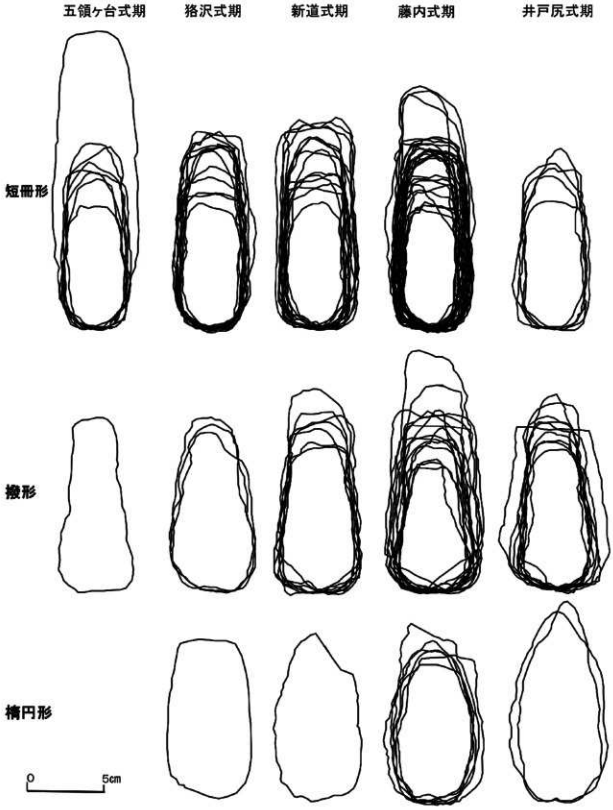
また、完形品以外の個体をみると、８㎝以上の長さで、また幅も十分に確保できる破損品が多く見受けられることが認識できる。個体によってリダクションを繰り返したものから、破損直後に放棄されたものまで、取扱いに個体差がみられるのである。使用放棄の取扱い個体差については、個体ごとにさまざまな個性的な事情によって放棄が決定される場合も考えられるが、第２の説明案として打製石斧の取り替え時期にある規則が設定されており、その時期がくると一斉に取り替えるとみる場合も考えられる。この理解は、完形品の個体差の説明にもなる。さらに、破損した場合の代替品が豊富に備えられている場合と、代替品のストックが底をついた場合とがあったとも考えられる。今後、こうした視点に根拠を持たせる



第５図　石材別打製石斧の形態（１）



第６図　石材別打製石斧の形態（２）



第７図　時期別打製石斧の形態

材料の抽出を心がける必要がある。

4．まとめと考察

酒呑場遺跡Ⅰ区の縄文時代中期の打製石斧の石材と形態について検討してきたが、その要点は以下にまとめられる。

1）石材は、砂岩、泥岩、粘板岩、泥岩ホルンフェルスの４種類が主体を占めるが、それぞれ２～４種類に分類し、合計11種類に細分した。さらに、11種類以外に、この分類群には帰属しない特長をもつものが単体で数

種類把握できた。

2）主体の4種の他に、結晶片岩、礫岩、頁岩、緑色凝灰岩、斑れい岩が単体でみられた。

3）石材組成は、砂岩Aが全体の約1/4を占め、次いでホルンフェルスA・Bが多くを占めるが、若干の時期変化がみられた。その要因となっている3種の石材が抽出できた。砂岩Aは、井戸尻式期に最も多い住居跡があり、時期を追って占有率が高いものが目立つようになる。ホルンフェルスAは、井戸尻式期に比較的占有率が低い。泥岩Aは狢沢式期、新道式期で特に低い。

4）これらの石材は、遺跡の立地する八ヶ岳山麓では得られないが、数キロ離れた西方崖下の釜無川河床において、四万十統や桃の木累層を起源とする堆積岩やその熱変成岩が石材として得られる可能性が指摘できた。

5）石材と石器形態についての有意な関係は見いだせなかった。むしろ、各石材に共通した時期変化が把握できた。五領ヶ台・狢沢式期で円刃、新道～井戸尻式期に平刃が目立ってくる。短冊形、撥形、楕円形の3種が把握でき、井戸尻式期以外で短冊形が主体であった。撥形は時期を経るごとに占有率が増加し、井戸尻式期で短冊形の数を凌駕した。楕円形は狢沢式期以降で見られるが、稀少な存在であった。

6）完形品の長さに個体差が激しく、最短は8～9cmであった。破損品の中には、長さが8cm以上で、幅も十分に確保できるものが多く見受けられ、再加工して利用継続が可能にもかかわらず放棄された個体が相当数存在することが指摘できた。

以下、打製石斧の石材をめぐって、製作と消費について若干の考察を行う。1・2について、すべての石材が同一の採取地で得られる可能性はある。4で示した累層にそれぞれが互層して共存している可能性は否定できない。しかし、3で示した状況から、いくつかの石材がそれぞれ違った産地から得られている可能性も見いだしうる。

打製石斧の製作と、使用・再加工・放棄ないし廃棄（この過程を「消費」と表現する）との関係を想定すると、自家製作し、自家消費する在り方が通常想定されるが、他者が製作したものが贈与された他家製作という場合も想定できる。石材が遺跡の直近でなく、やや距離がある場所で得られる状況から、他家製作の可能性が浮上し、さらに石材のいくつかが産地を異にするとなると、他家製作の可能性がいっそう強くなる。そうした場合、打製石斧の形態にも影響する可能性があるが、石材組成の時期変化の要因となっている砂岩Aとホルンフェルス Aとで中期前葉において円刃と平刃の違いがある可能性は指摘できるものの、5で示したとおり今回の検討からは、その違いは明確に提示できなかった。したがって、自家製作か他家製作かを結論づけることは今回の成果からは限界がある。

しかし、打製石斧の形態は石材の違いを超えて時期変化している可能性が把握できた。これは、酒呑場集落での局所的な状況なのか、大きく地域性をもったものなのかは今後慎重に検討する必要がある。また今後の課題として、今回分類した石材を、直近の釜無川河床で確認する作業を行い、石材産地の特定作業を実施する必要がある。

注

（1）通常の砂岩、粘板岩といった分類をさらに細分し、石材原産地の特定を目標とする。しかし、いくつかの問題点がある。今回の分類は、風化面における特徴による分類であり、岩石を打ちかいた新鮮な面で観察する地質学的な岩質観察とは違うため、地質学の文献との対比や探索には限界があると思われる。さらに、河原や露頭で採取した岩石標本による観察においても、風化表面の特徴を観察することができない可能性もある難点がある点に注意が必要である。

文献

山梨県・山梨県地質図編纂委員会1970『山梨県地質誌』

花咲用水開削の歴史についての考察

篠　原　真　史

1．はじめに
2．史料に見る花咲
（1）初見の史料
（2）村絵図と明細帳
3．村高と用水
（1）村高帳の経年比較から
（2）享保10年の領郷帳から
4．近代の花咲地区と花咲用水
5．まとめ

1．はじめに

国道20号線大月バイパスの建設工事にともない、用地内にある花咲用水関連遺跡の発掘調査が行われた。遺跡の調査・報告を行うためには、包蔵地に含まれない取水口から流末までの全体像を明らかにする必要があり、調査・報告の一助となることが本稿の目的である。

調査に先立って、江戸時代の村絵図の写しや明治時代の地形図などを精査した結果、用水路や水車小屋の存在を読み取ることができた。用水路は地域の農業用水として現在も使用されており、用水の側壁は古くからの石積みの内側をコンクリートで覆うなどの改修工事が施されている状況にある一方、通水を停止し、水路の形状が失われている部分もある。

本稿では、村高帳を中心とした文献資料の調査、用水路の踏査等を通じて、用水路の開削や改修の時期、村の水田に依存する度合いを探り、用水路の存在する意義、新田開発の可能性について明らかにしていきたいと考える。耕地や用水路が消失することは、地域を支えた生産の歴史が消失することでもある。文書類の精査、実地踏査、遺構等の調査などをもとに、地域の環境や暮らし、歴史を明らかにしていくことが望まれるものと考える。

2．史料に見る花咲

(1) 初見の史料－南北朝期に遡る記述－

花咲という地名が初めて登場するのは1351年（観応２年）のことである。足利尊氏が２月、島津氏一族の周防次郎忠親に甲斐国花咲郷が充行された記録が残されている[1]。この時期、「甲斐国史」[2]によると花咲に隣接する下初狩から笛子黒野田までの地域が波加利荘の荘域となっており、1334年（建武元年）７月、女房装束料として高師直が波加利荘本庄の武田信武に46貫487文、新庄の島津師久に７貫500文の運上を命じた記録が残されている[3]。波加利荘については、1213年（建暦３年）の和田合戦においてそれまで領主であった古郡氏が、和田義盛に従い敗死した後を武田信光、島津師久に恩賞として与えられた経過がある[4]。波加利荘は宣陽門院領となっているが、年貢は「未定」となっていることから、秋山敬は「荘園としての実態は失われている」[5]としている。しかし、この荘園は笛子川流域を荘域と考えられていることから、鎌倉時代を通じて在地の名主が笛子川下流に新たな耕地の開発を行ったと推定することができる。本庄が生産力を拡大する中で、南北朝期には花咲郷が本庄より分村して成立したものと考えられる。

江戸時代、花咲を通る甲州街道には、鶴瀬（甲州市）に口留番所が置かれていた。万沢、十島他21カ所の口留番所は大和村誌によると「『甲斐叢書』では、右の23カ所は武田氏が古制を継承して開設したもの」[6]としている。笛子峠を越える街道は、中世以来、国中地方と波加利荘、さらには武蔵や相模を結ぶ道として重要視されていたことを物語っていると考えられる。

戦国期、都留、大月市域は小山田信茂の支配下に入る。小山田信茂は都留の長生寺領として寄進した22貫文の内３貫文を「花崎東光寺分長生寺開山」としている[7]。1573年（元亀４年）のことである。花咲に新たに寺院が建立されたと考えられる。花咲に集落が戦国期にはほぼ確実に存在していたことを傍証するものと考える。なお、下花咲区の東、大月橋北側に美堂、同じく大月橋南側の台地に堂地の小字を確認することができ、寺院の存在を地名から推察することができるものと考えられる。

(2) 近世の村絵図と明細帳－現況を裏付ける史料－

近世に入ると花咲は甲州街道の宿場の村となる。江戸幕府は1604年（慶長９年）主な街道に一里塚の整備を命じている。花咲の宿の東側には23番目の一里塚の跡が残されている。甲州街道（甲州道中）は、参勤交代は信濃の３藩のみの通行であったが、宇治採茶使の通行路であった。また、甲府は柳沢吉保が城主になるまで、徳川家一族が城主となってきたことを考えると、江戸と甲府を結ぶ甲州街道を幕府が重要視したことは当然のことと考えられる。各宿場がどのように整備されたか疑問になるところである。前述の大和村誌では「上布田宿（東京都：論文執筆者補足）の項に、『この街道開かれしは慶長

7年にて」とあるのが初見」[8]としており、1602年（慶長7年）には五街道として整備が始められたことを示すものと考えられる。

こうしたなかで、本稿の課題とする用水施設の存在について以下の史料を「大月市史」史料編から見いだすことができる。

① 花咲村明細帳【1720年（享保5年）】[9]

② 花咲村絵図【1757年（宝暦7年）】[10]

①花咲村明細帳と現況

村明細帳は表紙に続いての村高、取米の記述は「前略」として省略されているが、「田水用水」、「田水」について以下の記述が残されている。

A「田水用水」

写真１　前沢の取水口

「真木村分之内前沢[11]と申所より水引来り」とあり、現在の前沢地区の善福寺の笹子川の上流側に取水堰がある。コンクリートで改修され現在も使用されている。（写真１）この用水は花咲宿の対岸を流れているが、中央自動車道の大月ジャンクションやインターチェンジにより流域は大幅に地形が変更されている。なお、用水の幅は50㎝程度で、後述する花咲用水の半分に満たない幅となっている。

B「田水」

「是は下初狩境より水入申候」とあり、現在中央線笹子川第3橋梁の下流に用水路の取水口があることから、この用水路が本稿に言う花咲用水のことと考える。なお、大月市の土地基本図には「花咲水路」と記されている。取水口の下流から中央自動車道富士吉田線を横断するまでの区間は真木区の範囲であるため、用水は上下花咲区、真木区が管理している。なお、明細帳には「田水上ケ樋弐ケ所」との記述もある。

現況は以下の通りである。

ア　下初狩の取水口より甲州街道（廃道）、中央線に沿って真木区の南側へ流れている。大月警察署の前では現在の国道より10ｍほど高い山腹を切り開いている。

イ　上花咲区の西側、中央自動車道を横断してすぐの場所で流路は東に直進する流れ（写真２）と、北（街道）に向かって下る流路に分岐する。この部分は高速道路の工事にともない、流路の変更が行われた可能性がある。

写真２　中央自動車道横断直後の用水路

ウ　直進する流路は上花咲区西の写真２の場所を過ぎると、耕地より３ｍ以上高い山腹に堤を築いて流れている。（写真３）水路の幅は１ｍを越える。また、写真２の地点から用水路の上流には沢水を利用した耕地が点在するが、下流には存在しない。

写真３　山腹を切り開き耕地より高い場所を通る用水路

下流側の形状について、長野の小穴喜一は近世の水路の特徴として「水田面より高所を通過し、両側に高い堰土手を築造する特色をもつ。（中略）谷壁を這って蜿蜒と屈曲し」[12]と述べており、堰の形態から、近世の工事の特色の一端をうかがうことができる。

エ　写真２の場所では沢の合流点上流側に分水口が開かれている。花咲用水の整備に先行した沢水を使用した田畑があり、沢水を用水で補完する設計をうかがうことができる。写真２の場所とキの余水を落とす沢の他、２カ所の沢を上樋、底樋（写真４）で横断する。

写真４　沢を底樋で横断する水路

オ　直進する流路は、1962年より始まった富士見台地区の住宅開発のために、大月インターチェンジ付近で通水を停止している。水路側壁の３面をコンクリートで補強する工事はここで終了している。

カ　流路の築堤は大月市民病院南側で給食会社敷地に取り込まれ途絶されている。下花咲区中心部と比べ、下流の水路の幅は２／３程度に縮められている。

キ　イより直進した流路の余水は大月インターチェンジ東側で笹子川に落とされている。

写真５　中央線に沿って流れる用水

ク　上花咲で北に下る流路は、宿場と直進する流路の中間にある中央線の線路用地まで下り、その後中央線に沿って東に向かって流れていく。（写真５）この部分は中央線開通時に地形の改変（切り取り）が行われたとも考えられる。

ケ　上花咲で分かれた流路は各所で直角に近い角度で分岐しながら花咲用水関連遺跡等を通り、国道20号線大月橋の下付近で複数箇所に落水している。下花咲の宿場では国道の側溝となっている。開削の時期を特定するには難があるが、山腹の高所を流れるウの形状とは異なることに注目したい。こうした用水の分岐の形態を小穴は「中世に遡る樹枝状型水路」[13]としている。

②　花咲村絵図から確認できること

花咲村絵図から以下の点を読み取ることができた。

・絵図は約60の「田場」「畑場」の表記を読み取ることができた。このうちの３／４は「田場」であった。
・「田場」の多くは花咲用水流域に広がっている。
・前述した現況、①のイ、キの場所と絵図がほぼ対応していた。
・周囲の山は「柴山」が大半で、山野を人びとが利用した様子をうかがうことができた。なお、1889年の地形図においても草地や茅原と表記されている。
・笹子川対岸の山麓、谷あいには「山畑」の表記が見られた。後述する年貢の内訳の山畑大豆の根拠となるものと考えられる。

なお、江戸時代の街道の姿を正確に描写したものとして「甲州道中分間絵図」[14]がある。

江戸時代の後半、寛政年間（1789年～1801年）に幕府は五街道の絵図を編集し、1806年（文化３年）に完成させた。これによると、前述した現況の①のキにあたる流路が明示されていたり、取水口が街道に沿った場所にあったりすることなど、現況に近いかたちで描かれている。街道から若干外れた場所にある水車小屋についての記載は確認することはできなかった。

３．村高と用水

文献の記述や用水路の形状から、近世以前に花咲村が開かれたと考えられること、近世の村高帳に用水路の記述があり、村絵図でその位置が現況とほぼ一致することが確認できた。また、上花咲区から富士見台地区に至る水路には、近世の工事の特徴と考えられる点を見いだすことができた。次に用水の開削効果について、村高の変化をもとに他村との比較を通して明らかにしていきたい。

(1) 村高帳の経年比較から－江戸時代260年の比較－

近世に入ると、検地は村民からの申告である差出しではなく、領主が役人を村に派遣して土地を実測するようになる。その結果をまとめたものが村高帳である。甲斐

国に関わって以下の村高帳が存在する。なお、甲斐国は柳沢氏や秋元氏が異封された後、多くは天領となる。天領では郷帳としてそれが毎年作成され、代官所が作成し勘定奉行に提出されてきた。

①文禄検地・慶長７年検地と「慶長の古高帳」
－近世初頭の指標として－

徳川家康が関東に転封した後、甲斐は羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長、徳川義長と領主が交代する。このなかで浅野長政・幸長は1594年（文禄３年）に検地を始めている。文禄検地の記録は、江戸時代が始まる前の村々の姿を明らかにする基礎資料となる。「山梨県史」によると[15]、確認されている検地帳から都留郡の検地の特徴として以下の３点を指摘している。

・太閤検地の原則に従って、字・品等・面積・田畑と屋敷の別・名請人のほかに一筆ごとに石盛が記されているとともに、田方、畑方の品等を設けていること。

・桑以外に、漆、麻などの商品作物の把握に努めていること。

・検地帳に見られる耕地の把握が、畝で終わっており、端数の歩の単位までの記帳が著しく少ないこと。

３点目について、検地役人が２名ずつ入村しているにもかかわらず、面積の把握のために記録される縦横の間数の記載がない[16]ことから、「県史」では「指出検地とは思われない」[17]としながらも、浅野氏の検地は「村方とある程度妥協してでも、迅速な検地の実施を優先した」[18]と推察している。

1600年（慶長５年）関ヶ原の合戦が終った後、国中三郡では慶長の検地が実施されている。この記録に郡内領の浅野検地の石高をそのまま継承したものが「慶長古高帳」[19]である。そして、「慶長古高帳」の数値は1624年、「寛永元年甲斐国山梨三摩八代都留四郡村高帳」へと継承されている。なお、「山梨県史」では文禄検地の結果である「都留郡村高帳」を収録しているが、他の３郡との比較を行うにあたり、甲斐一円の結果を記載している「慶長古高帳」により論を進めることとする。都留郡については、上述のように端数の面で正確さに欠ける面も指摘されてはいるが、当時の各村の実相をほぼ表しているものと考えられる。なお、「慶長古高帳」では都留郡の村高合計を20,000石（文禄３年の村高帳では18,294石２斗３升[20]）としている。

②江戸時代各期の村高帳
―甲斐全体を比較できる資料―

「甲州文庫史料」には「慶長古高帳」の他以下の史料が収録されている[21]。

a．享保10年「都留郡郡内領郷帳」

都留郡は1704年（宝永元年）に秋本氏私領から天領になった。その約20年後の1725年に作成されたものであるが、各郡の記録については1669年（寛文９年）のものと「ほとんど同一であり、おびただしい小物成の種類も、絹を中心とする諸運上も形は変わっていない」[22]ものとなっている。

b．宝暦６年版（1756年）「甲斐国山梨八代巨摩三郡村高帳」

国中地方３郡の古高を改訂したものであり、改出高、検地出高、新田高等を記載し、1748年（寛延元年）に改められた郡中割懸り高などの賦課を村ごとに仕分けたものである。「甲府その他の書肆で販売されたもの」[23]と考えられている。３郡合計の石高は285,259石８斗４升２合４勺９才となっている。

c．嘉永６年（1853年）版「甲斐国山梨八代巨摩都留四郡村高帳」

宝暦６年版を改訂したものに都留郡の石高を加えたもの。国中３郡については宝暦６年版に準じているが、都留郡については各村の村高のみを記載している。甲斐全体で307,127石７斗７升９勺９才、３郡合計で285,567石３斗８升７合４勺９才、都留郡合計で21,560石３斗８升３合５勺と記載されている。

以上の史料から、甲斐国の全村の石高が記されている「慶長古高帳」と嘉永６年版「甲斐国山梨八代巨摩都留四郡村高帳」を基本に村高の比較検討を行いたい。

なお、1669年（寛文９年）に行われた秋元氏の検地の結果である村明細帳が花咲村を含め多くの村に残されており、「大月市史」でも年宴率などの史料の引用元となっている。また、下花咲宿本陣である星野家にも文書[24]が残されている。文書管理の関係で資料についての精査はできない状況にある。

③甲斐国の経年比較－250年で約30%の村高増加－

江戸時代の村高の変化について、はじめに甲斐国全体での変化をたどりたい。

表１　甲斐国の村高の比較

		1602年 単位：石	国中1:1669年 都留郡:1725年	1853年 単位：石	増加率	備考
1	甲斐国全体	241141	－	307127.8	27%	
2	都留郡合計	20000	20817.9	21560.4	8%	文禄3年検地郡村高帳では18294.23石
3	国中三郡合計	221141	285259.8	285567.4	29%	

数値の単位は石、小数点以下は斗升合の記述を読み替える。以下同様。
増加率は〔(1853年／1602年)－1〕を百分率で表示　以下表7まで同様に表示。

表１は甲斐国全体を慶長の古高帳と嘉永６年の村高帳で比較したものである。一般に江戸時代を通じて耕地面積が２倍に増加したといわれているが[25]、年貢の収量のもととなる村高は江戸時代を通じて甲斐国全体で約３割の増加である。国中三郡の増加率もほぼ同様である。1853年（嘉永６年）の村高は1669年（寛文９年）の都留郡の村高、宝暦６年（1756年）国中三郡の村高に準じた数値となっているので、表に示す増加率は、江戸時代の前期の増加率と理解することができる。

都留郡のみで見ると、前述のように都留郡は文禄検地の段階で各村にさまざまな品を石高換算したり組を中心とする諸運上が賦課されたりした。このことは享保10年「都留郡郡内領郷帳」でも同様に確認することができる。

④大月市内各村の経年比較
ー大幅な村高増加が見られない地域

次に表２で大月市内の各村の比較を行いたい。経年の比較に際して、村域が変動した朝日村に関わる部分、江戸時代中葉の五ケ堰の開削に関わる村として都留市域の旧村も一部記載した。

表から以下の点を指摘することができる。

- 都留郡内にあって、花咲村は村高が高い傾向にある。
- 甲斐国を平均した増加率27％を超える村は五ケ堰流域に限られている。なお五ケ堰は秋元氏の時代、1639年（寛永16年）ころの竣工とされ、1720年（享保５年）に用水組合村が成立している[20]。
- 笹子川や葛野川上流域、旧梁川村に属する地域には江戸時代を通じて村高に大きな変化の見られない村が存在している。
- 郡内地域有数の稲作地帯[21]とされる中初狩、下初狩（表３から は該当しない）、花咲の各村は、他の地域と比べ、村高の増加率が高い傾向にある。ただし甲斐一円の平均値よりは低い。
- 隣接する真木村は花咲村と近似した村高であるが、村高の増加率は低い。表３で示すように真木村は畑作の多い地域である。

表２　大月市内（田之倉、旧朝日村分を含む）の各村

	真永年間の村名	1602年	1853年	増加率	備考
1	白野村		103.2		田畑で村 寛文9年(1669年)に重野田村が分村、都留笹子郷では高弥村
2	宮久保村		84.9		
3	黒野田村	296.3	120.8	4%	
4	中初野村		330.9		
5	猿沢村		86.7		
6	下初野村	609.6	336.1	24%	
7	真木村	354.9	377.6	6%	隣接真木村 寛文9年に朝日村内の大月村が分村、花咲村は真木と連村。
8	花咲村	300.5	361.1	20%	
9	大月村		228.7		
10	猿橋村	423.7	328.2	31%	
11	浅利村	79.9	67.0	15%	旧梁川村、猿橋、初狩、笹子の3村は寛文9年に分村。慶長の古高帳では猿橋にたい せい結金（はたらく）で記載。
12	梁川村	589.5	200.5		
13	犬目村		69.5		
14	宮倉村		304.4	-3%	
15	黒山村	55.9	57.4	3%	
16	田之倉村	265.6	368.7	39%	朝日村分。五ケ堰の本村を利用していた地域。
17	猿橋村	85.7	246.1	157%	寛文期村、後に宮倉村、小倉は隣接の古高帳では神奈川郡。
18	殿上村	115.5	131.1	13%	
19	藤崎村	395.8	356.4	-10%	
20	小倉村	136.5	136.8	0%	
21	小沢村	85.9	90.7	6%	朝日村は慶長古高帳、慶長元和の村高組合地名。寛文9年以降は新田村が分村 下22～26の村名に、明治年は22～28の自村と新田村が一緒にされた。明治年分を含む。朝日小沢村は相次村。
22	新田小沢村		33.5		
23	新田馬場村		72.7		
24	新田雪舟村		100.3		
25	戸沢村		87.9		
26	五日村		100.9		
27	仲倉村		187.9		
28	七軒村		47.3	18%	
29	高野村	277.5	239.6		旧七軒村、寛文9年に高野村より朝日村が分村。慶長古高帳では小沢、ほりし、なしこ小倉記。
30	成田村		68.8	11%	
31	桂川村	33.6	35.5	7%	
32	鳥沢村	107.2	110.2	3%	
33	桂村	25.2	27.9	11%	
34	新倉村	62.2	64.1	2%	
35	下和田村	210.6	175.8	-17%	
36	吉良村	250.6	251.0	0%	旧寛永村、和田村は寛永の現地のこうば下 熊倉と書記。明の上、倉倉の各村の名前は慶長古高帳では大字。寛永の現地帳で明治
37	猿橋村	432.9	458.1		
38	松木村		39.4	15%	
39	横ノ上村	198.3	200.4	1%	旧梁川村、明治村は寛永の現地のこうば下熊倉と書記。明の上、倉倉の各村の名前は慶長古高帳では大字。寛永の現地帳で明治
40	横野村	137.2	137.7	0%	
41	新倉村	43.8	42.9	-2%	
42	塩瀬村	99.4	105.5	7%	
	合計	6245.0	7014.6	12%	

表中の調査付は東京都立の記録、○数字は五ケ堰流域の村を表す。

表３　寛文９年の田高増高

	村	寛文3年の村高	寛文9年の田高(石)	田高の割合
1	白野村	103.1	17.8	17%
2	吉久保村	84.3	27.5	33%
3	黒野田村	112.7	0.0	0%
4	中初野村	340.8	245.4	72%
5	下初野村	336.0	28.3	8%
6	真木村	378.5	133.8	35%
7	花咲村	361.1	271.7	75%
⑧	大月村	226.6	152.1	67%
⑨	駒橋村	328.1	247.9	76%
10	浅利村	67.6	34.4	39%
11	強瀬村	200.2	16.7	8%
12	岩殿村	69.3	9.3	13%
13	畑倉村	304.3	76.1	25%
14	黒山村	57.3	0.0	0%
⑮	猿橋村	146.0	77.4	53%
⑯	殿上村	131.4	84.9	65%
17	藤崎村	356.3	25.1	7%
18	小倉村	136.7	0.0	0%
19	小沢村	90.6	23.4	26%
20	朝日小沢村	32.9	4.9	15%
21	宮野村	239.5	76.1	32%
22	浅川村	68.7	0.0	0%
23	奈良子村	35.8	0.0	0%
24	瀬戸村	110.1	0.0	0%
25	林村	27.9	0.0	0%
26	駒宮村	84.1	0.0	0%
27	下和田村	175.8	24.9	14%
28	宮谷村	250.9	14.6	6%
29	鳥沢村	458.1	46.0	10%
30	横ノ上村	137.6	4.6	3%
31	建野村	137.7	5.3	4%
32	新倉村	42.8	2.5	6%
33	塩瀬村	105.4	9.1	9%

大月市史史料編　p.955より作成
○数字は五ケ堰に関係する村を表す

表４　旧明野村…朝穂堰開削の効果【寛永16年(1639年)】

	真永年間の村名	1602年	1853年	増加率	備考
1	法光村	83.89	283.958	202%	慶長古高帳に記載、明治年は法光村のみの記載
2	塩尻新田村		377.8	553%	法光村と塩尻新田村が分村は明治年分。法光村と塩尻新田村は一緒にされた。明治年分
3	上神取村	361.2	402.15		明治年分
4	下神取村	355.95	1101	使用古高記と平組24石を加算	
5	上条村	718.485	1632.667	128%	使用古高記と平社組355石を加算
6	小笠原村	440.234	708.59	61%	使用古高記と平社組234石を加算
7	三ノ蔵村	394.39	518.8	31%	使用古高記と平社組32石を加算
8	信野	1998.73	4249.7031	113%	

表５　旧白根町…徳島堰開削の効果【寛永７年(1667年)】

	真永年間の村名	1602年	1853年	増加率	備考
1	花咲村	299	626.04	109%	明治年分 慶長古高帳では大字の村名表示の可能性が明確
2	島村村	476.582	1849.937	246%	慶長古高帳と明治年分
3	四ケ谷村	300.33	733.378	144%	慶長古高帳と明治年分
4	門村村	72.14	333.971	363%	慶長古高帳と明治年分
5	上八田村	236.34	461.14	95%	慶長古高帳と明治年分
6	西野村	294.802	734.691	149%	慶長古高帳と明治年分
7	上今井郷村	243.84	475.838	95%	明治年分 慶長古高帳と明治年分
8	下今井郷村	228.187	489.747	115%	明治年分 慶長古高帳と明治年分
9	横山村	70.87	155.738	120%	明治年分 慶長古高帳と明治年分
10	牛野村	191.74	661.045	245%	慶長古高帳と明治年分
11	野場村	9.18	33.321	263%	
12	大蔵村	44.72	61.673	38%	
13	武沢村	13.62	16.458	21%	慶長古高帳と明治年分 慶長古高帳と明治年分
14	後新村	20.183	57.597	185%	慶長古高帳と明治年分
	合計	2501.104	6490.271	159%	

表６　旧双葉町…無無堰開削の効果【寛永6年（1666年）】

慶長年間の村名	1602年	1853年	増加率	備考
1 浪江沢村	37.76	120.81	220%	
2 新田・新田村	44.06	154.275	250%	
3 大堀村	80	288.048	224%	
4 岩倉村	86.38	378.569	285%	
5 中津川原村	698.5	1049.852	50%	
6 下今泉村	396.66	576.638	45%	
7 赤坂村	504.98	397.572	-21%	新開堰による新田開発により、下流部では水田が減少し、上流部では増加
8 夏井村	453.12	852.25	88%	
合計	2323.00	3818.312	64%	

用水路の開削が村に与えた影響を確認するために、県内の３大堰とされる朝穂堰、徳島堰、盾無堰の流域での変化を表４～６で示したい。

1639年（寛永16年）に開削された朝穂堰では上流の浅尾村の村高の増加率は表４の通りで、本村だけでも２倍量の村高が加わったことになり、用水によって新田開発が進められた分を加えると絶大な効果があったことを表から読み取ることができる。表５、６の徳島堰、盾無堰においても同様な傾向を確認することができる。用水が村を支えることを改めて確認したい。また、基本的に用水は取水口に近い地域ほど開削効果が大きいことも表から確認することができる。

⑥甲州街道の宿場での比較－低い関連性－

花咲村は甲州街道の宿駅であった。宿場となった村の村高の変化を表７で確認をしておきたい。表からは猿橋宿の数値が突出していることが読み取れる。前述のように、猿橋村は五ケ原の用水組合村の一つで、用水の開発効果の大きい宿場である。これに対して、台地上の野田尻・犬目、笹子峠の直前の白野、阿弥陀街道、黒野田の各宿や日川渓谷の狭い平坦地に位置する鶴瀬については増加率が低い傾向にある。

甲斐国は養蚕収入の高い地域であった。「山梨県史」には、柳沢吉里の代、1708年（宝永５年）から1719年（享保４年）にかけて、山梨郡栗原筋と八代郡大石和筋・小石和筋の検地を行い、「桑歩１反につき米１斗５升ずつを上納することとなった。」[29] と記されている。勝沼、栗原の村高の増加にはこうした要因が加味されるものと考

表７　甲州街道の宿場の村高

宿駅名	1602年	1853年	増加率	備考
1 上野原	515.83	986.82	91%	
2 鶴川	474.56	541.799	14%	鶴瀬村の開墾は1680年、小原、下鶴瀬、中鶴、鶴川、野田、犬目、笹子峠の順に開墾
3 野田尻	139.11	145.208	4%	野田尻は鶴瀬と犬目の山間部を開墾した村。犬目と笹子峠の開墾は1700年
4 犬目	77.22	81.212	5%	
5 下鳥沢	422.86	497.514	19%	笹子の峠越のころばの西村。後に飯田村と峠巻村に分村。幕末の数値は両村の合計
6 上鳥沢				
7 猿橋	95.65	248.119	157%	既文9年の検地で分村
8 鶴瀬	423.72	328.175	31%	
9 大月		228.552		上下2村であるが年貢は天保期以降に下和入
10 下花咲	300.51	361.118	20%	
11 上花咲				
12 小俣	609.64	422.87	24%	既文3年に小俣村、寛文8年に花咲新村が分村。下花咲は1700年に分村。幕末の数値は両村の合計
13 中初狩		330.927		
14 白野	299.27	103.212	4%	笹子峠の西。寛文8年に1669年に開墾村が分村。釣鉤地区は幕末に分村
15 阿弥陀街道		84.939		
16 黒野田		120.798		
17 勝沼	112.77	135.149	20%	白野村
18 鳥居	317.97	318.075	0%	勝沼村は、栗原の村高に今堀は2石加算
19 勝沼	708.464	1198.274	69%	栗原の村高に牧場は454石を加算
20 石原	363.39	626.041	72%	1700年に開墾村は鶴瀬と小原の間に分村。小原は天保期
21 石和	600.37	606.381	1%	1700年に開墾。鶴瀬の開墾と小原開墾は1711年に分村
22 甲府	－			
23 善光寺	577.07	1405.211	144%	天保期村。既永の村高は1752石377石
24 台ケ原	261.98	422.683	61%	
25 教来石	214.43	355.832	71%	下教来石村
合計	6523.614	9559.126	47%	

える。また、享保10年の村高帳には河原部、下教来石、台ケ原の各村に「新田高役引」、「前々改出併新田高役引」の石高が記されており、新田の開発が行われたことを物語っている。甲州街道が成立した後、絹織物業の発展や富士講信者の増加などにより各宿場は賑わいを見せたが、そのことと村高の増加には明確な関連性を見いだすことはできなかった。

⑦村高の経年比較についての小括
－17世紀初頭の用水路改修の可能性を含む花咲村－

以上のようなかたちで甲斐国と都留郡、大月市内、用水路の開削、甲州街道の宿駅の角度で村高の変遷を確認した。その結果、江戸時代の村高の変遷について以下の点を確認することができた。

- 江戸時代の初期と中期を比較して、記録に残る用水路の開発が行われた場合、村高は倍増もしくはそれ以上の増加を示す傾向にあり、用水路の規模が村高に大きな影響を与えていること。
- 山間部の村、畑作の多い村は、村高の増加率は低く、場合によっては200年以上の期間で変化がごくわずかである場合もあること。
- 甲州街道の宿場であることや織物業の発展が必ずしも村高の増加要因としていないこと。

これを花咲村の村高にあてはめると以下の点を確認することができる。

- 中世には開かれていた花咲村は、江戸時代初頭には300石の村高を有していた。
- 江戸時代の前期に改めて検地が行われた1669年（寛文９年）までに、村高を２割、60石増加させていた。
- 一畝に１反の水田に対して１石強の収穫が見込まれることを考えると、60石分の耕地として少なくとも数ヘクタールの面積の土地が新たに開かれたと考えられる。

以上のことから花咲村においては、近世までに300石の村高を支えることのできる比較的条件のよい用水施設が存在していたこと、1660年ころまでに村高を大きく増加させる要因となる水路の大規模な改良工事が行われたことの２点を指摘することができる。なお、前述の星野家には、江戸時代後半、1804年（享和４年）、1819年（文政２年）に真木村と共同して用水路の修理を行った記録が存在している[30]。

(2) 享保10年の領郷帳から
－秋元氏から幕府に継承された数値－

都留郡の検地では、1725年（享保10年）の領郷帳のように、各村にさまざまな産品を小物成として賦課していた。村高は米の生産量ではないものである。このため、年貢の内訳を通じて花咲村の村高における米に依存する度合いを探り、用水の重要性について考察していきたい。

①文様３年の村高帳に見る都留郡
－金納を前提とした項目－

表８　文様３年の都留郡村高帳の総計

	惣高		18294.23	石
都内領外均	1	桑山年貢　米	89.187	石
	2	山畑年貢　米	279.443	石
	3	山畑年貢　米	3.788	石(蕎麦代ニ両定納)
	4	野畑年貢　米	18.5983	石
	5	縣山年貢　米	8.2	石
	6	馬草山年貢　米	1.65	石
	7	漆桶代　米	29.1935	石
	8	新田くり米　米	7	石
	9	切出シ分　米	20.6532	石
	10	絹	188	反
	11	麻布	60	反
	12	麻	1090	把
	13	大豆	3231.12	俵(小数点以下は斗升)
	14	漆	1288	盃
	15	厚織	50	状
	16	山役	3.25	両(分を両に換算)
	17	油荏	57	俵

はじめに表８で1594年（文様３年）の都留郡の村高帳の記述を示す。石高換算が行われてはいるものの、米以外の作物や品物が賦課の対象となっている。

新田くり米、切出シ分の記載からは、この村高が差し出しではなく、何らかのかたちでの見取りが行われたことが推察される。また表８の11の麻布60反は1725年（享保10年）の領郷帳に同じ数値で継承されている。16の山役は享保の領郷帳では８貫250文と減額しているが、後述するように享保の領郷帳での賦課量（額）は多畝にわたるため、他の品目への組替えが行われたものと考えられる。すでに年貢の金納が行われていることについても確認をしておきたい。

②享保10年の郡中高－さまざまな賦課と花咲村－

表９で1725年（享保10年）の郡中高、表10で同じく各種の賦課（表８の郡内領外均に相当）をまとめた。前の時代より項目が多様となっている。そして多くの項目に賦課した品目の量に対して金額が記されており、これらの品物が金納されていたことをうかがうことができる。

街道の整備が進み、宿役が課されている点は文様の村高帳には見られないものである。花咲（花崎）村が納付すべきものについては表10の番号の左側に○印を付した。花咲（花崎）村については表11の品目が賦課されている。都全体では多様な品物の賦課があるにもかかわらず、他の村と比べて表10の16以下の山川原野からの賦課品目は比較的少ない傾向にある。ただし、「山畑」「柴山」からの賦課もあり、その対象とされる場所も前述のように絵図に示されていた。大規模な用水の改修は終えていたとしても、村高360石に対して「田方切出シ」「畑方切出シ」合わせて0.691石を加徴しているように、小刻みに新しく田畑が切り開かれたことも領郷帳から確認することができる。

表９　享保10年領郷帳で基本とする高について

	種別	内	石高	金額	
1	郡中高	●	20817.02	石	
2	已改出入		67.048	石	
3	取米	●	11869.31	石	
4		辰上	207.317	石	
5		辰上	11813.84	石	
6				25貫	466文
				年貢率	57.01%

表10　享保10年各種の賦課

	種別	内	納め高	金額	
7	見取	田方	0.72	石	
8		畑方	4.038	石	
9	切出シ	田方	9.798	石	
10		畑方	6.2216	石	
11	米		121.382	石	山畑新山、切畑山手、柴山年貢の内訳として11～14が記載合計の重複は124町歩2反6畝
12	大豆		362.63	石	
13	稗		29.231	石	
14	蕎麦		0.69	石	
15	山役		12.491	石	
16	野畑年貢定納	蕎麦	9.432	石	1両
17	たち布		32	反	500文
18	麻		13245	束	58貫 864文
19	入松		139	束	1貫 590文
20	炭木		1024.1	束	7貫 315文
21	柳		1272.41	束	4貫 891文
22	荷草		2274.45	束	7貫 581.5文
23	葉		1323	束	8貫 441.5文
24	葉茶		339	束	212文
25	？		1387	束	6貫 935文
26	板		48	束	179文
27	棒		927	本	1貫 545文
28	渋柿		22.232	石	1貫 712文
29	鉱冶炭		207	俵	1貫 687.2文
30	夫				262貫 486文
31	定納山役				8貫 250文
32	定納材木代				6両1分
33	漆桶結縄				12両2分 471文
34	大桶細縄		482	房	
35	笹板代込み				
36	荷木代				2分
37	漆桶代（大豆）		51.5047	石	
38	漆桶代下紙		2345	枚	8両1分 215文
39	横織畳糸運上	内　村々直納			25両2分 189文
40		請負人			210両 18.5文
41	茶運上				163両
42	橋続札運上				27両2分 127文
43	足駄運上				4両1分 2.5文
44	船運上				8両3分 52文
45	馬借運上				1両2分 187.5文
46	鉱冶運上				3両1分 62文

○印は花咲村に記された項目

表11　花咲村の村高

	種別	品目	量	
1	高		361.138	石
2	取米		207.585	石
3	田方見取		0.11	石
4	田方切出し	米	0.594	石
5	畑方切出し	米	0.097	石
6	柴山	米	1.512	石
7	山畑	大豆	1.324	石
8	炭木		22.5	束
9	渋柿		0.36	石
10	夫金		1貫601	文
11	宿役	米	0.217	石
	免	領郷帳記載の数値	0.5848	
	年貢率	取米／高で計算	0.574808	

石以下の小数は斗、升、合を表す

免は0.5748、取り米を村高で割った計算値（年貢率）も同様な数値となる。都留郡全体の年貢率は表９のように57.01%となっているので、郡の平均値と近似した値と考えられる。

領郷帳で各村の数値を比較してみると、山間部の村に偏りが見られた。表12で村高と宿役米・夫金との関係を提示するが、花咲村を含む多くの村で村高に対する宿役米の割合が0.06%となっている。相関係数は0.92であるので、幕府が正確な年貢の賦課に努めた結果と考えられる。

同様に村高と夫金との関係についても相関係数を算出し、0.89という数値を得た。夫金を村高で割ると多くの村で１石につき約10文という数値を得られる。中初狩、下初狩、花咲、猿橋、鳥沢の各村の夫金は、村高１石あたり10文を大きく下回る。これらの村高は大きいとともに、甲州街道の宿場である。黒野田や犬目などの山間部の宿場の夫金は他の村と変わらない。これらの各村は村高が高く田の割合が高い傾向を表２から読み取ることができる。

表12　村高と合宿役・夫金

	村	村高（石）	合宿役（石）	夫金（貫）	村高1石あたりの合宿役の割合	村高1石に対する夫金の額（文）
1	白野村	103.222	0.062	1.032	0.060	10.0
2	宮久保村	84.366	0.051	0.848	0.060	10.1
3	黒野田村	120.788	0.072	1.280	0.060	10.6
4	中初狩村	330.9377	0.199	1.280	0.060	3.9
5	下初狩村	336.14	0.202	1.363	0.060	4.1
6	真木村	377.569	0.227	3.776	0.060	10.0
7	花咲村	361.138	0.217	1.601	0.060	4.4
⑧	犬目村	226.252	0.136	2.227	0.060	9.8
⑨	駒橋村	328.178	欠落	3.282	0.000	10.0
10	浅利村	86.73	0.052	0.867	0.060	10.0
11	猿橋村	200.535	0.102	2.005	0.051	10.0
12	岩殿村	69.463	0.042	0.675	0.060	9.7
13	恒倉村	304.984	0.383	3.404	0.126	11.2
14	奥山村	57.363	0.034	0.574	0.059	10.0
⑮	田之倉村	368.75	0.221	3.687	0.060	10.0
⑯	猿橋村	246.118	0.117	1.601	0.048	6.5
⑰	殿上村	131.505	0.079	1.298	0.060	9.9
18	藤崎村	356.789	0.214	3.306	0.060	9.3
19	小篠村	136.789	0.082	1.368	0.060	10.0
20	小沢村	90.686	0.054	0.901	0.060	9.9
21	朝日小沢村	33.082	0.02	0.335	0.060	10.1
22	朝日馬場村	72.692	0.044	0.728	0.061	10.0
23	朝日曽雌村	100.285	0.06	1.003	0.060	10.0
24	戸沢村	87.896	0.053	0.807	0.060	9.2
25	玉川村	100.904	0.011	1.009	0.011	10.0
26	井倉村	167.856	0.101	1.679	0.060	10.0
27	与瀬村	47.38	0.028	0.473	0.059	10.0
28	黒野村	239.58	0.144	2.096	0.060	8.7
29	浅川村	69.753	0.041	0.683	0.059	9.8
30	奈良子村	35.89	0.022	0.359	0.061	10.0
31	瀬戸村	110.16	0.066	1.102	0.060	10.0
32	林村	27.936	0.017	0.279	0.061	10.0
33	駒宮村	84.123	0.05	0.843	0.059	10.0
34	下和田村	175.844	0.16	1.756	0.091	10.0
35	宮谷村	251	0.151	2.510	0.060	10.0
36	鳥沢村	458.16	0.275	2.581	0.060	5.6
37	網ノ上村	173.7382	0.026	2.004	0.015	11.5
38	諸野村	126.617	0.072	1.371	0.057	10.8
39	新倉村	42.92	0.026	0.429	0.061	10.0
40	塩瀬村	105.56	0.063	1.055	0.060	10.0
41	犬目	81.212	0.049	0.812	0.060	10.0
42	野田既	145.208	0.087	1.152	0.060	7.9
43	鶴川	153.858	0.092	1.535	0.060	10.0
44	上野原	638.25	0.383	6.383	0.060	10.0
村高と合宿役の相関係数		0.924389				
村高と夫金の相関係数				0.894452		

○印は五ケ瀬流域の村
小数点以下の数値は斗、升、合を意味する。
夫金の額の算出は貫、1貫＝1000文の公定の両替率を使用。村高1石についての計算（夫金÷村高×1000）結果は1文単位。

④享保10年の領郷帳からの小括
－田の多い傾向が裏付けられた花咲村－

以上の点を踏まえ、領郷帳から花咲村の姿を次のように理解することができる。

- 都留郡内にあっては規模が大きく田の割合が高い実態を、領主である秋元氏や幕府は的確に認識し、それに見合う賦課を行ったと考えられる。また、「見取」などのかたちで必要に応じて補正も行われていた。
- 「山畑」「柴山」「切出し」などの名前の土地を人々は可能な限り耕作地を広げる努力をしたと考えられる。
- 幕府は年貢の賦課を確定させるにあたり、他の村と比較をしたり、一律な基準を設けたりして公平性に努める努力をするとともに、過去の村高を参考にして村に対して配慮を示した形跡をうかがうことができる。

4. 近代・現代の上下花咲区と花咲用水
－畑から桑畑・住宅地へ変化した富士見台地区－

近代に入り、明治政府は地租改正を行う。その際、都留郡では1875年（明治８年）、「地券取調事務所」が開かれ各村の代表者の協議の結果、田方収穫村等級表（表13）、畑方収穫村等級表が作られ土地の等級について協議した[23]。この協議の結果が地価に直接に反映されたものではないにせよ、当時の花咲村が比較的良好な耕地を有する状態であったことをうかがうことができる。

表13　1875年田方収穫村等級表

	上	中	下
1等			
2等		大月、駒橋	中初狩、殿上、猿橋
3等	下初狩、花咲、鳥野	浅利	猿渡、鳥沢、田倉、宮谷、白野、小篠、藤崎、小沢
4等		浦郷、鳥沢、田倉、宮谷、白野、小篠、藤崎、小沢	
5等	吉ケ久保	上新倉、黒野田	網の上、奥山、立野、塩瀬、朝日小沢、林
等外	奈良子、瀬戸、下浅川、下鶴皇		

明治政府は後年、陸軍省に陸地測量部をつくり、全国の地形図を作成するようになる。地形図を通して土地利用などを把握できるようになった。村絵図で「柴山」とされた場所は、1889年（明治22年）[24]の地図では草地や茅原と表記されている。花咲用水の末端の富士見台地区は畑となっている。このことは、３（１）に記した用水の上流部ほど開削の効果が大きいことの裏返しの結果でもあると考える。

昭和に入り周辺の草地、茅原は桑畑になり[25]、現在は針葉樹林や広葉樹林となっている。茅原、草原は耕地への肥料の供給源である。肥料としての草の需要が減ったことにより、後背地を必要としなくなったことを物語っ

ている。

このような経過の中で、用水のあり方も変化する。花咲用水は現況に記したように、上花咲区を過ぎると山腹を大きき切り開く近世の近世の土木工事と考えられる姿で流れている。そこで、その先に広がる富士見台地区の「田場」に注目しておきたい。富士見台地区は1962年より住宅の開発が始まり、現在耕地はほとんど存在しない状況にある。この地区の用水の通水も停止している。

このことについて前述の小穴は、耕土の深度からみた長野県内の水田開発の歴史を類型化し、20cm内外の深度を持つ浅い耕土帯について「開拓は近世以後であり、多量の水を得るため他の水量豊かな水系より導水した大規模な横断用水路を開削している。」[24] と記している。同様に70cm以上の耕土帯は、須恵器・土師器の出土や後期古墳の存在から「原始開発が先行した」[25] 地域、70～50cmの深度では「中世に遡る交通路・古寺社・居館址・市場等が立地する。」[26] と類型的に述べている。

富士見台地区には発掘調査中の堂地遺跡があり、縄文時代の遺物等が出土している。遺跡の土層から、耕土帯は10cm前後と確認できる。この深さは、小穴の指摘に従えば開田された時期が中世に遡る可能性は低いものとされる。近代の地形図では、この地区の末端は畑になり、その後地区の大半が桑畑に変化している。用水の末端あるために「田場」であるにもかかわらず、水利の恩恵を他の地区と比べて十分に得にくいものと推察される。そのために、この地域特産の郡内織りのさらなる発展にともない、畑から桑畑に変化していったものと推察することができる。しかし、地域の織物業の衰退とともに農業用水そのものも不要となってしまい、地区の考えとして通水を停止している。

5. まとめ

以上のような形で花咲地区に関わる文献を確認し、現地を踏査することができた。まとめとして、改めて以下の点を確認したい。

①開村の時期と花咲用水

- 文献資料より、花咲村の存在は中世に遡ることが確認できる。
- 慶長の古高において確認できる300石の村高を維持するための用水施設の存在は欠かせないものであるため、花咲用水の開削も開村時に遡るものと考えられる。
- 取水口から上花咲区西側で分岐し、花咲用水関連遺跡を通る流路には、その形状から近世以前の開発の特徴をうかがうことができる。

②用水の改修の時期と村高への影響

- 江戸時代中ごろ【1757年（宝暦７年）】に描かれた村絵図には花咲用水の形が現況（大きな２本の水路）とほぼ一致する形で描かれていた。
- その約90年前【1669年（寛文９年）】の段階で360石に村高を増加させている。
- 上花咲区西側から富士見台地区に至る花咲用水の流路には近世の土木工事の特徴をうかがうことができる。
- 富士見台地区への流路には、途中沢を上樋で通過する箇所がある。上下花咲区の旧来の耕地への引水を補完した意図をうかがうことができる。
- 享保10年の領郷帳や村絵図の記述、地租改正時の評価などから花咲村は都留郡の多くの村と異なり、良好な田の多い村であることを確認することができる。
- 花咲村に対する江戸時代の年貢は、米以外のさまざまな小物成にあまり依拠しない傾向にあったことを領郷帳から読み取ることができ、米の生産が多い地域であることをうかがうことができる。

③新たに開かれた耕地

- 村絵図や踏査した結果等をもとに増加した耕地を推定すると、用水の末端部である村の東側に多く広がるものと考えられる。
- 富士見台地区は花咲用水以外には十分な水を確保しづらい地形にある。
- 富士見台地区は耕土が浅い傾向にあるとともに、近代に入り早い段階で田から畑、桑畑へと土地利用が移行している。

以上のことから花咲用水は近世以前に存在し、近世初頭である寛文の検地（1669年）実施までの間に改修工事が行われたものと考えられる。改修工事の結果、村の東端の富士見台地区を中心に新たな耕地が開かれ、村高を約２割増加させることができたものと考えられる。

村の生産を支える用水路についての記録、とりわけ近世以前の開削を裏付ける文献資料は、一般的にきわめて少ない状況にある。今回の花咲村についても同様であり、村方資料にあまり依拠しないかたちで開削の時期や改修の時期、新田開発の範囲などを推定することとなった。限られた資料のなかで、用水路を通して地域の生産の歴史を明らかにすることができたものと考える。

1 「山梨県史　資料編５中世２上　県外文書」（山梨県）2004年　p.165　391国立歴史民俗博物館所蔵島津家文書

2 佐藤八郎校訂「甲斐国史補記　士庶部18　大日本地誌大系48甲斐国史第５巻」（雄山閣）1982年　p.146

3 同書p.495　1075東京大学史料編纂所蔵島津家文書

4 秋山敬「山梨の荘園」（甲斐新書刊行会）2005年　p.201

5 秋山前掲書　p.202

6 「大和村誌上巻」（大和村）p.559

7 荻野三七彦・柴辻俊六編「甲州古文書　第３巻」p.27

長生寺文書2045「小山田信茂寺領書立（二）」、なお児玉幸太編「甲州街道分間絵図　第４巻解説編」（東京美術）1985年p.38によると下花咲の西方寺は、「はじめ禅宗寺院で廃跡したものを慶長６年再興した」と記されている。

8　「大和村誌上巻」（大和村）p.558

9　「大月市史　史料編」（大月市）1976年　p.175

10　「大月市史　史料編」挿図

11　真木の前沢という地名は日本電気大月工場建設にともない発掘された遺跡にも現在その名前を見ることができる。

12　小穴喜一「土と水から歴史を掘る」（信毎書籍出版センター）1987年　p. 6

13　同書前掲　p.26

14　児玉幸太監修「甲州道中分間絵図」第４巻（東京美術）1985年

15　「山梨県史　通史編３　近世１」（山梨県）2006年　第４章近世の村、第１節近世初期の検地　p.336

16　同書前掲p.337

17　同書前掲p.337

18　同書前掲p.338

19　甲斐叢書刊行会編「甲斐叢書　１巻」（第一書房）1974年　「甲斐国四郡古高帳」p.223～276

20　「山梨県史　資料編12　近世5在方Ⅲ」（山梨県）2001年　p74　６都留郡村高帳　富士吉田市菅沼徳政家蔵

21　「甲州文庫資料　第４巻　甲斐国村高並村明細帳編」（山梨県立図書館）1975年

22　「大月市史　史料編」（大月市役所）1976年　統計－近世－　p.955～965

23　「甲州文庫資料」前掲p. 2

24　安藤正人「民間所蔵史料の保存・管理に関する研究」（平成６年度科学研究補助金研究成果報告書）1995年に付随する目録より。史料NO. 7

25　例えば教育出版社「中学社会　歴史」では「17世紀の末には全国の耕地面積は、豊臣秀吉のころの約２倍になりました」p.108と記述されている。

26　「山梨県史　通史編３　近世１」第７章治水と利水　第2節水利　p.935

27　「角川地名大辞典」前掲　下初狩村（p.446）、花咲村（p.668）

28　「大月市史　史料編」（前掲）統計－近世－　p.955

29　「山梨県史　通史編３　近世１」第５章地域の産業　第２節東郡の養蚕業　p.532

30　安藤正人　前掲書　史料NO.801、1057、1061

31　「大月市史　通史編」p.709　表15の出典は「初狩村誌草稿」による

32　１：20000地形図「猿橋」「谷村」（前掲）

33　１：25000地形図「大月」（陸地測量部）1931年

34　小穴前掲書　p.161

35　小穴前掲書　p.161

36　小穴前掲書　p.161

研究紀要１号～30号執筆者一覧

１号　坂本美夫　甲斐の（評）郷制
　　新津　健　金生遺跡発見の中空土偶と２号配石
　　小野正文　縄文時代早期・前期初頭の土器について
　　－釈迦堂遺跡群を中心として－
２号　保坂康夫　山梨県下の先土器時代資料の検討－１－
　　小野正文　所謂円錐形土器に就いて
　　新津　健　石剣考
　　－中部、関東を中心とした出土状況から－
　　中山誠二　甲斐における弥生文化の成立
　　坂本美夫　辻金具・雲珠考
３号　長沢宏昌　縄文時代前期末～中期初頭の土器底部にみられる編物痕について
　　田代　孝　山梨の三角埼土製品
　　末木　健　巨麻郡の成立と展開
　　坂本美夫　甲斐国府－その環境と展望－
　　笠原安夫・藤沢　浅
　　上の平遺跡住居址から出土した炭化種子の同定
　　長沢宏昌・中山誠二
　　付記　種子検出方法と、検出種子の意義について
４号　長沢宏昌　山梨県内出土縄文土器の底部圧痕について
　　中山誠二　弥生時代終末における上の平遺跡の集落構造
　　小林広和　縄文時代の土壌について
５号　末木　健　甲斐仏教文化の成立
　　森　和敏　甲府盆地における条理型地割の事例
６号　浅利　司　絡条体圧痕文を有する土器について
　　－中込遺跡出土の資料を中心に－
　　森原明廣　関東地方におけるカマド初現をめぐって
　　保坂康夫　立石遺跡発掘調査報告
　　－1989年国道358線拡幅等に伴う調査－
　　河西　学　立石遺跡での先土器遺物を包含する地層
７号　中山誠二　身洗沢遺跡における外来系土師器の諸例
　　今福利恵　身洗沢遺跡出土の木製品
　　千野裕道　身洗沢遺跡出土木製品の樹脂について
　　松谷暁子　身洗沢遺跡出土の植物種子について
　　外山秀一　山梨県身洗沢遺跡の立地条件と稲作
８号　新津　健　金生遺跡の土器１（後期）
　　出月洋文　両の本神社出土の須恵器長頸瓶について
　　間島信男・河西　学・保坂康夫
　　山梨県甲府市相川河床から発見されたナウマンゾウ臼歯化石について
　　松谷暁子・長沢宏昌
　　明野村中村道祖神遺跡出土炭化種子について
９号　織貝正義　いわゆる「東国道」について
　　保坂康夫　縦群と個体消費の関わりについて
　　今福利恵　勝坂式土器成立期の集団関係
　　新津　健　縄文時代中期後半の集落②
　　－千葉県高根木戸遺跡の分析－
　　末木　健　縄文時代生産活動と石器組成分析
　　中山誠二　甲斐弥生土器編年の現状と課題
　　－時間軸の設定－
　　小林健二　外来系から在来系へ－甲斐のS字甕の変遷－
　　森　和敏　柱の礎石のある竪穴住居址
　　森原明廣　山梨県地域における内耳土器の系譜
　　平山　優　甲府城の史的位置－甲斐国織豊期研究序説－
　　坂本美夫　山梨県における月待信仰について
10号　長沢宏昌　甲府盆地周辺にみられる縄文時代中期の土壙墓と土器棺再葬墓
　　－井戸尻Ⅱ式～曽利１式の場合－
　　五味信吾・野代幸和
　　山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡出土埃坦の産地同定（１）－赤外線吸収スペクトル分析－
　　新津　健　金生遺跡出土の土器２（晩期）
　　高橋みゆき　山梨県東八代郡中道町金沢出土の土師器瓦泉について
11号　宮里　学　縄文時代の石器再考－打製石斧（１）－
　　田代　孝　中世六十六部聖の奉納経筒について
　　柏木秀樹　近世軒平瓦の分類について
　　－甲府城を例にして－
　　高野玄明　県道塩平～窪平線拡幅工事に先立つ牧丘町曲田遺跡調査報告
　　小野正文　甲府市八幡神社採集の縄文土器
12号　坂本美夫　剣菱形杏葉類の階層制とその背景
　　吉岡弘樹　経塚古墳についての予察
　　柏木秀樹　近世軒瓦の分類について
　　－甲府城を例にして－
　　佐野和規　山梨県内考古資料の教材化
　　－学校現場へのアンケート調査に基づいて－
　　澤登正仁　歴史教育実践と考古学の関連についての一考察
　　－考古学の成果を取り入れた授業から考えたこと－
　　大谷満水　ユング心理学を導入した縄文時代の満巻文の解釈
　　坂本美夫　山梨県における中・近世石塔資料
13号　田代　孝　近世の回国塔と回国納経
　　長沢宏昌　都留市中谷遺跡出土の縄文土器底部圧痕について
　　保坂康夫　山梨県下の遺跡・住居址数変動と通史的理解
　　大場　勝　考古資料の教材化についての一考察
14号　新津　健　山梨における後晩期土偶の展開
　　山本茂樹　清里バイパス第１遺跡の陥し穴の若干の検討
　　森　和敏　４基の前方後円墳の設計－山梨県における－
　　野城幸和・鈴木由香
　　八代町瑞伽寺遺跡および山梨市七日子（廃寺）
　　石神孝子　甲斐における古墳時代中期の墓制について
　　－曽根丘陵の円形低墳墓－
15号　李　永福　長江デルタ地帯における新石器時代文化集団の移動及び縄文文化へのその影響
　　野代幸和　縄文時代前期後半から中期初頭段階における異系統土器の流入の様相について
　　－山梨県に見た出土事例を中心に－
　　市川恵子　縄文時代前期板状土偶から中期河童形土偶へ
　　－御坂町柱野遺跡出土土偶に関する一考察－
　　新津　健　縄文晩期後半遺跡分布の意味と課題
　　－山梨における遺跡の継続性と立地から－
　　山本茂樹・網倉邦夫
　　甲ッ原遺跡発掘調査報告書
　　（平成10年３月３日から３月26日）
　　小林公治・吉田純子・樋泉岳二
　　大月市御所遺跡から検出された動植物遺体とその性格（１）

笠原みゆき　大月遺跡の敷石住居について
保坂康夫　御嶽使川扇状地の古地形と遺跡立地
－中部横断道の試掘調査の成果から－
河西　学　中部横断道試掘調査のテフラ分析
小林健二　塩山市西田遺跡国区２号住居跡出土土器の再整理
石神孝子　山梨市牧洞寺古墳採集の須恵器について
南宮加代子　山梨県内出土木製品について
崎田　哲　甲府城の鬼門守護と除災招福の思惟
－稲荷曲輪にみる一考察－
坂本美夫　〈資料紹介〉高根町箕輪横森前墓地所在の地蔵陽刻板碑
坂本美夫　山梨県における月待信仰について
－文献を中心として－
16号　長沢宏昌　山梨県における縄文時代早期末の様相
小林公治・中野益男・中野寛子・長沢宏昌
磨石・敲石類・石皿と注口土器の使用法に関する一事例
－大月遺跡出土縄文土器・石器に対する残存脂肪酸分析と考古学的検討－
野代恵子　方形周溝墓にみられる儀礼的廃棄に関する一視点
－境川村諏訪尻遺跡の事例より－
保坂康夫　東原遺跡の平安時代集落の構造
－実年代軸の設定と集団表象論の試み－
野代幸和　横森赤台（東下）遺跡出土五輪塔の形態と制作年代について
宮里　学　県指定史跡甲府城の地鎮祭痕
－敷寄屋勝手門周辺の遺物集中地点とその意味－
南宮加代子　考古博物館カルチャークラス「銅鏡づくり教室」での制作について
坂本美夫　山梨県における月待信仰について
－塩山市小屋敷の二十三夜堂を中心に－
17号　三森鉄治　道々芽木遺跡の土馬と土馬祭祀の起源
宮久保真紀　甲府城築城における一条小山の選地について
－蔵風得水の思想と甲府城－
保坂康夫・望月明彦・池谷信之
黒曜石産地と石材の搬入・搬出
－丘の公園第２遺跡の原産地推定から－
三田村美彦　山梨における早期沈線文土器群後半の様相
－談合坂遺跡出土土器の検討を通じた予察－
田口明子　弥生時代の大型打製石斧は農耕具か
－山梨県出土事例をもとに－
依田幸弘　御嶽使川扇状地北部の集落展開について
－大塚遺跡・石橋北屋敷遺跡を中心に－
小柳美樹　大沢遺跡における副葬石斧への理解
－「中国四川省古代文物展」を通じて－
吉岡弘樹　塩瀬下原遺跡出土の釣手土器について
湯川秀一　埋蔵文化財センターが行う学校への教育普及活動に関する一考察
－「総合的な学習の時間」にどのように対応したらよいか－
田中宗博　発掘調査と並行した資料普及活動に関する一考察
坂本美夫　山梨県における中・近世石塔資料
18号　新津　健　縄文中期鈎手土器考②
笠原みゆき　塩瀬下原遺跡出土の敷石住居について
三森鉄治　山梨県内における出土銭貨の現状と課題
小林　稔　鰍沢河岸跡出土の泥面子について
宮久保真紀　甲府城内葡萄酒醸造所について
－国産ワインの発祥地甲府－
樋泉岳二・小林公治
大月市大月遺跡（第７次調査）出土の植物遺体
奥本達司　横貫前久久保遺跡出土黒曜石のフィッショントラック年代測定
坂本美夫　山梨県の中世石仏
－地蔵石仏（光背形）を中心として－
19号　保坂康夫　台形様石器にみられる「急角度微細加工」の実験的検討
三田村美彦　山梨の縄文時代早期沈線文土器群終末期前後の検討
小野正文　山梨県の木島式土器について
網倉邦夫　天神遺跡出土石匙の起源と系譜
長沢宏昌　山間地の漁労と打欠石錘の用途
新津　健　上の平遺跡出土の動物装飾付土器とその周辺
五味信吾　山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡出土琥珀の産地同定（２）
－その後の研究成果とともに－
野代恵子　音の鳴る土偶（２）－‘笛’という機能の可能性－
今福利恵　（研究メモ）山梨県における勝坂式土器後半期の素描
小林広和　渦巻把手状装飾土器の展開
－渦巻突起連結土器から渦巻把手土器へ－
三森鉄治　米倉山B遺跡出土六洞銭と煙管・火打金に関する基礎的研究
長田　泉・寺川政雄・宮里　学
稲荷橋公治における強度試験監視計測について
楠岡美季江　矢穴に関する一考察
－甲府城跡石垣の事例より－
宮久保真紀　甲府城葡萄酒醸造所生徒に関する諸資料について
浅川一郎　甲府盆地の液状化に関する資料
村石真澄　土層堆積観察記録の課題
野代幸和　土器に施された文様とその意味について（一思案）
－中国西南地域の少数民族衣装に見られるその文様から－
北垣聡一郎　丹波山村『お松ひき』にみるソリについて
南宮加代子　動物形土製品の来館者によるアンケートから
～これは何に見えますか？～
坂本美夫　山梨県の中世石仏－地蔵塚地蔵石仏－
－塩山市延命院の十三仏－
20号　保坂康夫　天神堂遺跡の礫群・配石
渡辺　誠　人面・土偶装飾付有孔鍔付土器の研究
小林広和　渦巻把手状装飾土器の末裔
今福利恵　甲斐国玉麻郡における古代牧についての一視点
坂本美夫　山梨県の中世石仏－六地蔵石幢（単性）－
21号　渡辺　誠　人面装飾付土器の再検討
末木　健　甲斐と河内の馬
今福利恵　甲斐国山梨郡・八代郡・都留郡における古代牧についての一視点
坂本美夫　山梨県の中世地蔵－地蔵塚地蔵石仏－
22号　渡辺　誠　山梨県出土の人面・土偶装飾付深鉢形土器
末木　健　環礫方形配石遺構の復元について
－塩瀬下原遺跡敷石住居から－
保坂康夫　縄文時代の剥片剥離手法
－酒谷遺跡跡出土黒曜石石核の分析から－

小林健二　山梨県出土の鋸内系叩き甕に関する覚書
－甲府市塩部遺跡の調査から－
石神孝子　笛吹市御坂町亀甲塚古墳出土管玉の再整理
坂本美夫　山梨県における月待信仰について
－二十三夜和讃（一）－

23号　新津　健　土器を飾る猪
～山梨を中心とした猪造形の展開～
坂本美夫　春日居町鎌日某古墳出土の素環鏡板付轡
末木　健　墨書土器ネットワークの検討－甲斐国巨摩郡の事例－
吉岡弘樹　宮の前遺跡出土の縄文土器
野代恵子　横掘遺跡出土の条痕文期土偶
小林健二　甲府盆地から見たヤマト（1）
－甲斐銚子塚古墳出土の腕輪形石製品－
石神孝子　伝中央市（旧東八代郡豊富村）出土初期須恵器について
小林謙一・遠部　慎・宮田佳樹・松崎浩之・正木季洋
塚越遺跡の14C年代測定

24号　新津　健　山梨の石棒～出土状態の整理と課題～
小林広和　出産突起土器の出現背景
保坂康夫・野代幸和・長沢宏昌・中山誠二
山梨県酒呑場遺跡の縄文時代中期の栽培ダイズ Glycine max
野代幸和　北杜市（旧長坂町）酒呑場遺跡の土坑について
－第１～２次調査（A～E区）を中心に－
末木　健　甲斐のヤマトタケル伝承
上原健弥　線刻画石材の表面保存処理について
－県指定史跡甲府城の事例から－
野代恵子　鰤沢河岸跡の窟古壺
小野正文　北杜市岩久保遺跡・中原遺跡の出土資料

25号　保坂康夫　山梨県甲州市安道寺遺跡の特殊な土器埋納遺構
新津　健　金生遺跡１号配石の構成と系譜
～縄文晩期大規模配石の背景にむけて～
末木　健　「布施荘」小井川遺跡をめぐって
野代幸和　県指定史跡甲府城出土の中世丸瓦について
長田隆志　旧宮崎造園所蔵の「かぐらさん」について

26号　小野正文　物語性文様について２
末木　健　縄文中期の抽象文世界－龍か山椒魚か蛾か－
福垣自由　古墳時代における土製模造鏡祭祀についての一考察
－土製模造鏡出土遺構の分析を通じて－
古川明日香　甲斐国造日下部氏の再評価
－「古事記」・「国造本紀」の系譜資料を手がかりに－
米田明訓　博物館における青銅鏡作り体験の実際的方法
野代幸和　県指定史跡甲府城出土の石工具について

27号　古川明日香・岡　敏郎・山田晋司
文禄・慶長期石垣における「巨石」に関する一考察
－甲府城跡石垣を事例として－
小沢美和子　資料調査における近赤外線撮影の活用
－考古資料に用いられた赤色顔料判別の試み－
望月和佳子・宮里　学
県指定史跡甲府城跡石垣への落書き対応策の検討
－子供たちによる落書き消しイベント報告－
雨宮加代子・長谷部久樹・米田明訓
博物館における青銅鏡作り体験の実際的方法２
－三珠大塚古墳出土六鈴鏡の復元と青銅器制作体験プログラムの導入について－

28号　米田明訓　県立考古博物館における「博学連携」の現状と課題
保坂康夫　酒呑場遺跡の石皿と石棒
此田千紘　甲府城の絵図に関する再評価
－『楽只堂年録』第173巻所収「甲府城絵図」を一例として－
岩下友美　山梨県と周辺地域における近現代の石積技術
－「石積の秘法とその解説」から辿る石積技能者大久保氏の系譜－
西海真紀　柳沢家筆頭家老柳沢権太夫保格の墓所について

29号　三田村美彦　酒呑場遺跡出土の未発表資料について
小林健二　甲府盆地から見たヤマト（２）
－銚子塚古墳出土の帝形埴輪－
野代幸和・長田隆志
甲州石大工道具について
－多様な石材の意義の考察－

30号　保坂康夫　石匙の贈与論的役割
－甲斐銚子塚古墳出土の円筒埴輪－
中山誠二・今福利恵
美通遺跡における植物圧痕の同定
今福利恵　山梨県北杜市古林第４遺跡における縄文集落分析
三田村美彦　塩瀬下原遺跡出土の考古資料について
五味信吾　古代甲斐国の剣（関）
－桑原南遺跡の大型建物－
野代恵子　子どもたちに考古学の楽しさを！
－出前授業の実践より－

研　究　紀　要　31

発　行　日　2015年３月31日
編集・発行　山梨県立考古博物館
山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町923
ＴＥＬ　055-266-3881・055-266-3016
E-mail：kouko-hak@pref.yamanashi.lg.jp
E-mail：maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

印　　刷　株式会社 峡南堂印刷所